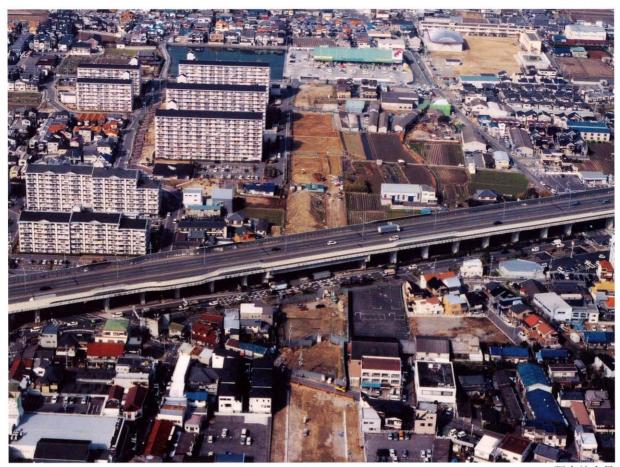
余部日置荘遺跡

大阪府教育委員会

あまべ ひきしょういせき 余部日置荘遺跡

- 主要地方道大阪狭山線改良事業に伴う発掘調査 -

大阪府教育委員会



調査地全景



A · B区全景



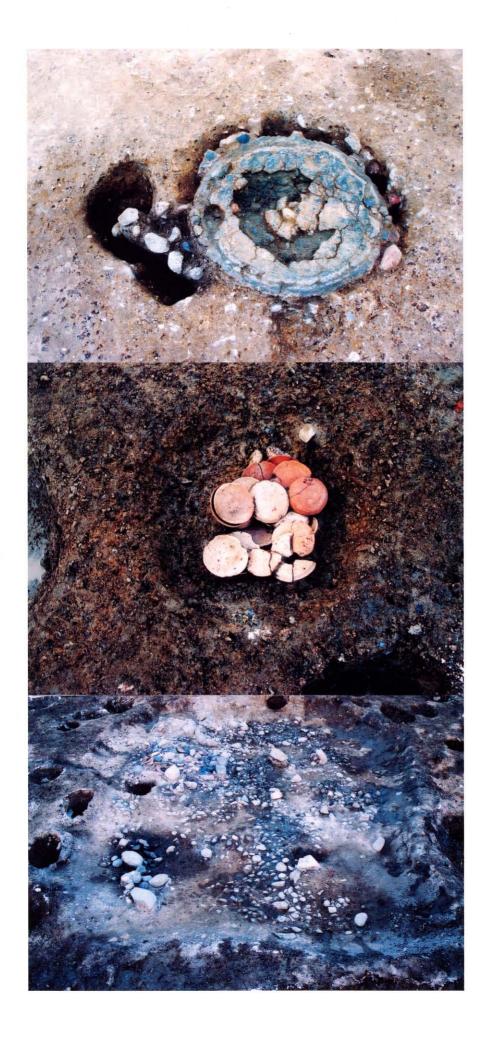
C区全景



余部城西堀



G区南部



序 文

余部日置荘遺跡は、南河内郡美原町余部に所在する余部遺跡と堺市日置荘の日置荘遺跡として 知られてきましたが、平成17年の市町合併により、遺跡名称も上記のように改められました。

この遺跡が所在する南河内郡丹南地区は梵鐘や仏具などの銅製品や河内鍋と称された鉄鍋などの鋳造に携わった河内鋳物師の本拠地として知られています。今回の調査地周辺でも近畿自動車道松原すさみ線建設や府営北余部住宅建設に先立って実地された調査で、仏具の馨と鍋の鋳型や溶解炉跡など、鋳造に関わる遺物や遺構が数多く見つかっています。

今回、この地域を南北に貫く幹線道路である大阪狭山線が狭小であることから、新たな道路を 建設することになり、工事に先立って、平成15年度から17年度にかけて発掘調査を実施しまし た。

調査の結果、鎌倉時代頃の方形の溝で区画された屋敷跡や鋳物の鋳造工房跡が見つかりました。 また、近畿道の調査で確認された「余部城」の堀が見つかり、北側の堀が二重であったことや江 戸時代初め頃まで機能していたことが判明しました。

本書は現場調査の終了後、平成18、19年度に行った整理作業の成果を纏めたものです。

本書が鋳物師の里としてのこの地域の歴史をより豊かなものとする一助になれば幸いです。 本調査にあたり、大阪府都市整備部をはじめ、堺市建設局、堺市教育委員会、旧美原町教育委員 会、および地元住民の皆様を初めとする関係各位からご指導とご協力を賜りました。深く感謝い たします。

今後とも文化財保護行政にご理解、ご協力を賜りますようにお願い申し上げます。

平成20年3月

大阪府教育委員会 文化財保護課長 富尾 昌秀

例 言

- 1. 本書は大阪府都市整備部から依頼をうけ、大阪府教育委員会が実地した主要地方道大阪狭山 線道路改良事業に伴う堺市美原区(平成17年1月までは南河内郡美原町)北余部所在、余部 日置荘遺跡(平成17年1月までは余部遺跡)の発掘調査報告書である。
- 2. 現地調査は大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ技師阿部幸一が担当し、平成 15年度から平成17年度まで実地した。遺物整理は平成18、19年度に阿部と調査管理グループ 主査三宅正浩と技師藤田道子が担当した。
- 3. 本調査の調査番号は平成15年度が03040、平成16年度が04024、平成17年度が05006である。
- 4. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
- 5. 本調査の写真測量は、平成15年度が株式会社サンヨー、平成16年度が株式会社日建技術コンサルタント、平成17年度が株式会社国土開発センター、及び、株式会社アスコに委託した。 撮影フィルムは各測量受託会社が保管している。
- 6. 調査で作成した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会で保管している。
- 7. 本書は阿部が執筆、編集した。
- 8. 発掘調査に要した経費は大阪府都市整備部が負担した。遺物整理ならびに本書の作成に要した経費は、当該事業を堺市が引き継いだため、堺市建設局道路部が負担した。
- 9. 本報告書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、2,200円である。

凡例

- 1. 遺構番号は本書と調査の整合性を考慮し、現地調査で使用した番号を踏襲した。各年度毎に 001から番号を付したため、03-**、04-**、05-**と西暦年番号を頭に付けて掲載した。
- 2. 挿図の方位は、国土平面座標系第 VI 座標系に基づく座標北で示した。当地区の座標北は真北より 0°16′西に振っている。
- 3. 本書における水準点はT.P.値(東京湾標準潮位)で示した。
- 4. 本書で記載した土色は、小山正忠、竹原秀夫編著『新版標準土色帖』22版(1999年)を使用した。
- 5. 中世土器に関しては、中世土器研究会1996『概説 中世の土器・陶磁器』を参考にした。
- 6. 現地における調査で、各遺構は基本的に北半分を掘削し、埋土の堆積状況を観察した。このため、掲載した遺構断面図は南を上にするものが多い。また、建物跡柱列の断面も南を上にして掲載したため地山面が連続しない図面を掲載したものが多い。違和感はあるが調査時の観察結果を編集せず提供する試みである。

目 次

老 頭凶励	巻頭図版 2 C区全 巻頭図版 3 上 C	登地全景(05年 景 区南部と余部場 1 05 - 700SP	这西堀 下		
は例凡第第第 第 し 123第第4 が言例章章章12章	調査に至る経緯と経過・ 立地と環境 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·				3
第1節					
第 2 飲 第 3 飲					
第5章	まとめ				105
71 1		挿 図			
第1図	余部日置荘遺跡調査位置	関係図			2
第2図	余部日置荘遺跡と周辺の	遺跡		•••••	5
第3図	遺跡の位置と地区割り概	念図・主な調査	[位置	•••••	6
第4図	A区土層断面図				
第5図	B、C区土層断面図 …				
第6図	D、E区土層断面図 ···· F、G地区土層断面図 ·				
第 7 図 第 8 図	区画溝05-105SD平面図	1			5・16(折込)
第9図	区画溝05-105SD平面図	2			9・20 (別及)
第10図	05-105SD出土土器実測	☑ 図 1 ···································			22 (1) (2)
第11図	05-105SD出土土器実測	図 2		•••••	24
第12図	05-105SD出土石塔実測	図			25
第13図	A区、G区建物位置図·				$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
第14図	建物1平面・断面図 …	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	27
第15図	建物2平面・断面図 …				
第16図					~ .
第17図	C IN I I I III I				
第18図				***************************************	
第19図	建物 6 平面・断面図 …			•••••••	
第20図	ON THE MAIN			•••••	30
第21図	建物8平面・断面図 …			 i・断面図	00
第22図 第23図	溶解炉1 (05-600SK) 05-275SE平面・断面図	溶解炉 2 (05-			
第23図 第24図	05-275SE平面·断面図 05-950SE平面·断面図				01
第25図	05-555SK平面図				02
第26図	05-777SK平面・断面図				00
第27図	05-555SK出土遺物実測			•••••	
第28図	05-900SK出土遺物実測				
第29図	05-268SK平面・断面図				
第30図	05-900SK平面・断面図				00
第31図	05-270SK平面・断面図				00
第32図	05-270SK出土遺物実測	<u> </u>		•••••	00
第33図	05 - 277SK, $05 - 280$ SK,	、05-304SK平	面・断面図…	•••••	36

第34図	05-304SK出土遺物実測図	37
第35図	05-325SK平面・断面図 ····································	37
第36図	05-335SK平面・断面図 ····································	37
第37図	05-445SK平面・断面図	38
第38図	05-450SK平面・断面図	38
第39図	05-538SK平面・断面図	38
第40図	and the control of th	38
第41図	A PART TO THE STATE OF THE STAT	39
第42図	05-591SK平面・断面図	39
第43図	05-539SK平面・断面図	39
第44図	05-539SK出土遺物実測図 ······	40
第45図	A 区各遺構出土土器実測図 1 ···································	40
第46図	05-209出土土器実測図	41
第47図	05-700SP平面·断面図	41
第48図		41
第49図	05-772SP平面・断面図	41
第50図	05-701SP平面·断面図	41
第51図	05-843SP平面·断面図	42
第52図	05-867SP平面·断面図	42
第53図	05-869SP平面·断面図	42
第54図	A区各遺構出土土器実測図2 ·······	43
第55図		45
第56図	05-1055SP、05-1056SP平面・断面図···································	
第57図		45
第58図		45
第59図	05-1055SP、05-1056SP出土土器実測図	46
第60図	05 - 1058SP、05 - 1059SP出土土器実測図······	46
第61図	05-1059SP平面・断面図 ····································	47
第62図	05 - 1439SP平面・断面図 ····································	47
第63図	05 - 1439SP平面・断面図 05 - 1449SP平面・断面図	47
第64図	05-1439SP、05-1449SP出土土器実測図	
第65図	05-920SK平面・断面図 ····································	18
第66図	05-920SK出土土器実測図 1 ······	18
第67図	05-920SK出土土器実測図 2 ···································	10
第68図	05 - 980SK平面·断面図 ··································	40
第69図	05 - 982SE平面·断面図 ··································	50
第70図	05 - 902SE 子面・断面図 ····································	50 50
第71図	and the state of t	50 51
第72図	05-10405E + 圖 + 断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	51 51
第73図	05 - 1045SK出土土器実測図 ······	51 52
第74図	05-10455K出工工研关例因 05-1100SK (池) 平面・断面図 ····································	52 53
第75図	建物 9 平面・断面図	ეა 54
	建物10平面・断面図	~ -
第76図 第77図	A区各遺構出土土器実測図 3 ···································	54 55
第78図	A区各遺構出土土器実測図 4 ···································	55 56
	A区各遺構出土土器実測図 5 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	56
第79図	A 、 B 区 各 遺 構 出 土 土 器 実 測 図 6 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	57
第80図		
第81図	B区05-1336SP出土土器実測図	59 co
第82図		60
第83図		61
第84図	A区各遺構出土土器実測図 9 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	62
第85図	A、B区各遺構出土土器実測図10 ······	63
第86図	A、B区各遺構出土土器実測図11 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	63
第87図		64
第88図	05-1115SK平面・断面図	
第89図	B、C区(04、05年) 建物位置図	66

第90図		67
第91図	建物12平面・断面図	
第92図	建物13平面・断面図	
第93図	建物14平面・断面図	
第94図	建物15平面・断面図	68
第95図	建物16平面・断面図	69
第96図	04-470SK平面·断面図 ······	69
第97図	04-550SK (池) 平面・断面図	70
第98図	04-620SK平面・断面図	71
第99図	04 - 475SK平面・断面図 ····································	
第100図	05-1300SK平面・断面図	
第101図	05-1332SK平面・断面図 ····································	72
第102図	05-1351SE平面・断面図 ····································	72
第103図	05-1328SD平面・断面図 ····································	73
第104図	05-1328SD踏み石部平面・断面図 ····································	73
第105図	04-490SD、04-500SD断面図 ····································	74
第106図	05-1200SD 断面図 ···································	74
第107図	04-525SD平面・断面図 ····································	74
第108図	04-725SD平面図····································	74
第100図	屋敷地内柱穴平面断面図	76
第110図	屋敷地内溝他出土土器実測図	77
第111図	04-470SK出土土器実測図 ····································	78
第112図	04-620SK出土土器実測図 ····································	78
第113図	04-550SK出土土器実測図 ······	79
第114図	04-589SP出土土器実測図 ····································	79
第115図	04-727SP出土土器実測図 ····································	79
第116図	04-475SP出土土器実測図 ······	80
第117図	建物17平面・断面図	81
第118図	建物19平面・断面図	81
第119図	建物18平面・断面図	81
第120図	建物20平面・断面図	82
第121図	建物21平面・断面図	82
第122図	04-350SD、04-400SD断面図 ····································	83
第123図	04-350SD、04-400SD出土土器実測図 ····································	83
第124図	04-616SE平面・断面図 ····································	84
第125図	04-616SE出土土器実測図 ····································	84
第126図	04-727SK平面・断面図 ····································	85
第127図	04-480SK平面・断面図 ····································	86
第128図	04-481SK、04-482SK平面・断面図 ····································	86
第129図	04-430SK平面・断面図 ····································	86
第130図	04-442SK平面・断面図 ····································	86
第131図	04-450SK平面・断面図 ····································	87
第132図	04-604SK平面・断面図·······	87
第133図	04-607SK平面・断面図 ····································	87
第134図	04-612SK平面・断面図 ····································	87
第135図	04-700SK平面・断面図 ····································	88
第136図	04-676SK平面・断面図 ····································	88
第137図	04-673SE出土土器実測図 ····································	89
第138図	04-700SE出土土器実測図 ····································	89
第139図	C区北部各遺構出土土器実測図 ····································	90
第140図	C地区各遺構出土土器実測図 1 ·······	91
第141図	建物22平面・断面図	92
第142図	建物23平面・断面図	93
第143図	建物24平面・断面図	93
第144図	04-068SK平面・断面図 ····································	94
第145図	to the state of th	95

第146図	04-011SK、04-012SK、04-019SK平面・断面図 建物25平面・断面図 04-080SK、04-138SK平面・断面図	95
第147図	建物25平面・断面図	96
第148図	04-080SK、04-138SK平面・断面図 ····································	96
第149図	04-030SK平面・断面図 ····································	97
第150図 第151図	04-085K平面·断面图 ··································	97
第151図	04-030SK	. 98 . 00
第152図	04 090SK 中間・断面図 04 - 103SK、04 - 149SK 平面・断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第155区	04 1055K、04 1455K 岡 - 岡田区 04 - 985SK平面・断面図	99 100
第155図	04-348SK平面·断面図··································	100
第156図	04 - 285SK平面・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·100
第157図	- 04-357SK、04-360SK、04-361SK平面・断面図 ····································	101
第158図	04-674SK平面・断面図 ····································	101
第159図	04-採土坑平面・断面図	$\cdot 102$
第160図	C区各遺構出土土器実測図 2 ···································	103
第161図	C区各遺構出土土器実測図 3 ···································	
第162図	04-200SK、04-301SK出土土器実測図	104
第163図	C区各遺構出土土器実測図 4 ···································	105
第164図	C区各遺構出土土器実測図 4 C区各遺構出土土器実測図 5 04-650SK出土土器実測図	105
第165図	04-650SK出土土器実測図····································	106
第166図	余部城西堀 (04-680SD)、北外堀 (04-685SD) 断面図 ····· 余部城西堀出土土器・陶器実測図 ····································	107
第167図	余部城四堀出土土畚・陶畚美測凶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	107
第168図 第169図	余部城北外堀(04-685SD)出土土器実測図 ······	108
第170図	12 - 1012K例 国図	109
第170回	D 上	109 110
第172図	上区本型的	110
第173図	- G 西区 101SD、107SD平面・断面図	·113
第174図	の5-001SR断面図 F 区土層と03-001SR断面図 D、E 区平面図 F 区平面図 G 西区101SD、107SD平面・断面図 03-112SK、03-124SK平面・断面図 03-120SK 東面・断面図 03-120SK 東面 列	114
第175図	03-130SK平面・断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	115
第176図	03-130SK出土土器実測図 1 ······	116
第177図	03-130SK出土土器実測図 2 ···································	117
第178図	建物26平面・断面図	118
第179図	建物29平面・断面図	118
第180図	建物27平面・断面図	
第181図	建物28平面・断面図	
第182図	03-151SK平面・断面図 ····································	121
第183図 第184図	03-152SK、03-175SK、03-179SK平面・断面図 ····································	121
第185図	03-150SK、03-200SK平面・断面図 03-177SK、03-178SK、03-225SK平面・断面図 ····································	
第186図	03-197SD、03-198SK平面·断面図 ··································	$\frac{122}{192}$
第187図	03 - 203SK、03 - 222SK平面・断面図 ····································	123 193ء
第188図	03 - 204SK、03 - 224SK、03 - 231SK平面・断面図 ····································	
第189図	03 - 233SK、03 - 323SK平面・断面図 ····································	124
第190図	03-229SD、03-230SK平面·断面図··································	125
第191図	03-246SK、03-248SK平面・断面図 ····································	125
第192図	03-259SK平面・断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	126
第193図	03-258SK、03-261SK平面・断面図 ····································	126
第194図	03-269SK平面・断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	126
第195図	03-281SK、03-283SK、03-292SK平面·断面図 ··································	127
第196図	03-352SK、03-364SK、03-359SK平面・断面図 ······	128
第197図	03-369SK、03-374SK平面・断面図	128
第198図	03-160SD遺物出土状態実測図・G区検出溝断面図 ······	129
第199図	G 区 各 遺 構 出 土 土 器 実 測 図 1	
第200図 第201図	G 区各遺構出土土器実測図 2 ···································	
カンフロン	メモュクリン(1 Particle Arcticle Arcticle	1.32

第202図 第203図 第204図	□ G区各遺構出土土器実測図 □ G区包含層出土土器実測図 □ 和気濃度収 2 期景度地区		••••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		132 ···133
第204区 第205区	1 作风退哟W - 2 别座别地寸 1 仝部城箭田復元図					120
77200E						130
		表	Ħ	次		
丰 1	集栅山上连接片 里 數字					100
表 1	遺物出土遺構位置一覧表	••••••	•••••		•••••	139
		図 版	夏 目	次		
				~ ~		
図版 1	A区(05年度調査)全景 ((下) 北7	から中央部	
図版 2	A区 全景 (上) 南から	ら(ト)	南東部	(T) 0	E 10ECD /悪味さ)	
図版 3 図版 4	A区 工房区画 (上) 05-1 A区 工房区画 (上) 溶解	1055D 〈民 105-	四かり/ - 600SK) ・	(『) U ・ 液解 恒・	2 (05-8312尺) 2 - 1092D〈屈かり〉	
	(下)溶解		000311/	(合)111/15 4	2 (03 8313K)	
図版 5	B区 屋敷地1 (上) 北東語		北西部			
図版 6	A区各ピット 05-700SP 0				-755SP	
क्सिमा =	05 – 1058SP				00000	
図版 7	A区各ピット 05-777SK 0 05-1351SE	5 – 1045SI	K 05 - 275 (連つ 05	OSE 05-	-920SP 05-925SE	
図版 8	C区 (上) 全景 〈z					
図版 9	C区全景 (上)〈北東から				04 4005D	
図版10	C区全景 (上) 04-068SI	K〈南から	〉(下)建	物25		
図版11	C区 (上)河道跡と(04 - 030 SK	(下) 挖	系土坑群		
図版12	C区 屋敷地1 (上) 全 C区 余部城西堀 (上) 西 D、E区 (上) E区 河	景	(下) 屋敷は	也区画溝	(04 - 500SD)	
図版13 図版14	ログ 一人 という こう	かり 対駄	(下) 用かり (下) 用かり	9		
図版14	F区 (上) 河道跡	旦吻 (001SR)	(下) 卤色	 遣 構		
図版16	G区 (上)南部〈北)					
図版17	G区 (上)南部、Gī					
図版18			(下) 下層中			
図版19	G区 (上)建物群	(下) 建物	7と土坑03・	– 151SK		
図版20 図版21	G西区 03−130SK G区(上)03−130SK出土土岩	ē (下)	全 郊城堀月	日十十二		
図版22	04-030SK出土土器	ar (1')	示 印·狄·西口	ローニー和		
図版23	04-301SK、04-607SK出土土	:器 (下) 04 - 4805	SK出土土	器	
図版24	(上) 04-550SK出土土器	(下) 04-	616SK出土	:土器		
図版25	(上) 04-620SK出土土器					
図版26	(上) 04-650SK出土土器		673SK出土			
図版27 図版28	(上) 04-680SK出土土器 (上) 余部城西堀出土土器・F		700SE出土		- 920SK出土土器	
図版29	05-105SD出土土器	両伯 (1) 04-478	00 V 00 -	- 92USK山上上船	
図版30	(上) 05 - 105SD出土土器	(下) 05-	105SD出土	:溶解炉片	7	
図版31	(上) 05-270SK出土土器	(下) 05-	445SK出土	:土器		
図版32	(上) 05-555SK出土土器		700SK出土			
図版33			772SP出土			
図版34 図版35	(上) 05-896SP出土土器 (上) 05-920SK出土土器		900SP出土 937SP出土			
図版36					045SK出土土器	
図版37	05-1045SK出土土器	1017О1 рд	()	/ 00 10	710011 H	
図版38	(上) 05-1055SP出土土器		5 – 1056SP			
図版39	(上) 05-1059SP出土土器		- 1200SD出			
図版40	(上) 05-1439SP、05-1440				SP出土土器	
図版41 図版42	(上) 03-160SD出土土器 05-105SD出土石製宝塔	(中) 03-	1515K出土	工品()	デ)05-1092SK出土土器	
\(\text{\mathcal{I}}\)\(\text{\mathcal{I}}\)\(\text{\mathcal{I}}\)		, ,	·			
	,	付 図		次		
7.1 lost -	A FER NEL Little Foot					
付図1	A区遺構図					

| 付図1 | A区遺構図 | 付図2 | B、C区(北部)遺構図 | 付図3 | C区(南部)遺構図 | 付図4 | G区遺構図 | 付図5 | B、C区屋敷地1、2遺構図

第1章 調査に至る経過

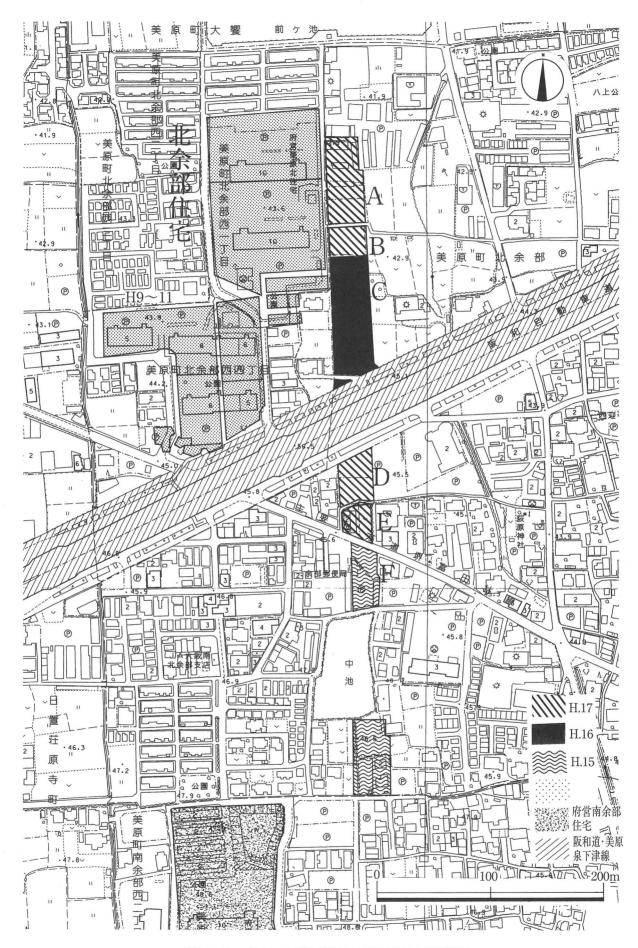
余部日置荘遺跡は、大阪府堺市美原区と堺市東区日置荘に所在する遺跡で、平成17年(2005) 2月に堺市と美原町が合併するまでは、行政境界を挟んで堺市側が日置荘遺跡、美原町側が余部 遺跡と称していた。

本格的な調査は、昭和62年(1987)から平成3年(1991)にかけて、近畿自動車道松原すさみ線(通称阪和自動車道)・府道松原泉大津線建設に先立って実施されたのが最初で、古墳時代の窯跡や中世の鋳物師関連の遺構や遺物が多数出土した。その後、府営南余部住宅や北余部住宅の建て替え工事等に伴なっての調査が実施され、古墳時代後期の耕作地や中世の集落遺構、鋳物師に関連した遺構が検出されている。

今回の調査は、府道大阪狭山線建設に先立つものである。この道路は大阪市内と南河内地域を 結ぶ幹線道路であるが、大型車間の離合が不可能なほど幅員が狭く、歩道も設置されていない。 道路の両側には工場や民家が密集し、拡幅は不可能に近いことから、現道の西側に道路を新設す ることが計画された。

平成13年(2002)に、大阪府土木部から用地が確保できた旧美原町北余部地区の前が池から南余部間について埋蔵文化財の有無について問い合わせがあった。本課では、美原泉大津線以北は府営住宅の調査結果から、全面調査が必要であるが、同道路以南については、南余部住宅まで周辺で調査が行われていなかったことから、平成14年度に阪和道以南の約300m区間について4ヶ所で調査を実施した。この結果、全域で遺構、遺物の存在が確認されたことから、道路予定地全域の調査が必要であると回答した。

この結果を基に発掘調査について、土木部と協議を重ねた結果、先行して道路供用が予定されている府道堺富田林線から南余部町境までの区間から調査を実施することになった。この地区(F、G地区)の調査は平成15年(2003)12月から平成16年3月まで実施した。次いで平成16年(2004)には阪和道から北へ約120mの区間(C区)を調査した。さらに平成17年(2005)には阪和道~府道堺富田林線間(D、E区)と平成16年度調査地から北へ約140m区間(A、B区)について調査を実施した。この間、平成17年2月には堺市と美原町が合併し、政令指定都市となったことから、平成18年度以降の発掘調査は堺市教育委員会が担当することになった。このため、平成18年度と19年度に15年度から17年度までに出土した遺物の整理作業と調査報告書を作成することとした。



第1図 余部・日置荘遺跡調査区位置関係図

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

余部日置荘遺跡は、大阪府と奈良県、和歌山県の府県境となっている金剛山地から西にのびる 羽曳野丘陵と和泉山地から北にひろがる陶器山丘陵に挟まれた位置にあり、西除川(天野川)に よって形成された谷底平野から低位段丘面に立地している。

余部日置荘地区の標高は45m前後で、等高線を読むと、大阪平野方向に10m/1km程度に緩やかに傾斜していることがわかる。この地域は瀬戸内海の東端に位置する小雨地帯で、讃岐平野と並んで溜池の多い地域である。溜池は南北や北西方向に連なるような形で配されており、明治18年陸地測量部の地図をみると、開析谷の微地形を巧みに利用して築造された溜池と、平坦地に築造された皿池が混在していることが読み取れる。

また、この低位段丘面では昭和40年代まで広範に条里地割りが残っていたが、宅地や工場の 立地が進み、条里地割りの追跡が困難になっている。

第2節 歷史的環境

この遺跡では、旧石器や縄文時代、弥生時代の遺物が採集されている。しかし、弥生時代以前の集落は未だに知られていない。狩猟場や食物採集の域をでるものではなかったのであろう。

古墳時代中期には当遺跡の東約1.5kmに、前方部に24両の甲冑を納めた石室を持つ全長114mを 測る黒姫山古墳が築造される。また、この古墳の周辺では、現在は消滅しているが、阪和自動車 道の調査などで、さば山古墳など6基以上の陪塚と考えられる古墳が確認されている。

また、遺跡南西の泉北丘陵は古墳時代から平安時代まで続く須恵器の生産地であり、当遺跡でも須恵器や埴輪を焼成した窯が見つかっている。

古墳時代後期には、当遺跡の南に西除川(天野川)を堰き止めて狭山池が築造され、耕地開発や集落の立地が進んだと考えられる。当遺跡の東約2kmにある平尾遺跡では7世紀から8世紀頃の掘立柱建物40数棟や木組み井戸、柵列等が見つかっており、記紀に「丹比」や「多治比」と記される丹比郡の郡衙かこの地域を本拠地とする丹比氏の居館と推測される。また、本遺跡の東に隣接する太井遺跡では、奈良時代の鋳造遺構が検出されており、催鋳銭司長官に登用された丹比真人三宅麿の存在と相まって、続日本紀に記載のある河内鋳銭司がこの地域に置かれた可能性が指摘されている。

10世紀に編纂された『和名類聚鈔』には、余部が所在する丹比郡に11郷、日置荘の位置する和泉国鳳郡には10郷が列記されているが、余部、日置の両地名は記載されていない。

「余部」は余戸に由来する名前で、羽曳野市古市に所在する西琳寺で鎌倉時代に纏められた 『西琳寺流記』の中に、天平15年帳に云とされる「僧宝等事」に、

僧沙弥廿二口僧十六僧見在口之中二僧借住四不知去三死

僧知蔵 年五十一 河内国丹比郡余戸郷□□戸主□白波男広島 蔣十九 養老六年三月廿三日薬師寺受戒公験

とあるのが余部の初見である。また、日置は古代の朝廷に炭や薪等を貢納したり、灯りに関わる職を担った日置部に由来し、全国に10数カ所確認される。河内国日置の名は、真継文書の仁安二年(1167)正月の端裏書がある蔵人所牒写に、

蔵人所牒 河内国丹南郡狭山郷内日置庄鋳物師等

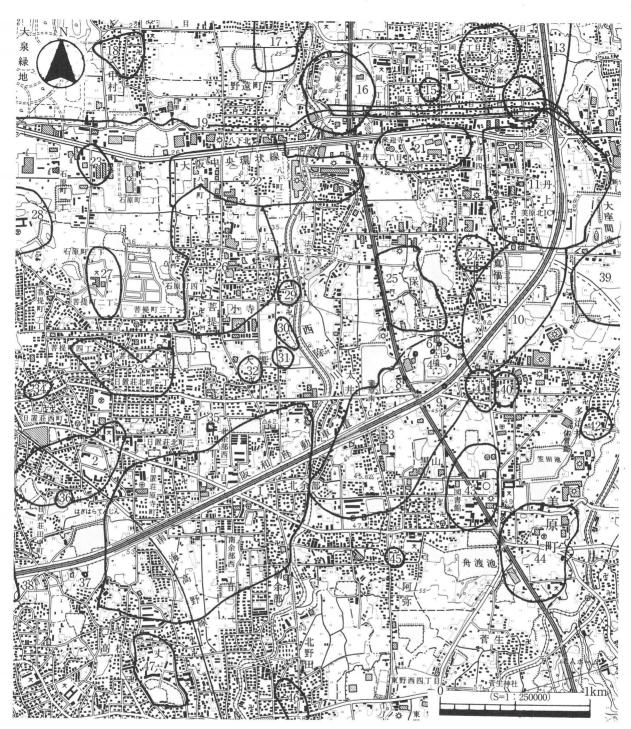
応早進上鉄燈爐以下御年貢事 使

牒 得件鋳物師等去月日解状云、号蔵人所供御人

鉄燈爐以下於御年貢可進上 抑罷入供御人意趣者 居住之所興福寺御領日置庄也。以下略が初見である。この文書は、江戸時代に真継氏が鋳物師頭領としての正当性を示すために各地の鋳物師に発給されたもので、文書の内容や様式から偽文書とされているが、平安時代後期に、狭山郷内に興福寺領日置庄があり、年貢として朝廷に鉄の燈爐を進上していた鋳物師がこの地に集住していたことを伝える。

当遺跡の北東約2kmにある美原区大保は浄金剛院領の大富荘に比定され、中世後半には「大保 千軒」と呼ばれる鋳物師集落であった。

戦国時代鍛冶職人や鋳物師は丹比の鋳物師集団は堺、平野に近い金田や吾孫子に拠点を移して 丹比地域を拠点に各地を移動していた廻船鋳物師も城下町に定住するようになり、この地域の鋳物師集落は衰退し、古代からのものを含めると総数130ヶ所を越える溜池が築造され、条里区画に則った耕地が開発される。



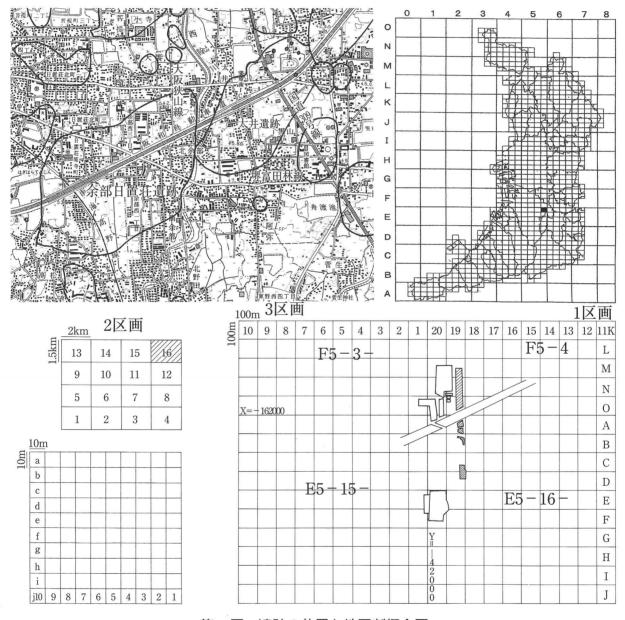
1. 余部日置荘遺跡 2. 日置荘西町遺跡 3. 太井遺跡 4. 黒姫山古墳 5. 鎮守山古墳 6. 黒姫山北古墳 7. けんけん山古墳 8. さる山古墳 9. さば山古墳 10. 真福寺遺跡 11. 丹上遺跡 12. 観音寺跡 13. 観音寺遺跡 14. 立部遺跡 15. 薬仙寺遺跡 16. 清堂遺跡 17. 河合遺跡 18. 中村町遺跡 19. 竹内街道 (丹比道) 20. 丹比道周辺遺跡 21. 丹南遺跡 22. 八下遺跡 23. 石原町北遺跡 24. 真福寺跡 25. 大保遺跡 26. 小寺遺跡 27. 石原町遺跡 28. 金岡遺跡 29. 長和寺跡 30. 大饗城土塁跡 31. 八坂神社遺跡 32. 城岸寺城跡 33. 日置荘北町遺跡 34. 初芝遺跡 35. 日置荘東池遺跡 36. 新池古墳群 37. 剣池西窯跡 38. 日置荘西町窯跡群 39. 郡戸遺跡 40. 丹比神社 41. 黒山廃寺 42. 丹比廃寺跡 43. 黒山遺跡 44. 平尾遺跡 45. 阿弥陀寺経塚 46. 北野田遺跡 47. 丈六池遺跡

第2図 余部日置荘遺跡と周辺の遺跡

第3章 調査の方法

第1節 調査区の設定

今回の調査地は、東西の幅は30m~32m、南北は、府道美原泉大津線(阪和自動車道)や府道堺富田林線、市道、溜池により分断されているが、南は堺市美原区北余部の美原西保育園付近から北は美原区大饗町の前池の南側約70mまで、全長約570mを測る。調査での地区割りは、国土座標の平面直角座標の第 VI 座標系に基づいて作製された大阪府発行の2,500分の 1 地域計画図を使用して 財団法人大阪府文化財センターが考案した地区割りを使用した。



第3図 遺跡の位置と地区割概念図

これは国土座標の第 VI 系直角座標系(基点北緯36°、東経136°)に基づいて作図された 1/10000地図を基準にして作製された大阪府の1/2500土地計画図を利用した区画割りで、1/10000地図の南北 6 km、東西 8 kmの範囲が 1 区画となる。第 2 区画はこの 1 区画を1.5km×2.0km の大きさに16分割したもので、1/2500地域計画図がこれにあたる。区画番号は南西端を 1、北東端を16とする。第 3 区画は1/2500の地域計画図を100mメッシュで区画するもので、南北15、東西20区画となり、北から南にA~O、東から西に 1~20と呼称する。第 4 区画はこの100m四方の第 3 区画をさらに10メッシュで区画するもので、北東端を基点に南北はa~ j、東西は 1~10の番号を付す。なお、掲示した地域計画図は日本座標系のもので、現在採用されている世界座標系とは異なっているが地区割り表示は、座標値をそのまま援用している。世界座標系のX=-162000m、Y=-41800mは日本座標系のX=-161653.12m、Y=-42061.26mにあたる。

今回の調査位置は地区割り概念図では北端がF5-4-M19-○○、南端がE5-16-D19-○○となる。この地区割りは、遺構や遺物の取上げに関わるもので、報告書には反映されない。調査は平成15年度に中池を挟んだ南北両側(F、G区)、16年度は阪和道から北へ約110m(C区)、17年度は阪和道と主要地方道堺富田林線間(D、E区)と16年度の北側約100m区間(A、B区)で調査を実施した。

今回の調査は、道路用地であることから、南北に約500mの長さがあり、調査区を横断する阪和道(府道美原泉大津線)、堺富田林線や里道、また、掘削土置き場の関係から、調査年次によって調査区をAからG区まで7地区に分けた。調査は南のF、G区を2003年度(平成15)、C区を2004年度(平成16)、A、B区を2005年度(平成17)に実施している。遺構番号は後々の混乱を避けるため、各年度の調査で使用した番号をそのまま使用し、04-001SP、05-001SPのように頭に年度番号を付けて表示した。05年度についてはD、E区から調査を実施したので、05-001~をD、E区、05-101~をA、B区の遺構に付した。

第2節 基本層序

層序

発掘調査は、盛土、耕土を機械で除去した後、黄灰色や褐灰色を呈する遺物包含層を人力で掘削した。地山は場所によって異なるが、南部は明黄褐色粘質土、北部は礫混じりの明黄褐色土である。

道路用地で溜池を含めると南北に約600mの長さで調査を行ったので、中池や現道を除いた約450m区間の東壁の断面図を掲載した。土層図作成時の土層の乾燥状態や、日照等で、土色帖との照合にムラがあり、同色土でも土色が異なっていた可能性もあるが、各調査区毎に記載した土色名をそのまま記載した。ただし、C区南部は余部城の堀の中に当たり、近世以降に整地されているので、農業用水路の西側で作製した断面図を掲載した。

A区は調査区の北半分は耕土の上に50cm~70cmの厚さで盛土して宅地を造成している。

耕土はT.P.42.5m前後の高さにあり、層厚は20cmである。耕土の下の床土は数cmでこの下に黄灰色土(3)、黄灰褐色土(4)、褐灰色土(5)、遺物包含層の黄灰色土(6)が10~20cmの厚さで堆積する。地山は礫混じりの明黄褐色土である。

A区の中央、X=-161790m以南は中世後期以降に整地されたのか耕土面が北側よりやや低く、耕土の下は礫混じりの明赤褐色土である。この地区は礫が露出しており、検出した遺構も少ない。

C区では遺物包含層は灰黄色土やにぶい黄色土で、地山は含まれる礫が少なくなり、水捌けが 悪い黄橙色粘質土になる。

D、E区は阪和自動車道(府道美原泉大津線府道36号)と府道堺富田林線(府道35号)に挟まれた調査区で、里道を境に北をD区、南をE区とした。

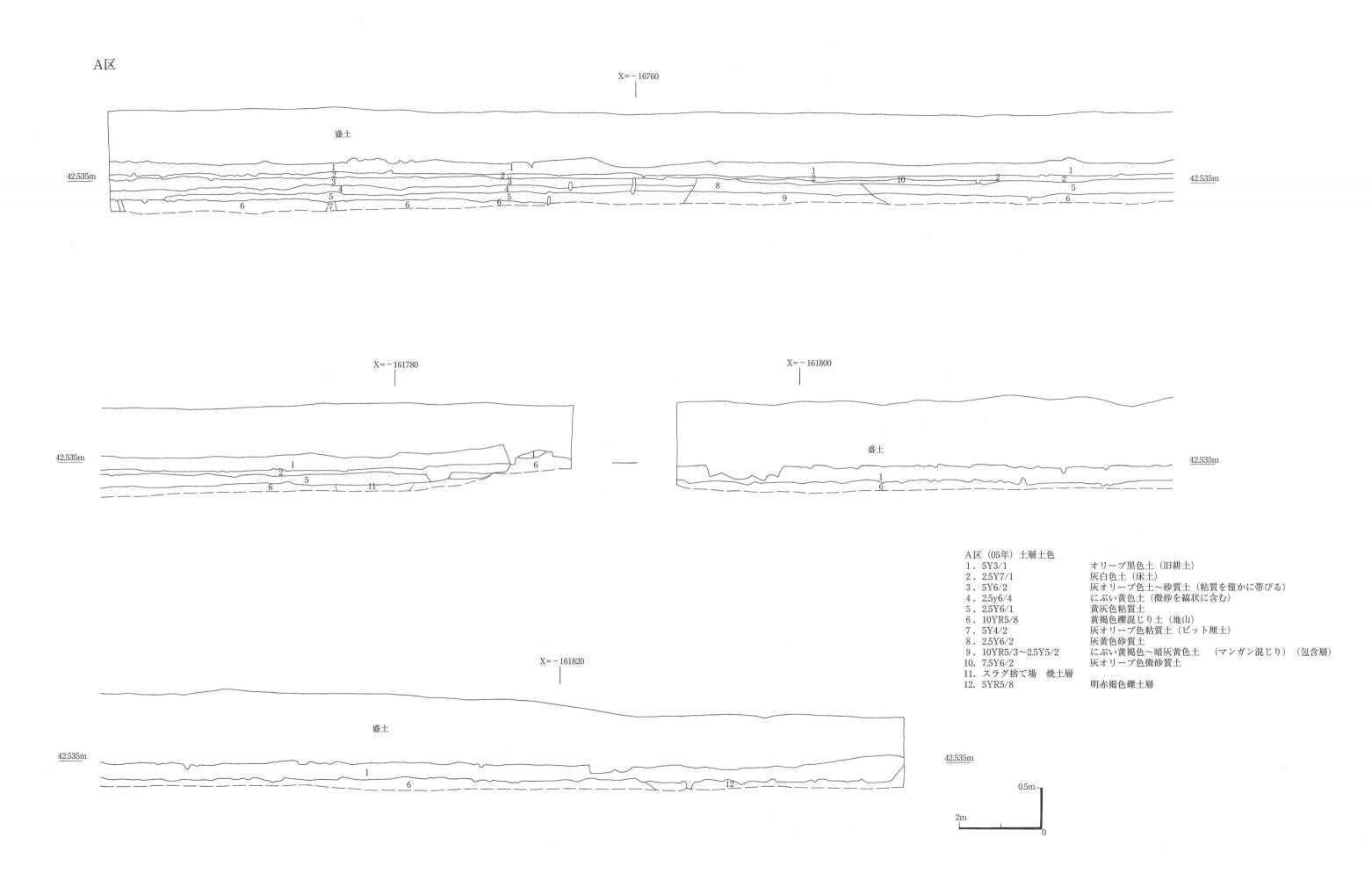
D区は府道35号線と同高まで約1mの盛土があり、耕土上面の高さはT.P.44.8m付近である。 耕土の下は床土(数cm)、明黄褐色土が20~30cm、遺物包含層の黄灰色土が10~15cmの厚さで堆積する。含まれる遺物の量は少ない。地山は明黄褐色土で、T.P.44.3mが上面となっている。この層は礫をあまり含まず、粘質土に近い。

E区は耕土面がT.P.44.7m前後を上面とする。耕土は約20cm、床土は0~数cmの厚さである。 床土の下は、灰黄色土と明褐色土の混ざった土が20cm前後の厚さで堆積する。遺物は殆ど含まない。包含層はマンガンが沈着する灰黄色粘質土で、層厚は10~15cmを測る。地山は明黄褐色土~粘質土で上面はT.P.44.3m~44.2mで、D区よりやや低くなっている。

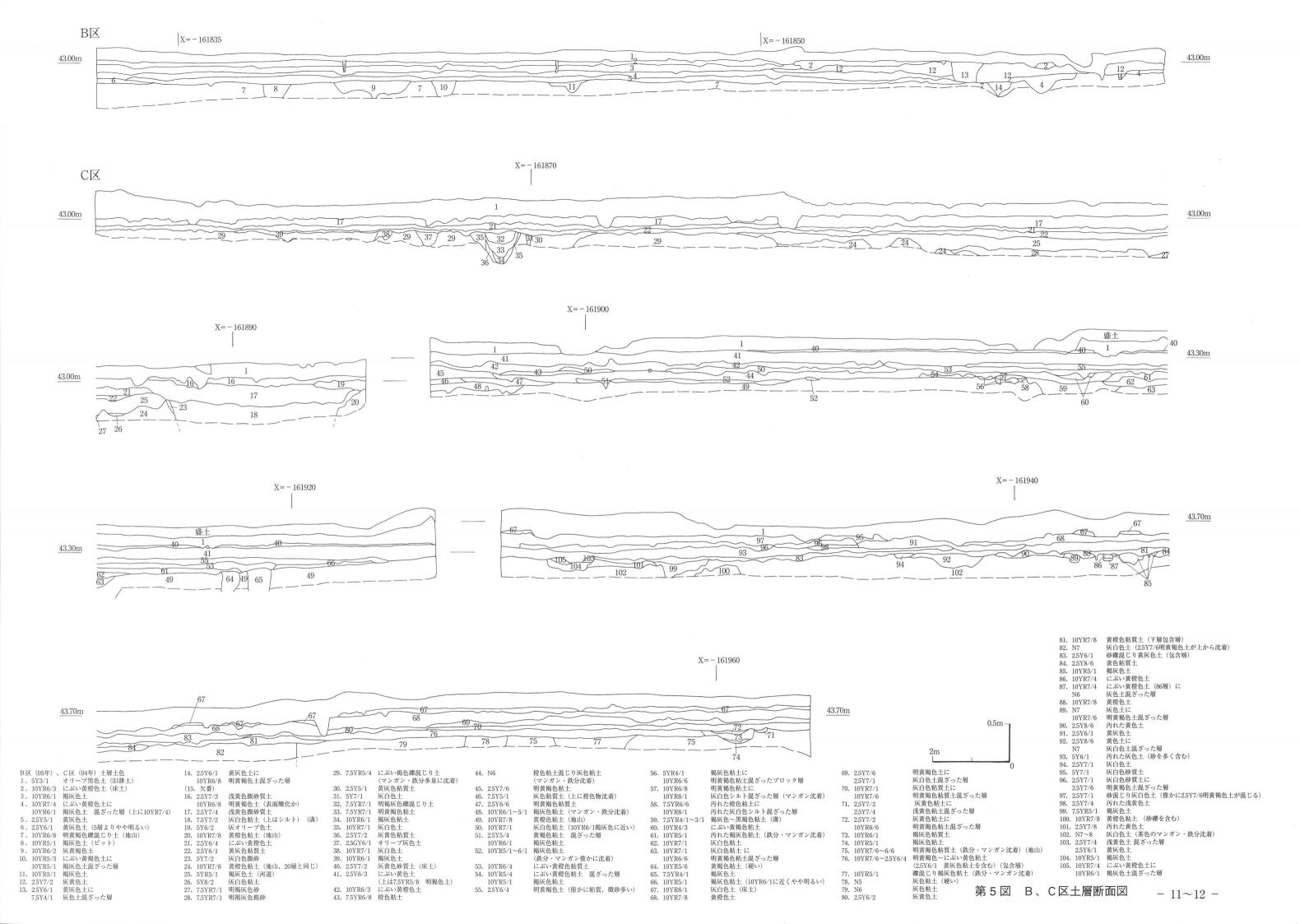
D、E区は包含層内から出土した遺物が少なく、検出した遺構も鋤溝や轍状の細い溝と地山面 を蛇行しながら北に流れていた時期不明の河道程度である。集落に隣接する荒蕪地と考えられる。

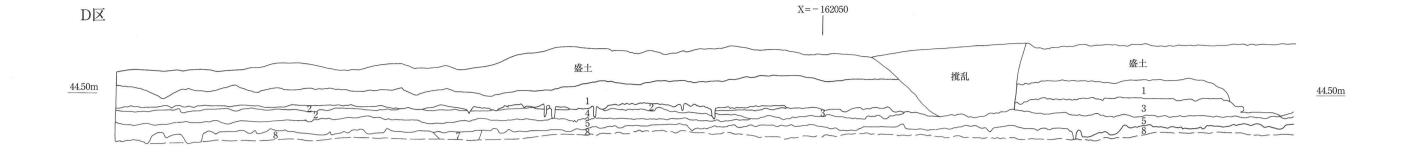
F区は府道35号線と中池の間の調査区である。耕土面はT.P.45m前後である。数cmの灰色土の床土の下に遺物を少し含む灰オリーブ土が10~15cmの厚さで堆積するが、この層は他地区では観察されない。客土であろう。この下は黄色物質の沈着度によって数層に分離できる土層で、灰黄色からにぶい黄橙色を発する粘質土である。含まれる遺物の量は少ない。地山は明黄褐色粘土で、南側は礫を多く含むが、水捌けが良くなるためか溝や柱穴が確認され、居住域となっていたようである。

G区は中池南側の地区で、北端はX=-162266m、南端はX=-162334mまで南北約68mを測る。この調査区は盛土でほぼ平坦な地形であったが、元は2面の水田であった。水田には段差があり、北に1段下がっており、耕土上面は約30cm高さが異なる。北側の水田上面は、T.P.46.4m、南側はT.P.46.7m前後の高さを測る。耕土は20cm~30cm、床土は0~数cmの厚さである。床土から地山までの層をみると、北端では灰白色土や橙色土、明黄褐色土等に細かく分離できる遺物を

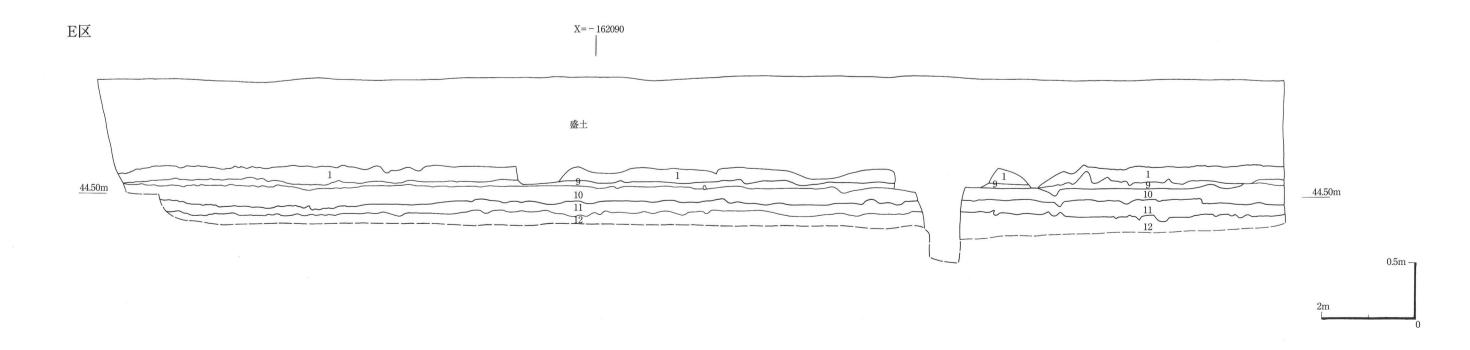


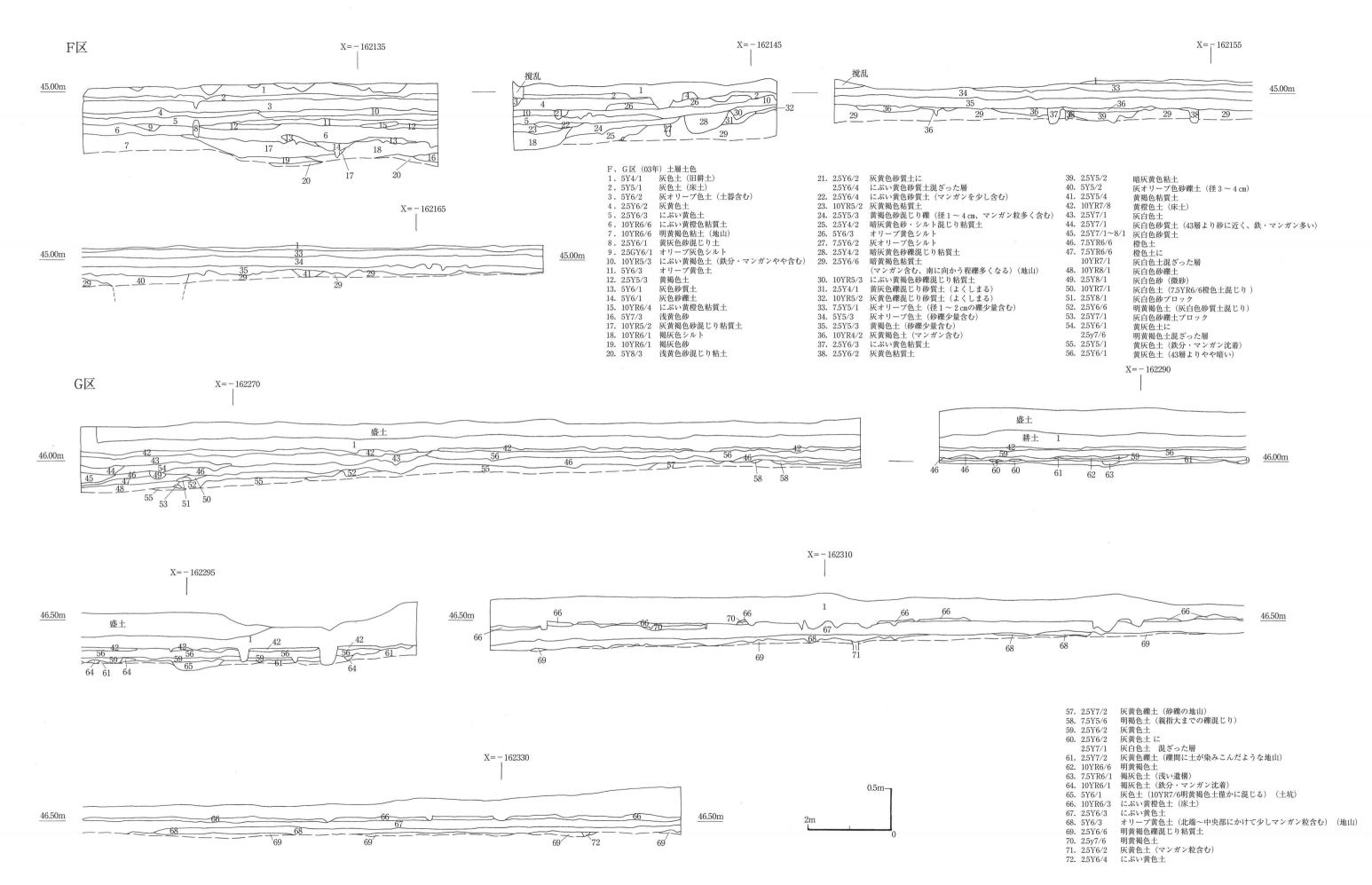
第4図 A区土層断面図











第7図 F、G区土層断面図

含む層があり、地山はT.P.45.6m付近の角礫や川原石を多く含む灰黄色土である。一方南端では床土の下に遺物を包含するにぶい黄色土とマンガンを少し含むオリーブ黄色土が約20cmの厚さで堆積し、地山の礫を含む明黄褐色土となる。地山の高さはT.P.46.3m前後で約70cmの高低差が存している。調査区北側にある中池は70mで約70cm下がる浅い谷状の自然地形を利用して築造されたことが窺える。

第4章 調査の成果

第1節 A区 (05年度) の遺構と遺物

層序

この地区の土層は第4図で示したように、中世集落が廃絶した後、中世末から近世頃に始まった耕地開発と昭和40年代以降の宅地開発により整地されているため、盛土は北端が厚く、南に薄くなる。北端では旧耕土の下に堆積する黄灰色土、黄褐色土が数層に分離できるほどに厚い。包含層はT.P.42.5m前後に堆積する褐灰色土で、地山は礫混じりの灰褐色土である。A区中央の中央にある下水管(ヒューム管)より南側では包含層の褐灰色土は数cm程度と薄く、その上に耕土、盛土が堆積する。遺構数も減少するので、集落内でも屋敷地区画と工房区画との間にあって耕作地や空き地となっていたのであろう。包含層から出土した遺物は殆ど中世のもので、古墳時代の須恵器が僅かに含まれる程度であった。

A区では方形の溝で囲まれた工房区画と区画外の建物跡、池、土器埋納土坑などを検出した。

工房区画

区画溝05-105SD(第6図) 工房屋敷地を区画する溝で、南はX=-161782m付近を東西に走り、Y=-41857m付近で北に向かう。幅0.6~1.0m、深さ0.3mを測る。東端はY=-41830m付近で浅くなって途切れる。また、北端は調査区外にある。溝の東西軸はE-5°-N前後で、調査区内のX=-161830m付近を通る里道や下層の溝と平行であり、この付近の条里区画に対応している。05-950SEの東側で溝が途切れるため完全な方形区画にならないが、灰捨て場の位置から推定すると、工房区画は調査区の東に広がっているので、東西25m以上、南北は33m以上の規模になる。溝の埋土は褐灰色土で、内部に瓦器塊や磁器片、土師器皿等の陶磁器や割れた土釜や拳大程度までの川原石、和泉砂岩製とみられる宝塔の塔身、笠、相輪が出土しており、人為的に埋められたことが分かる。また、鉱滓が出土した井戸05-950SEはこの溝の廃棄後に掘られており、この井戸は工房区画が廃棄されてから掘削された可能性がある。

1、3~11は瓦器小皿。丸みを持った底部と開き気味に立ち上がる口縁部をつくる。1は口縁部を内外面ともヘラミガキする。1、3、4は見込みに暗文がある。底面は指頭痕を残すものと、ナデで調整するものがある。2、12~19は土師器小皿。19は平底である。13は口径は8.0cm。20~22は土師器中皿で、20は口径14.1cm。23~34は瓦器塊。高台は小さな逆台形か三角形で、体部外面のミガキは消失している。見込みは平行線か螺旋状の暗文を描く。体部内面はやや密な圏線状のミガキを施す。24は口径15.0cm。器高5.2cm。35~39は瓦質の羽釜で、35は短くのびる鍔から肥厚気味に内径する口縁の端部は水平な面をつくる。内面は横方向のハケとナデで調整する。37~39は口縁端部を折り曲げ、口縁端部下端を強くヨコナデする。

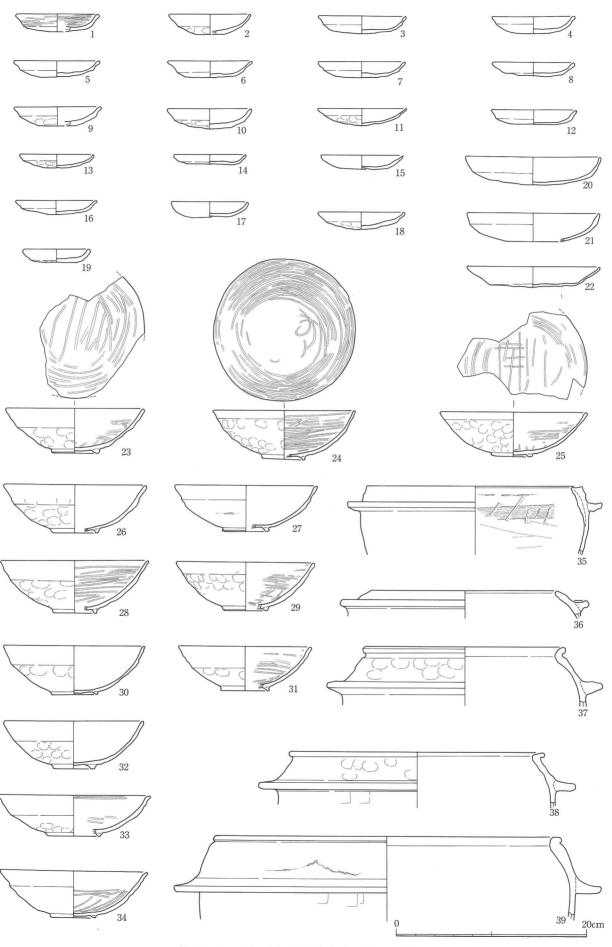
40~42は白磁碗で、口縁端部は外反気味に細く丸める。41は底部外面から高台は無施釉である。



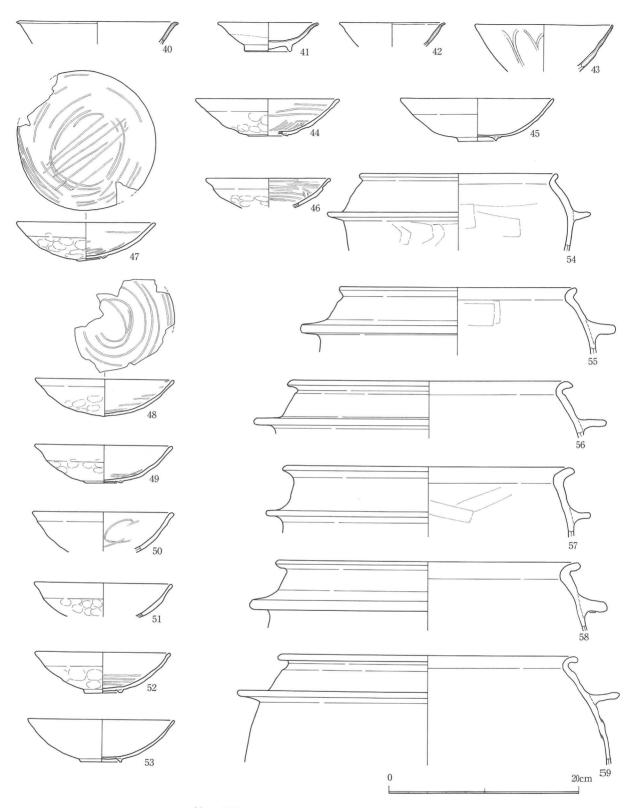
第8図 A区区画溝05-105SD平面図1



第9図 A区区画溝05-105SD平面図2



第10図 05-105SD出土土器実測図 1

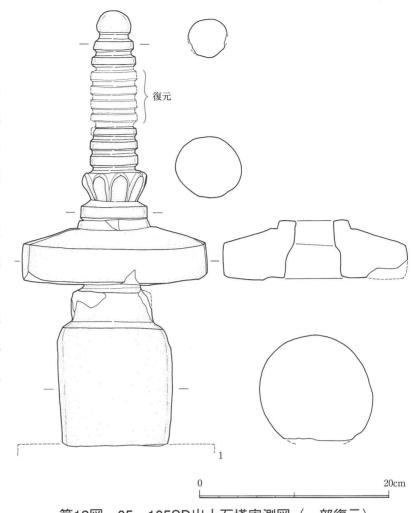


第11図 05-105SD出土土器実測図 1

43は青磁碗で連弁文を描く。44~53は瓦器塊。高台は三角形か細い粘土紐を貼りつけた程度のもの。見込みに平行線か螺旋状の暗文を描く。体部内面は疎な圏線状のミガキを施すものが多い。48は見込みから口縁部まで粗い圏線状のミガキを回す。復元口径14.4cm。器高4.0cm。54~59は土釜で鍔は太く短い55、58と細い56、59がある。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部を外反させて丸めるものが多い。59は口径30.8cm。

石塔 (第12図)

1は凝灰岩製の宝塔である。 塔身と笠部、相輪が出土した。 基壇は出土していない。塔身は 基部がわずかに細くなる円筒形 で、笠に挿す軸を造る。塔身の 高さは軸を含め34cmを測る。笠 は幅40cmで、端部の返りが小さ い。相輪は反り気味の伏鉢と厚 く陽刻された受花から、幅を低 減気味に造り出される九輪から なり、各輪の高さは2~2.5cm を測る。相輪の頂部に円い宝珠 を一体で造る。相輪は四輪を欠 くが、復元高は45cm前後になる。 鎌倉時代のものであろう。



工房区画内の遺構

第12図 05-105SD出土石塔実測図(一部復元)

工房区画内では鋳造工房周辺で排水や小区画を意図したと考えられる短い溝を数条検出した。 この他、建物の柱穴や井戸、鋳造に伴う作業遺構、祭祀遺構、廃棄遺構等が機能を推定できない 遺構を検出している。

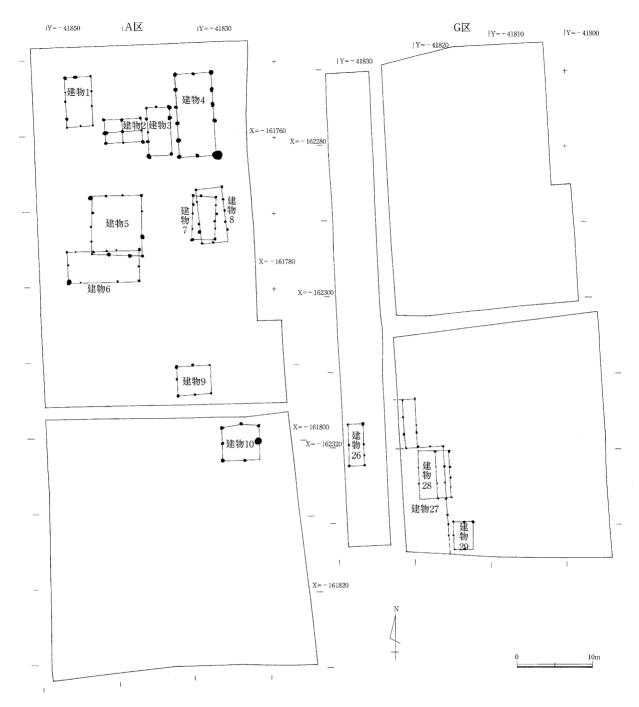
建物跡

工房区画内では多数の柱穴を検出したが、火を使う工房は簡易な構造で位置をずらして度々建て替えられたのか、復元できた建物は少ない。調査時、遺構は断面観察の為に北側半分の掘削を基本としたので遺構図面は南を上にして掲載したものが多い。

建物 1 (第14図) 調査区北端で復元した4間×2間の南北建物で、規模は6.6m×3.5mを測る。 桁行、梁行ともに柱列は対応せず、柱間寸法も区々であるが、西桁行の柱間隔は2m、1.1m、 2.3m、1.2mを測る。柱穴は歪な円形や楕円形で長径0.25~0.4m、深さは0.1~0.3mを測る。

建物 2 (第15図) 調査区北部で復元した 2 間四方の東西建物で、規模は3.8m×3.2mを測る。 南側の桁行は柱痕が重なるが、この建物の柱穴は177SPで、柱間隔は1.9m、梁行きはやや間隔が 狭く1.2m~1.4mを測る。柱穴は歪な円形で、径は0.3~0.6m、柱穴の深さは0.3m前後であった。

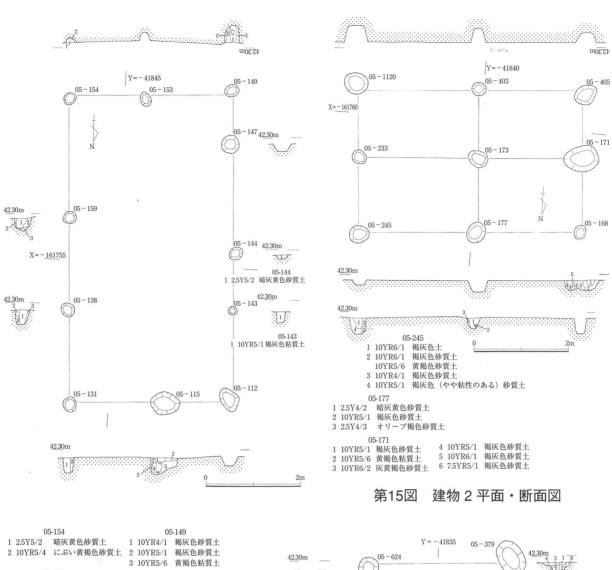
建物 3 (第16図) 調査区北部で復元した 3 間×2 間の南北建物で、規模は6.3m×3.1m、面積は19.5mを測る。西側桁行きの柱間隔は1.3m~1.8m、北側梁行きは1.4m、1.7mを測る。柱穴は

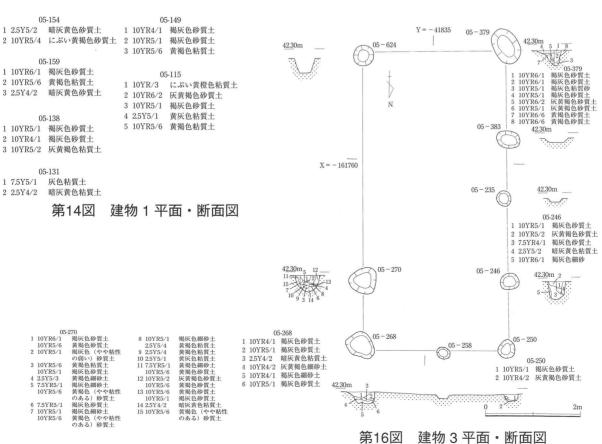


第13図 A区、G区建物位置図

円形か楕円形で、直径 $0.3\sim0.6$ m、深さは $0.2\sim0.4$ mを測る。建物の主軸はほぼ南北を示し、区画溝と平行する。東側桁列には井戸(05-275SE)が重なっており、井戸内で柱穴や礎盤は確認できなかったので、井戸が新しくなるのであろう。

建物 4 (第17図) 工房区画内の溶解炉 (05-600SK) 北側で復元した5間×2間の南北建物で、規模は11.0m×5.0mを測る。柱間寸法は西側桁行が2m、2.1m、2.5m、2.3m、2.1m、梁行2.3m、2.7mを測る。柱穴は歪な円形か楕円形で、40.30.6m、深さ40.20.2mを測る。建物内から遺構は確認できなかったが、溶解炉に近く柱間隔が広いことから工房として利用されたものであろう。



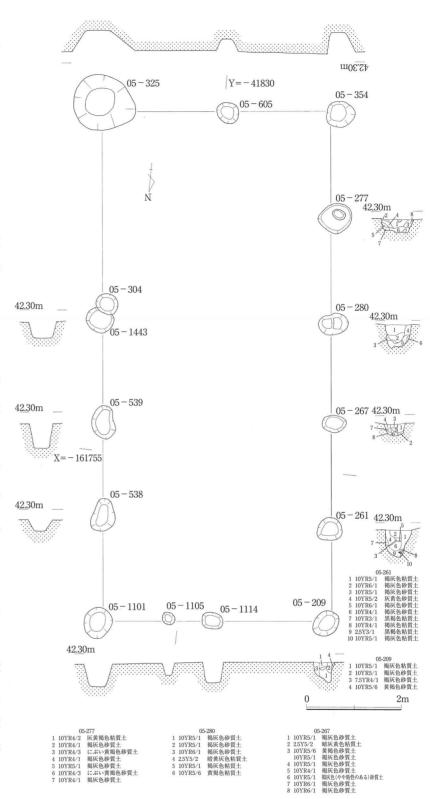


建物 5 (第18図) 工房区画の西部、X = -161770 m、Y = -41840m付近で復元した4間×3間の南北建物で、規模は7.8m×6.6m、面積は51.5㎡を測る。柱間寸法は桁行きが1.7m~2.0m、梁行きは1.9m~2.2mを測り、梁側の柱間隔が広くなっている。柱穴は歪な円形で、直径0.25~0.5m、深さは0.1~0.3 mを測る。主軸はほぼ南北を示す。

建物内で大型土坑や遺物は 出土していないが、柱間隔が 広いことから鋳造に関わる作 業場と推測される。

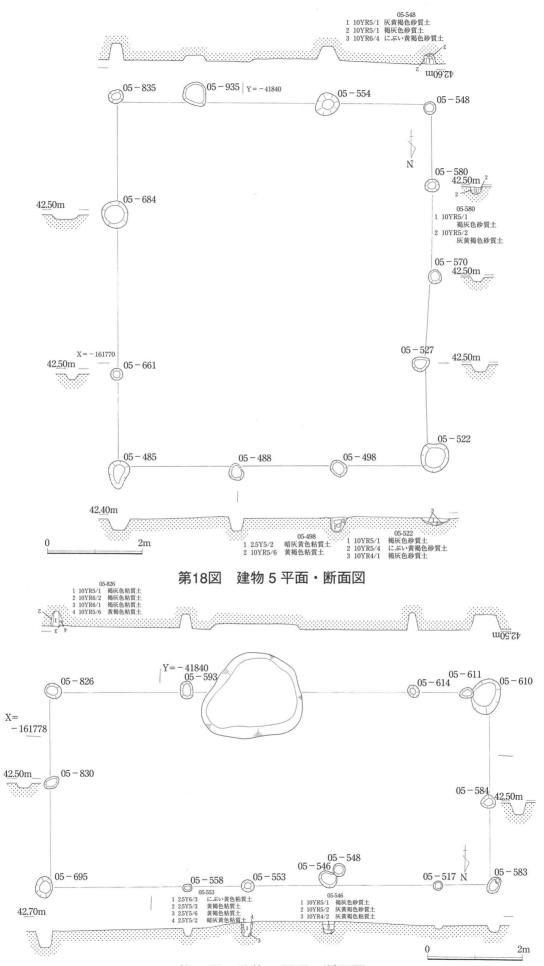
建物 6 (第19図) 工房 区画南西部で復元した 4 間か 5 間×2 間の東西建物で、規 模は9.3 m×4.2 m、面積は 39.1 ㎡を測る。東側は両側の 桁とも柱間隔が広く、3 m (北) と2.8 m (南)を測る。 柱穴は円形か楕円形で長径 0.25~0.4 m、深さ0.2~0.3 m の範囲内にある。南東隅の柱 穴(826SP)では柱痕が明瞭 に確認できた。

建物7 (第20図) 工房区画の北東部で復元した4

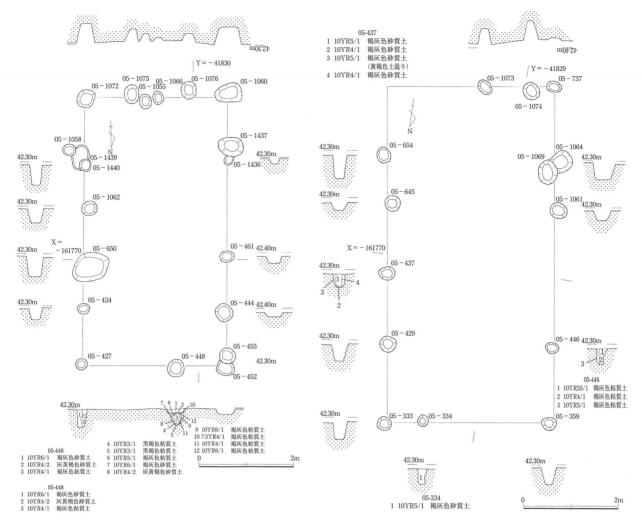


第17図 建物 4 平面・断面図

間×2間の南北建物で、規模は5.8m×3.1mを測る。柱穴が重複しているが、柱間隔は桁行きが1.2m~2m、梁行きは1.7m、1.4mを測る。桁、梁ともに柱位置は区々である。建物の主軸はほぼ南北を示す。柱穴は歪な円形で0.25~0.4m、深さは0.5~0.4mを測る。444SP、446SPは地山の



第19図 建物6平面・断面図



第20図 建物7平面·断面図

第21図 建物8平面・断面図

礫層で止めたが、少し深い可能性がある。

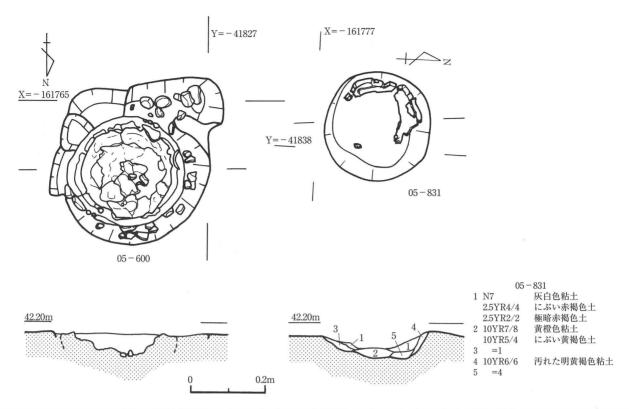
建物 8 (第21図) 工房区画の中で復元した 5 間× 3 間の南北建物である。規模は7.1m×3.5 mで、柱間寸法はまちまちであるが桁行き東列が1.6m、1.5m、1.5m、1.1m、1.4mを測る。梁行きは対応する柱を検出できなかった。 2 間の可能性もある。復元した建物周辺で多数の柱穴を確認しており、母屋の北側に庇や副屋がつく可能性もある。

鋳造遺構

溝05-105SDで囲まれた区画の東部で2カ所の溶解炉を検出した。

05-600SK(第22図) X=-126200m、Y=-41800m付近で検出した。溶解炉の底部である。溶解炉の土坑は直径0.85m、深さ約0.2mの円形で、内面に粘土を厚さ約10cmの球形に貼り付けて炉壁を造り、その周囲に補強のため小石を巡らせている。内径は約60cmで、高熱を受けた炉壁表面はガラス化し、その外側は半煉瓦化し赤褐色を呈していた。炉壁底面は半球形で、廃棄時に金属の残滓を掻き取ったためか、地山が露出していた。

阪和道調査時にも溶解炉が検出されている。溶解炉を造る土坑は約115×90cmの楕円形で、掘



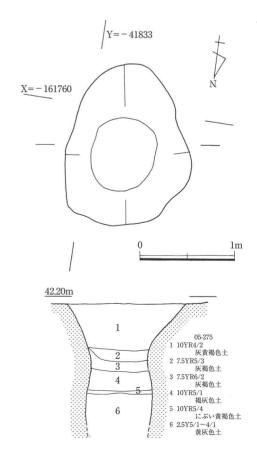
第22図溶解炉 1(600SK)・溶解炉 2(831SK)平面・断面図

方に沿って径20cm程度までの石を巡らせている。溶解炉本体は70×60cmの楕円形で器壁厚は10cm程度である。底面は平らな鍋底状であるのが、今回とは異なっている。図化できなかったが土坑からは外面にミガキが残る瓦器境片が出土しており、12世紀代のものと考えられる。

05-275SE(第23図) Y = -41838m付近を南北に延びる、05-515SDの南端で検出した溶解炉痕で、地山を直径約0.5m、深さ0.15mほど半球形に掘り下げ、壁面に沿って水簸して得られた純度の高い白色の粘土や黄橙色粘土を5cm程度の厚さで積み上げ溶解炉の底部を造っている。内面は粘土がガラス化して褐色を呈していた。壁面にこびりついた金属片を再利用するためか溶解炉は東側半分は地山まで掘削して破壊されていた。

この溶解炉は比較的短期間で廃棄されたのか、壁面の熱変が小さく、地山に沿って貼られた粘土が白色でキメ細かく、調査区内には見あたらない粘土であることから採取した土砂を丁寧に水簸し、良質の粘土を選り分けて使用したと考えられる。

井戸 溝05-105SDで囲まれた区画内では、鋳造遺構の



第23図 05-275SE平面·断面図

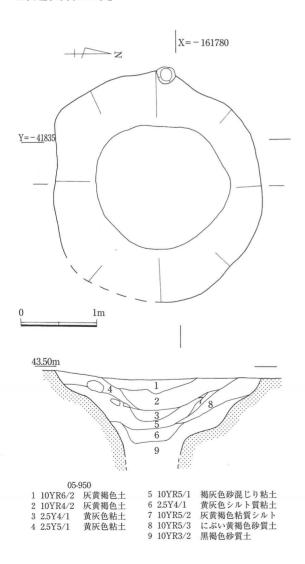
周辺で2カ所の井戸を検出した。

05-275SE(第23図) A区北部で検出した井戸で、平面は南北に長い楕円形を呈し、長径 1.7m、短径1.3mを測る。掘方は地表下50cmまでは漏斗状で、その下は地山が崩落したのかやや 脹らみをもって掘られている。1.5mまで掘削したが、底には達しなかった。埋土は黄灰色粘土 や褐灰色土、地山の黄褐色土、灰黄褐色土で、各層内に炭や灰、炉壁の小片を多量に含んでいる。 井戸の廃棄後に鋳造工房の残灰捨て場として使用されていたのであろう。

井戸内から第87図に示す13世紀後半頃の瓦器城や土師器皿が出土している。

05-950SE(第24図) 工房屋敷地区画の南端で検出した井戸で、直径約3mの円形を呈する。掘方は底面が急速に窄まる擂鉢型で、検出面から約1.2mでの径は1m程度であった。壁面が崩れるおそれがあり、底の深さを確認できなかったが、堀方の形状や05-1351SEと似ており、深さは2m前後と思われる。井戸内から鉱滓や溶鉱炉片、東播系鉢や瓦器境、土師器皿が出土している。

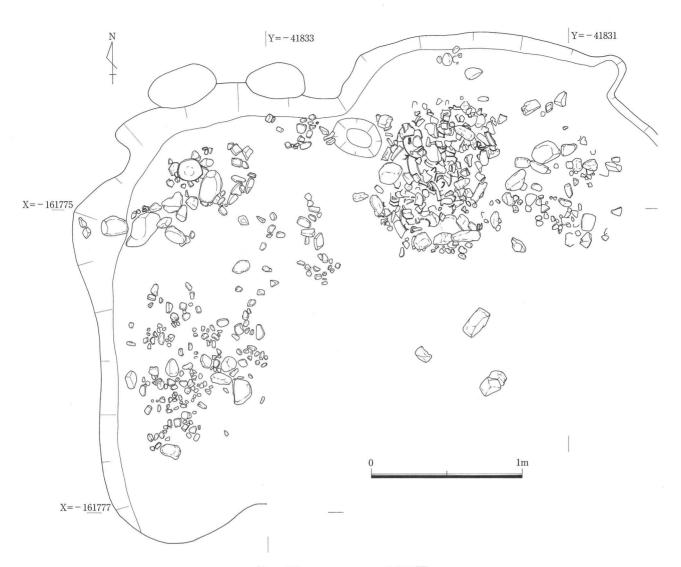
鋳造関係土坑



第24図 05-950SE平面図・断面図

05-555K(第25図) 05-600SKの南西約3 mで検出した歪な隅丸方形を呈する土坑である。 大きさは、南側が05-777SKに切られているが、 南北約3.5m、東西約4.0m、深さは0.2m前後を測 る。検出時は表土の状態から、柱穴群と考えてい たが、掘方が不鮮明だったことから全体を徐々に 掘り下げたところ、掘方の輪郭が捉えられた。土 坑内は礫石が多い。北西部床面で完形の瓦器 城が出土し、北東部では多数の土器が廃棄された ような状態で出土し、床面では川原石が敷き詰め られていた事から作業遺構と判断した。調査終了 時に掘り下げたことから川原石を敷き詰めた状態 は図化できなかった。埋土には溶解炉片やスラグ、 鋳型片など鋳造に関連するものや炭化物は含まれ ない。川原石や礫石は底面に接するものが多く、 埋土は褐灰色土であった。

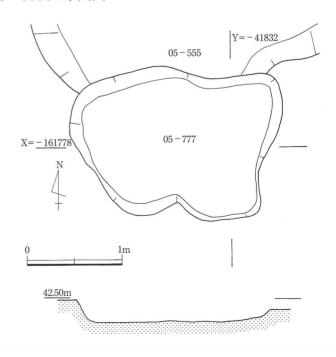
05-555K出土土器(第27図) 1~4 は瓦器小皿。底面は指オサエ、体部内面は細いヘラミガキで調整する。4 は皿部に螺旋状の暗文を施す。5~9 は土師器小皿。主にナデで仕上げる。10~14は瓦器境。高台は小さな逆台形で体部外面



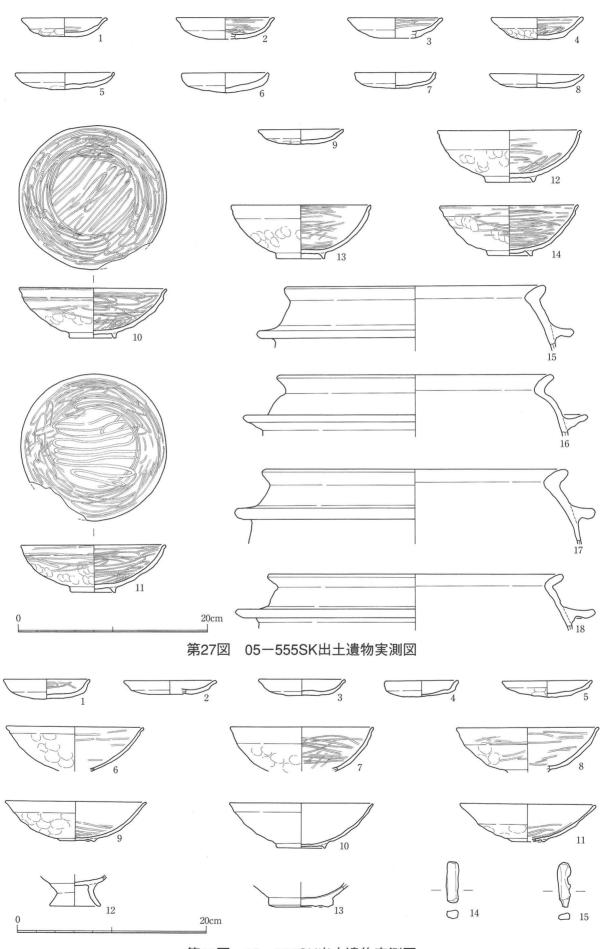
第25図 05-555SK平面図

は粗いヘラミガキ。内面は見込みに螺旋状の暗文、体部内面は圏線状の密なミガキを施す。 15~18は土釜。鍔の形状は短く水平に延びる ものとやや上向きにつくものがある。口縁部 は内彎して立ち上がるものと内傾気味に立ち 上がるものがある。口縁端部は「く」の字型 に外反させて、丸くおさめる。

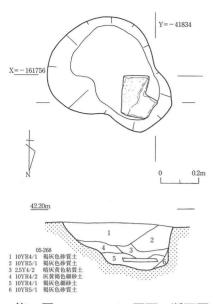
05-777SK (第26図) 05-555SKの南側に接して検出した溶解炉片を砕いて捨てたと見られる土坑である。05-555SKよりも新しい。平面形は歪な方形で、規模は東西2.2m、南北1.8m、深さは西端で0.25m、東端で0.06mを測り、底面は西に傾斜する。土坑内は溶解炉壁の破片と見られる熱を受けて赤変化した



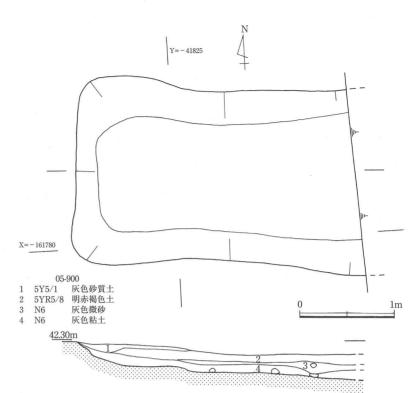
第26図 05-777SK平面·断面図



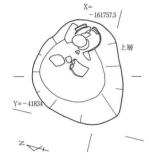
第28図 05-900SK出土遺物実測図



第29図 05-268SK平面·断面図

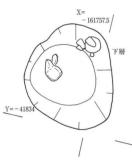


第30図 05-900SK平面·断面図

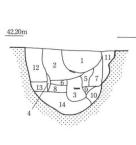


土の塊や褐灰色土で充填されていた。

05-900SK (第30図) 溶解炉1の南東15m、05-550SKの東南東約5 mで検出した南北2.1m、東西3m以上を測る方形の土坑で、深さは約0.3 mを測る。土坑は主に灰や炭化物、鉄粉状の赤色物質、溶解炉を砕いた赤 色化した土の小片で充填されていた。灰捨て場である。



05-900SK出土遺物 (第28図) 1は瓦器小皿、2~5は土師器小皿、 6~11は瓦器城である。瓦器城は、体部外面を指オサエ、内面は粗い圏 線状のミガキを施す。 高台は歪な三角形や粘土紐を貼り付けた程度のも のが多い。12は土師質で台付きの城か皿の脚台である。13は白磁碗の高



2 10YR5/1 褐灰色砂質土 3 10YR5/6 黄褐色(やや粘性の弱い)粘質土 褐灰色砂質土 10YR5/1 4 2.5Y5/3 黄褐色細砂土 7.5YR5/1 褐灰色細砂土 10YR5/6 黄褐色(やや粘性のある)砂質土 6 7.5YR5/1 褐灰色砂質土 10YR5/1 褐灰色細砂土 10YR5/6 黄褐色(やや粘性のある)砂質土 8 10YR5/1 褐灰色細砂土 2.5Y5/4 黄褐色粘質土 9 2.5 Y 5/4 黄褐色粘質土 10 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 11 7.5YR5/1 苗褐色細砂十 10YR5/6 黄褐色砂質土 12 10YR5/2 灰黄褐色砂質土

黄褐色砂質土

苗褐色砂質十 褐灰色砂質十

黄褐色砂質土

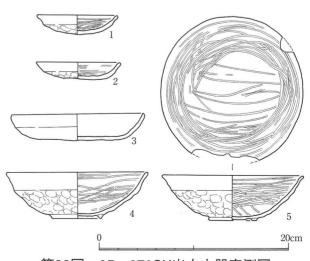
05-270 1 10YR6/1 褐灰色砂質土 10YR5/6

14 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 05-270SK平面・断面図

10YR5/6

10YR5/1

13 10YR5/6



台。14、15は腐食が進んでいるが、釘の破片であろう。14は長さ4.2cm。

05-268SK(第29図) A区北部で検出した小土坑である。平面は方形と円形を接合したような歪な形状で、長径0.65m、短径0.55m、深さ0.3mを測る。埋土は主に褐灰色土である。礎盤に利用されたと思われる平瓦が出土しており、南東側は柱の抜き取り穴であろう。

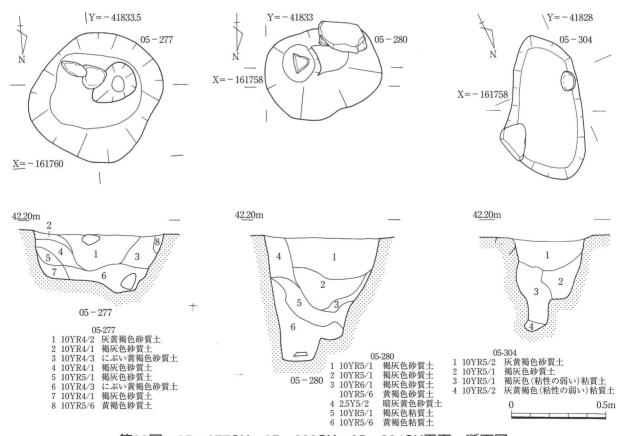
05-270SK (第31図) A地区北部で検出した、円みを持った三角形を呈するピットで、底辺、高さ共に約0.5mを測る。掘方は半球形で、深さ0.35mを測る。埋土は褐灰色から黄褐色土でピットの肩部や中層から瓦器境や土師皿、境と同時に埋置したと思われる角礫が出土している。

05-270SK出土土器(第32図) 1、2は瓦器小皿、3は土師器の中皿である。3は口縁部を2段のヨコナデ、見込みはナデで仕上げる。口径14cm、器高2.8cm。4、5は瓦器境で、外面のミガキは省略されるが、見込みは平行線の暗文、内面はやや粗い圏線状のミガキで仕上げている。

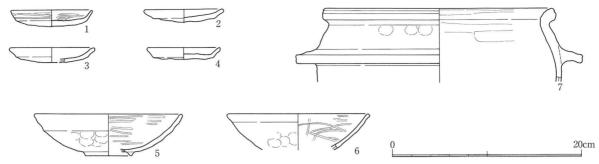
05-277SK(第33図) 井戸275SEの東にある隅丸方形のピットで、大きさは $0.7m \times 0.6m$ 、深さは0.3mを測る。底面は柱痕があり一段深くなっている。埋土は灰黄褐色土や褐灰色土で土砂が流れ込んでいることから抜柱後放置されていたと考えられる。

05-280SK(第33図) 井戸05-275SEの北側で検出した0.65m×0.45m、深さ0.65mを測る楕円形のピットで、底面に礫石を置いて礎盤とする。東側は柱を抜き取った時に広げたであろう。

05-304SK(第33図) A地区北東部で検出した土坑である。図化時は1.4m×0.8m、深さ0.4m の方形土坑と思われたが、遺物除去後に精査したところ、二つのピットが切り合っていることが観察され、北側を05-1443SPとした。最上層で土師器皿が出土している。



第33図 05-277SK、05-280SK、05-304SK平面・断面図



第34図 05-304SK出土土器実測図

05-304SK出土土器(第34図) 1 は瓦器小皿で、口縁部外面にミガキで調整している。 2 ~ 4 は土師器小皿。 5、 6 は瓦器城で外面のミガキが消滅した時期のもの。 7 は土師質の羽釜で、「く」字形に折り曲げた口縁端部を僅かに肥厚させる。

05-325SP(第35図) 溶解炉600SKの北側で検出した土坑である。平面は1.15m×0.85mを 測る楕円形を呈する。掘方は擂鉢形で深さは0.95mを測る。土坑底には人頭大の礫石が置かれて おり、焼土や鋳型は出土しなかったが、鋳物の型を据えた土坑と考えられる。

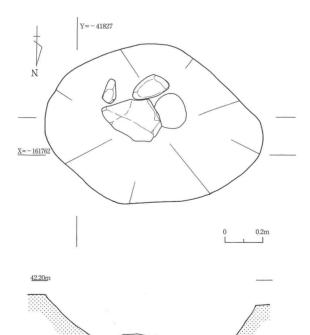
05-335SK (第36図) 調査区北東部、05-275SEの南側で検出した土坑である。平面は

長い三角形状で、底辺は0.7m、高さ1.9mを測る。掘方は底部が 丸い半球形で、深さ約0.2mを測る。埋土は主に褐灰色砂質土で あった。南肩部で土師質の羽釜や瓦器塊の破片が出土した。

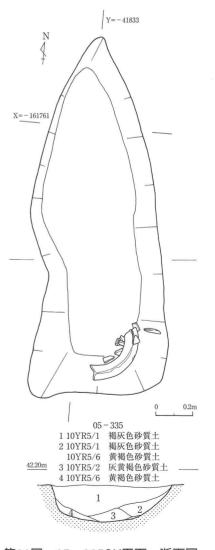
05-445SK (第37図) 溶解炉05-600SKの南東約5mで検出

した平面が五角 形を呈する土坑 である。規模は 長径1.05m、短 径0.9mを測る。 掘方は西側が殺 状で、深 0.3 mを測る。底 る。 中層で土器や 石が出土した。

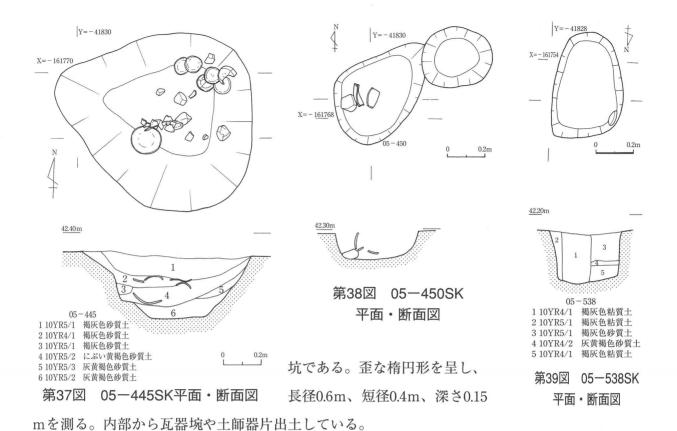
05-450SK (第38図) 溶 解炉05-600SK の約5mの所で 検出した小土



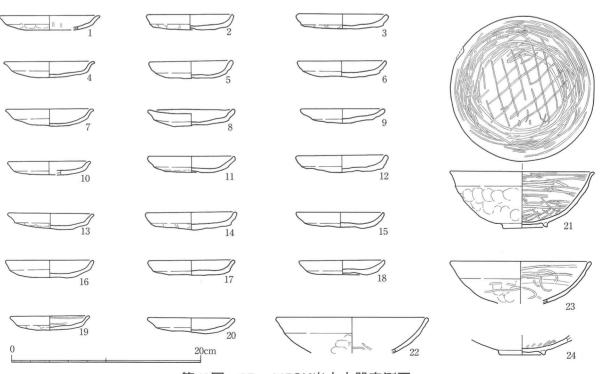
第35図 05-325SK平面·断面図



第36図 05-335SK平面·断面図



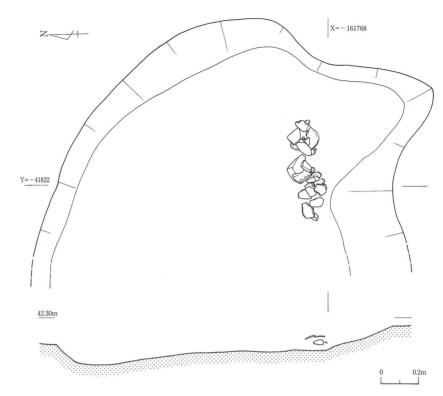
05-445SK出土土器(第40図) 1、19は瓦器小皿。図化していないが、内面にミガキが観察される。 2~18、20は土師器小皿。底面は指オサエが残る物(2、3、11、167)とナデで調整するものがあり、口縁部はヨコナデで仕上げている。 2 は口径8.9cm。21~24は瓦器境。21はほぼ完形で、体部外面は規則的な指オサエが残る。口縁部の幅 2 cmの範囲はヨコナデ調整。見込みは格子状の暗文。体部は圏線状のミガキで調整する。高台は断面三角形であるが、しっかり踏



第40図 05-445SK出土土器実測図

ん張っている。口径 15.2cm、器高6.1cm。 23は体部外面にも数 条のミガキが観察で きる。内面は螺旋状 の暗文が体部まで及 んでいる。瓦器境は 12世紀後葉~13世紀 前葉頃に比定され る。

05-453SK (第41図)05-480SDの北端に繋がる浅い土坑で、溝の水溜め用に掘られたもの



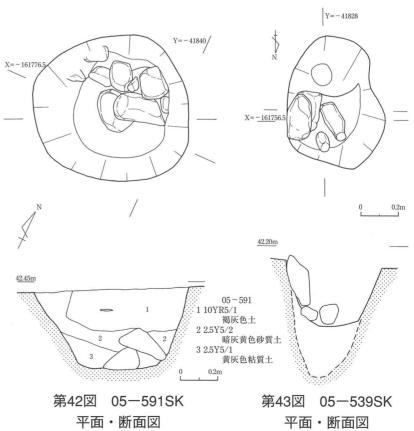
第41図 05-453SK平面·断面図

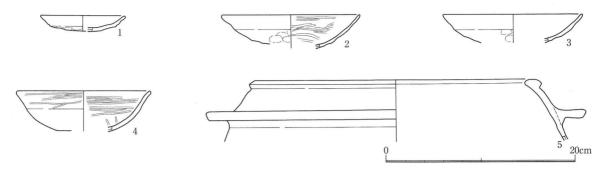
であろう。地山面が緩い傾斜を持ってやや下がった所に掘られており、平面形は歪で、東西約7.0m、南北約5.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は主に褐灰色と紫灰色を発する粘質土であった。掲載した図は東端の礫石と遺物の出土状況図である。第79図に示す瓦器塊が出土している。13世紀末頃の遺構である。

05-538SK(第38図) A区 東北部で検出した0.5m×0.35m を測る歪な楕円に近い平面形の 土坑で、深さは0.3mを測る。 埋土は主に褐灰色粘質土で第 79図に示す瓦器の埦や小皿、 土師器片が出土している。

05-539SK(第43図) A区 東北部で検出したピットである。平面は歪な楕円形で、0.7 m×0.5m、深さは0.6mを測る。 掘立柱建物の柱跡で、北側は柱 の抜き取り時に広げ、埋戻しの 際に角礫を投棄したのであろう。

05-539SK出土土器(第44図)

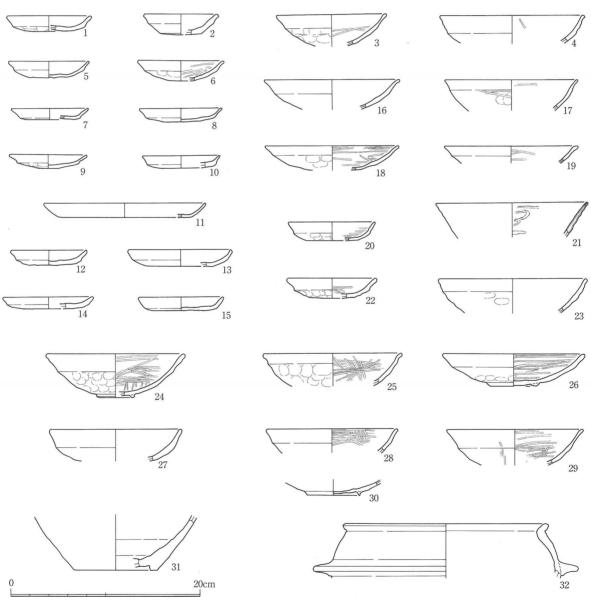




第44図 05-539SK出土土器実測図

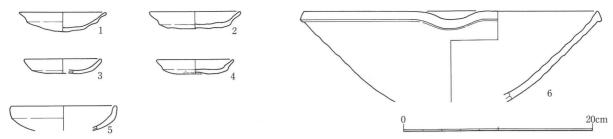
1 は土師器小皿、 $2\sim4$ は瓦器境。 4 は体部外面にも粗いミガキを施す。口径は14.3cm。 3 は全体が摩耗していて調整は不明。 5 は土釜で口縁端部を肥厚させて丸めるもの。口径30cm。

05-591SK (第43図) 溶解炉831SKの南西約2mの所で検出した土坑である。北側は545SK



 $1\ (173)\ 2\sim 4\ (169)\ 5\ (172)\ 6\ (176)\ 7\ (220)\ 8\ (246)\ 9\ (243)\ 10\ (254)\ 11\ (236)\ 12\ (309)\ 13\ (305)\ 14\ ,15\ (306)\ 16\ (161)\ 17\ (199)\ 18\ (245)\ 19\ (261)\ 20\ ,21\ (229)\ 22\ (338)\ 23\ (308)\ 24\ ,25\ (354)\ 26\ ,31\ (325)\ 27\ (323)\ 28\ (347)\ 29\ (357)\ 30\ (348)\ 32\ (386)$ * () 内は付図の遺構番号を示す

第45図 A区各遺構出土土器実測図 1



第46図 05-209SP出土土器実測図

に切られるが、隅丸方形を呈し、規模は0.8m×0.8m、深さ0.4mで、掘削断面は逆台形を呈し、 底面は約0.4m四方である。内部から拳大程度の角礫が重なって出土している。

各遺構出土土器(第46図) 主にピットから出土した土器である。1は瓦器皿、2は須恵器。 3 は瓦器 城で13世紀中葉から後葉ころのもの。 1 ~ 3 は、X=-161759m、Y=-41840m付近の 173SPから出土。 4 は土師器の中皿で口径は15.1cm。 $5 \sim 9$ 、12は瓦器皿。 6 は底部が丸く、塊 に近い。7は底面が平らである。10は土師器小皿。11は土師器の中皿。12は瓦器皿、13~15は 土師器小皿。16~19は瓦器埦で、17は外面にミガキを施す、この調査区ではやや古い13世紀初 頭頃のもの。20、22は瓦器小皿。底部外面に指オサエが残る。23~26、28~30は瓦器埦で、見 込みの暗文や、圏線状のミガキを施すものが多い。31は須恵器の鉢底部。32は土釜で鍔は短く 内彎して立ち上がる口縁端部を「く」字形に短く外反させる。

209SP出土土器 (第46図) X = -161756m、Y = -41827mで検出した建物 4 の南西隅ピッ

上層 Y=-418355 X=-161776 X=-161776 42.50m 05-700 12.5Y5/2 暗灰黄色やや粘性のある砂質土

第47図 05-700SP 平面·断面図

トである。1、2は瓦器小皿、3~5は土師器小皿である。 瓦器皿は図化していないが内面に密なミガキを施している。 土師器皿は口縁部を内外面ともナデで仕上げる。6は東播系

の片口である。 05-700SP (第47図) A区中央

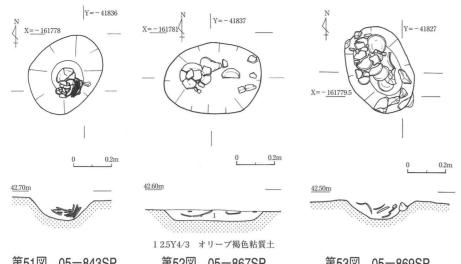
X=-161776 X=-161774.5 42.50m 42.30m

部で「く」の字形に掘られた溝の西側

第48図 05-755SP 平面・断面図

第49図 05-772SP 平面・断面図

第50図 05-701SP 平面・断面図



第51図 05-843SP 平面・断面図

第52図 05-867SP 平面・断面図

第53図 05-869SP 平面・断面図

で検出した直径0.45m を測る歪な円形の小土 坑で、掘方は半球形を 呈し、深さは約15cm を測る。内部からほぼ 完形の土師器皿が10 数枚重なって出土して おり、約2m西側で検 出した溶解炉(05-831SK) に関わる神事 等で使用されたものを

埋納したものであろう。

05-701SP (第50図) A地区の中央、「く」字形に掘られた小溝480-SDの西側で検出した ピットである。 形状は円みを持った方形で、0.35×0.25m、深さ0.2mを測る。ピット内から板石 が3枚重なって出土した。柱を固定するための石と考えられる。

05-755SP (第48図) 05-550SKの東側にある直径約0.6m、深さ0.4mを測るピットで、中 層に土師器皿が10数枚埋納されていた。神事で使ったものを埋納するために掘られたものであ ろう。埋土は主に褐灰色粘質土である。

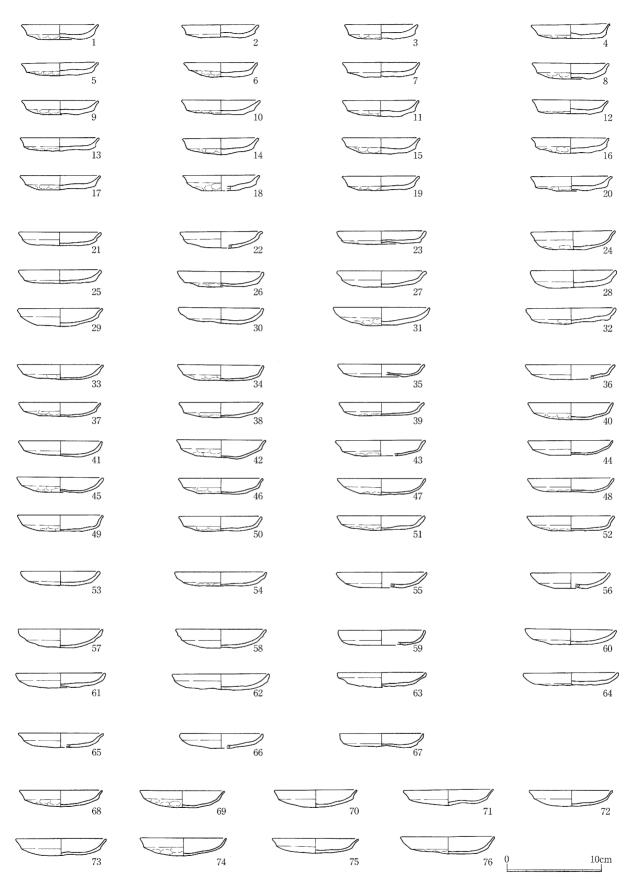
05-772SP (第49図) 大型の土坑05-555SKの東約3m、778SKに東接しているピットであ る。平面は0.35m×0.33mの楕円形を呈し、深さは0.15mを測る。掘方は半球形で、底面は地山 に含まれる小礫のため凹凸している。ピット内から土師器小皿が10数枚重なって埋納されてお り、鋳造に伴う神事等で使用された物を埋めたと考えられる。

05-843SP (第51図) 05-480SDの南側で検出した楕円形ピットで、長径0.45m、短径0.35 m、深さ約0.1mを測る。底部に接して10数枚の土師器皿が出土した。すぐ北で検出した土坑 555SKか西の溶解炉831SKの神事に関わるものであろう。

05-867SP(第52図) 区画溝05-105SDの埋没後に掘られた楕円形のピットで、長径0.5m、 短径0.35m、深さは0.1mを測る。埋土は炭化物混じりの灰色土で瓦器埦や溶解炉の炉壁片、土師 器皿が出土している。

05-869SP (第53図) A区東部で検出した楕円形を呈する小土坑で、0.5m×0.35mの楕円形 を呈し、深さは0.1mを測る。土坑内から地表面からはみ出して、土師器小皿が出土した。地山 は硬く締まった礫土層で深く掘れなかったためと思われる。

05-700SP出土土器(第54図) 20数枚の土師器小皿が出土している。底面には指頭痕が残 り、口縁部は強く摘まんでヨコナデするため外面は外反気味である。口径8cm前後、器高1.5cm 前後。胎土は黄橙色で同一工人の手によるものであろう。



 $1 \sim 20 \ (700) \ 21 \sim 32 \ (755) \ 33 \sim 52 \ (772) \ 53 \sim 56 \ (779) \ 57 \sim 64 \ (843) \ 65 \sim 67 \ (893) \ 68 \sim 76 \ (896)$

第54図 A区各遺構出土土器実測図 2

05-755SP出土土器 (第54図 21~32) 約15枚の土師器小皿が出土した。底部は丸みを持ち、指頭痕を残すものと指頭痕の上にナデで仕上げているものがある。口径8.6cm~9.0cm、器高1.5cm~2.0cmを測り、700SP出土の皿より大きいものが多い。

05-772SP出土土器 (第54図 33~52) 20数枚の土師器皿が出土している。20枚を掲載した。口縁部を摘んでヨコナデし、外面は外反気味に立ち上がるものが多い。底面は指頭痕を残すものと、ナデで仕上げるものがある。法量は口径8.8cm~9.5cm、器高1.4cm~1.7cmの範囲内に納まる。33は口径9.0cm、器高1.6cm。

05-779SP出土土器 (第54図 53~56) 4 枚出土。53~56は土師器小皿。53、54は完形。55、56は破片である。底面は指頭痕の後ナデ、内面はナデで仕上げる。 2 は口径9.8cm、器高1.5cm。05-843SP出土土器 (第54図 57~64) 10数枚分出土したが実測できたのは 8 枚である。底部から口縁まで全体に円みを持つものが多い。底面はナデ、口縁部はヨコナデで仕上げる。 6 はやや大きく、口径10.0cm、器高1.7cmを測る。

05-893SP出土土器(第54図 $65\sim67$) X=-161778m、Y=-41828m付近にあるピットで、遺構図は掲載していない。土師器皿が 3 枚出土した。65は口径9.0cm、器高1.5cmを測り、外反気味の口縁部を作る。

05-896SP出土土器 (第54図 68~76) 10数枚分出土したが実測できたのは 9 枚である。口縁部は強くヨコナデして外反気味に開くものが多い。底面に指頭痕を残す68、69、71、74、76 と、指オサエの上からナデで調整する70、72、75がある。

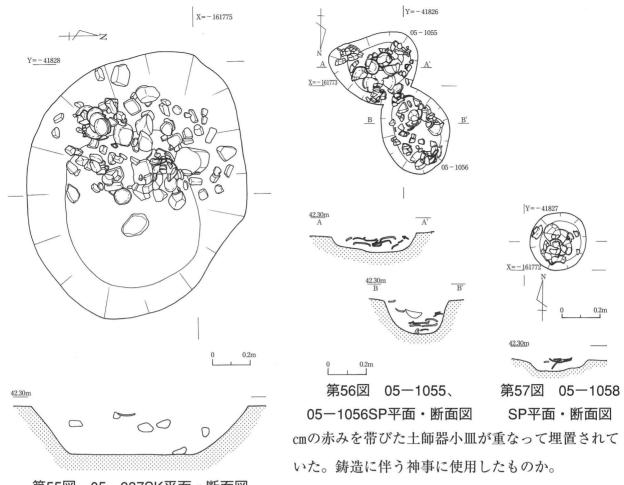
05-937SK(第55図) 鋳造土坑05-550SKの東側で検出した楕円形を呈する土坑で、長径 1.4m、短径1.2m、深さ0.35mを測る。土坑内の下中層は拳大までの礫石、上層は礫石と土師器 皿で、下層は主に礫石の中に土師器皿や瓦器境片が混入した状態であった。この土坑は掘削後に、周辺の礫石や土砂を投棄し、その後に土師器皿を数枚ずつ重ねられた状態で埋置したのであろう。 鋳造に関わる神事で使用された皿を埋納したのであろう。

05-1055SP(第56図) 土坑05-555SKの東北3.5mで検出した平面形が歪な三角形状を示す。 規模は0.45m×0.35m、深さは地山が硬い礫層で掘るのが困難だったのか約0.1mで、浅い土坑である。土師器小皿が15枚以上出土している。

05-1056SP(第56図)05-1055SK北西に隣接して検出した土坑で、平面は楕円形を呈する。 規模は長径0.45m、短径0.35m、深さは0.2mを測る。土坑内から土師器小皿が20数枚出土した。

05-1058SP(第57図) 溶解炉05-600SKの南約7 mで検出した径0.3mを測る円形ピットで、深さは地山が硬い礫土層のため7 cm程度であったが、10数枚の土師器皿が地山よりやや盛り上がった状態で重ねられていた。

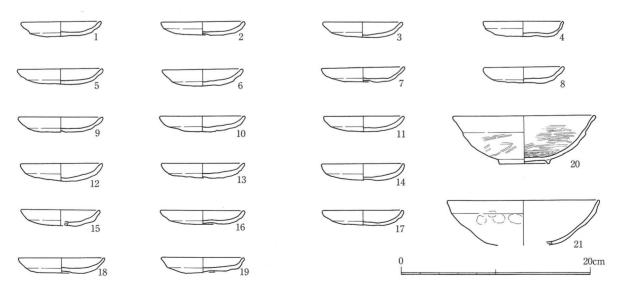
05-1059SP(第61図) 05-600SKの西南で検出した土師皿を埋めたピットである。形状は やや歪な円形で直径約0.8mを測る。深さ20cmを測る擂鉢形で、掘方は地山に礫があったため西 側は2段掘りとなっている。ピットに黄灰色土、灰黄色土が堆積した後に約20枚の直径約10



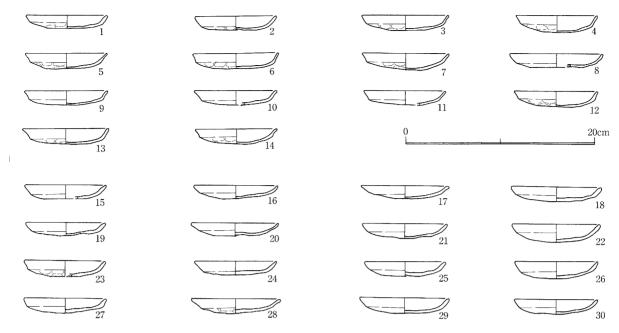
第55図 05-937SK平面・断面図 05-937SK出土土器(第58図) 20枚分以上の

土師器小皿が出土しているが、実測できたのは19枚であった。1~19は土師器小皿。口径は8.2 cm~9.2cm、器高は1.4cm~1.8cmを測る。口縁部を摘んでヨコナデ、底面は指オサエの後ナデで仕上げている。1は口径8.2cm、器高1.5cm。20、21は瓦器塊。20は体部外面に粗いミガキを施し、見込みは格子状の暗文、体部内面は圏線状のミガキで仕上げる。

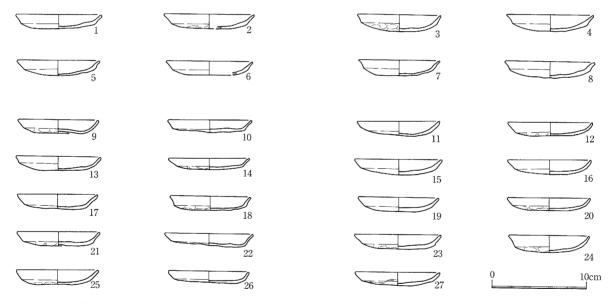
05-1055SP出土土器 (第59図) 土師器小皿が20枚程度出土しているが、実測できたのは14



第58図 05-937SK出土土器実測図



第59図 05-1055SP (1~14)、05-1056SP (15~30) 出土土器実測図



第60図 05-1058SP (1~8)、05-1059SP (9~27) 出土土器実測図

枚である。底部は丸みを持ち、底面は指オサエが残る。内面はナデ、口縁部はヨコナデで仕上げている。1は口径8.6cm、器高1.7cm。

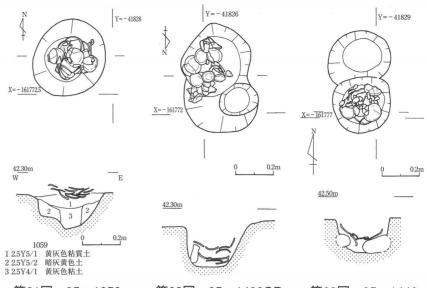
05-1056SP出土土器(第59図) 土師器小皿が20枚前後出土している。実測できたのは16枚である。丸みを持った底部から開いて立ち上がる口縁部を作る。口縁部はヨコナデ、底面は指オサエが残る。内面はナデで仕上げる。1は口径9.1cm、器高1.4cm。

05-1058SP出土土器(第60図) 土師器小皿が出土した。実測できたのは8枚である。底部、 見込みはナデ、口縁部はヨコナデで仕上げている。1は口径9.2cm、器高1.5cm。

05-1059SP出土土器 (第60図) 土師器小皿が20枚分以上出土した。実測できたのは19枚

である。底部は平らな面を作るものと丸みを持つものがあるが、何れも指オサエが残る。口縁部はヨコナデ、内面はナデで仕上げる。19は外面に粘土紐の痕が残る。19は口径4.9cm、器高1.4cm。

05-1439SP (第62図) 溶解炉05-600SK炉の南約 7 mの所で検出した小土坑 である。初めは北側ピット



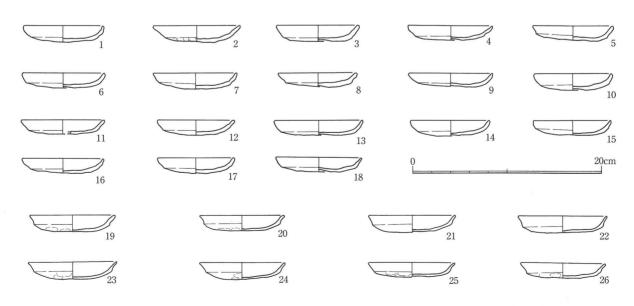
第61図 05-1059 SP平面・断面図

第62図 05-1439SP 平面・断面図 第63図 05-1449 SP平面・断面図

(1440 S P) の方が新しいと判断したが、測量後の精査で1440SPを切って掘られていることが分かった。土坑の大きさは南北0.4m、東西0.4mの歪な方形に掘られたと考えられる。深さは0.2mで、内部から20枚以上の土師器小皿が重なって出土した。皿面を上にしたものが多く、鋳造に伴う神事で使用された後、丁寧に重ねて埋納されたものであろう。

05-1449SP(第63図) 大型土坑05-555SKの東側約2mで検出したピットである。付図1では764SPの方が新しいように表現してしまったが、第63図に示したようにこの土坑の方が新しい。平面は丸みをもった方形を呈し、一辺0.3m、深さ0.2mを測る。内部には地山に含まれる礫石がそのまま残っており、その上から土師器小皿が20枚分以上纏まって出土した。西側にある鋳造に関わる祭祀で使用されたものを埋納したのであろう。

05-1439SP出土土器 (第64図) 土師器小皿が20枚以上と羽釜片が出土した。実測できたのは



第64図 05-1439SP (1~18)、05-1449SP (19~26) 出土土器実測図

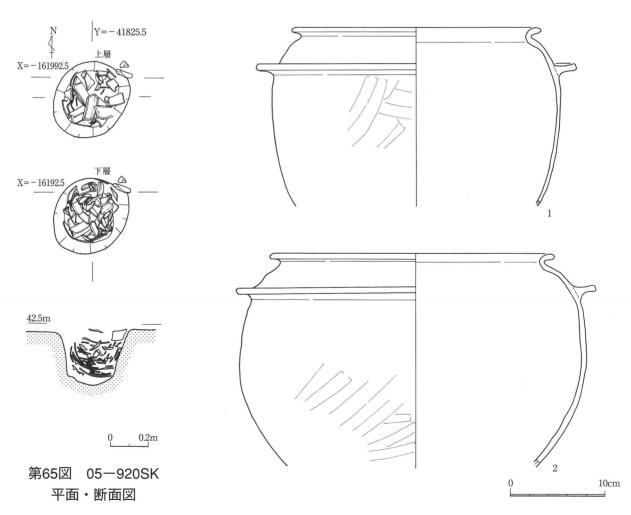
17枚である。胎土は赤みがかった橙色を発する。器形は近い丸みを持った底部から開いて立ち上がる口縁部を作る。底面は指オサエを残すものが多い。口縁部はヨコナデで仕上げる。内面はナデである。

05-1449SP出土土器(第64図) 土師器小皿がまとまって出土した。破片を含めると10数枚あり、実測できたのは8枚である。底面は指オサエを残すものが多い。口縁部はヨコナデ調整である。1は口径9.1cm、器高1.7cm。

その他の遺構

区画溝の南側は民家があった関係で、 $X = -161795 \, \mathrm{m}$ 付近に、東西に下水管やガス管が通っており、約3 m幅で遺構面が攪乱されていた。この攪乱部を境に地山は、青灰色粘質土に変わり、礫石が地表面に露出するようになって、遺構数は減少する。

05-920SK (第65図) 屋敷地区画溝105-SDの東側、地山の礫石が露出し、遺構が減少するA地区中央で検出した小土坑である。平面0.4m×0.3mの歪んだ楕円形を呈し、掘方はほぼ垂直で、深さ0.3mを測る。土坑内から土師質羽釜や瓦器城、土師器皿が大量に出土した。検出時の羽釜は小さい遺構内に納まるように壊されていた。、復元すると5固体分あり、共に底部を欠いていたが、ほぼ完形に復元できるものであった。また、瓦器城、土師器皿も完形のものは少なく、



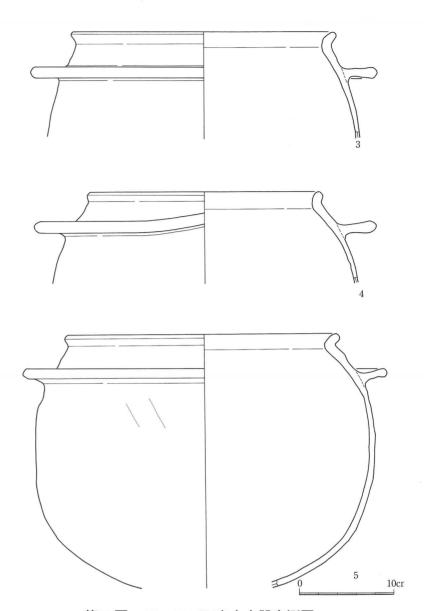
第66図 05-920SK出土土器実測図 1

土器は故意に割って埋納したと 考えられる。土器の組み合わせ から、泉州や南河内に多く見ら れる真言宗系の地鎮祭祀である 土公供に関わる遺構であろう。

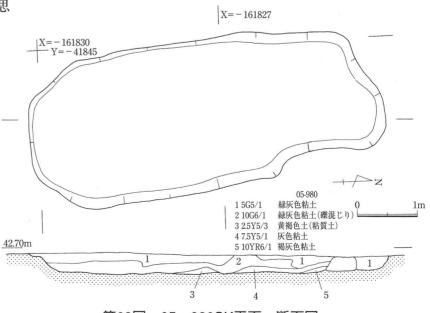
05-920SK出土土器(第66、67図) 1~5は土釜である。 球形の体部に水平に短く延びる 鍔から、内彎して立ち上がる口 縁部を持つ。口縁端部を外反さ せ、口縁端部は丸く収める1~ 3と、上につまみ上げて外傾す る面を作る4、「く」字形外反 させて外傾する面を作る5がある。

05-980SK(第68図) 南 西端で検出した大きな浅い土坑 である。南北5.2m以上、東西 2.5m、深さ0.15mを測る。底面 は平坦である。埋土は緑灰色粘 土で瓦器片が出土している。堆 積土から中世後期の集落廃絶後、 水田経営時に営まれた遺構と思 われる。

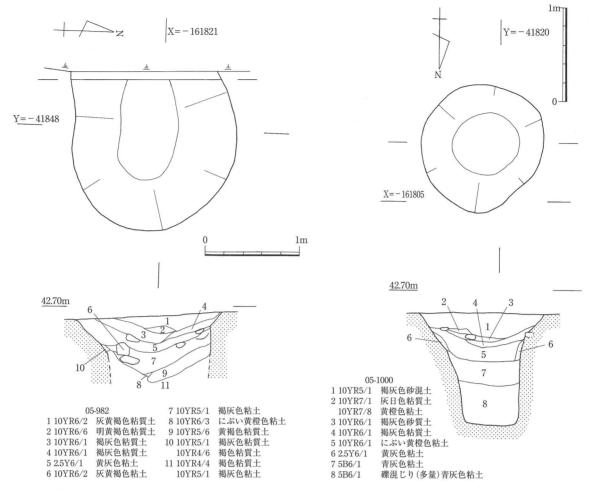
05-982SE (第69図) A調査区西端で検出した井戸で、西側は調査区外に広がる。 平面形は楕円形で、南北1.7m、東西1.7m以上、深さ1m以上を測る。掘方は垂直に近い。埋土は下層に褐色と褐灰色粘土、中層に褐灰色粘土、上層に灰黄褐色粘土が凹レンズ状に堆積する。



第67図 05-920SK出土土器実測図 2



第68図 05-980SK平面・断面図



第69図 05-982SE平面·断面図

第70図 05-1000SE平面·断面図

05-982SE出土土器 (第82図 133~145) 139~141は瓦器皿で139、140は体部内面にミガキを施す。141は口縁部内外面をヨコナデする。復元口径11.7cm。142~144は土師器小皿。144は底面がほぼ平らな面をつくる。口径9.4cm。器高1.8cm。145は瓦器塊。体部外面は規則的な指オサエ、内面は格子状の暗文と圏線状のミガキを施す。

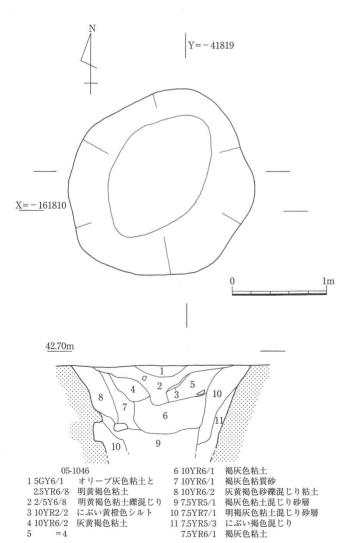
05-1000SE(第70図) A地区南部で検出した。平面は円形で直径1.3mを測る。ほぼ垂直に掘られ、深さは1.2mを測る。埋土は主に礫を含む黄灰色粘土、青灰色粘土、にぶい黄橙色粘土、礫混じりの褐灰色土であった。底面まで掘削しても湧水は観察されなかった。

05-1046SE(第71図) 05-1000SEの南側で検出した井戸である。平面は歪な円形を呈し、直径は約2m、深さは1.0m以上を測る。埋土は主に褐灰色粘土、粘土混じりの明褐灰色砂などで、地山から流出した土砂が明瞭に観察される。

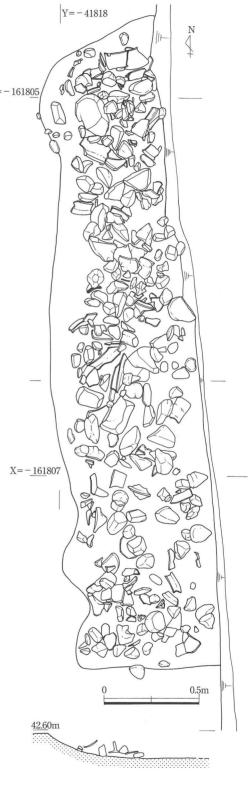
05-1045SK(第72図) A区南部東端で検出した礫石と土器が詰まった浅い土坑である。南北3.3m以上、東西1.2mを測る。深さは検出範囲内で0.15m程度であった。土坑内は径20cm程度までの礫石と羽釜片などの大型土器片で埋め尽くされ、その隙間に雨水と共に流れ込んだ土砂が粘土化して充填されていた。中世集落遺跡で、地山を方形に浅く掘り込んで礫石を敷き詰めた遺構は茨木市の総持寺遺跡などでもみられる。火葬場とする説や竈など湿気を嫌う施設の下に水捌

けを良くするための施設とする説などがある。今回の検出した場所は工房区画と屋敷地のほぼ中間で、周辺に遺構が少なく、独立したものとなっている。礫石に火を受けた痕や炭化物が含まれていないので礫石の上で直接火を使ったことは考えられない。また、共同で利用された炊事場とするには家屋から離れており、性格は不明である。

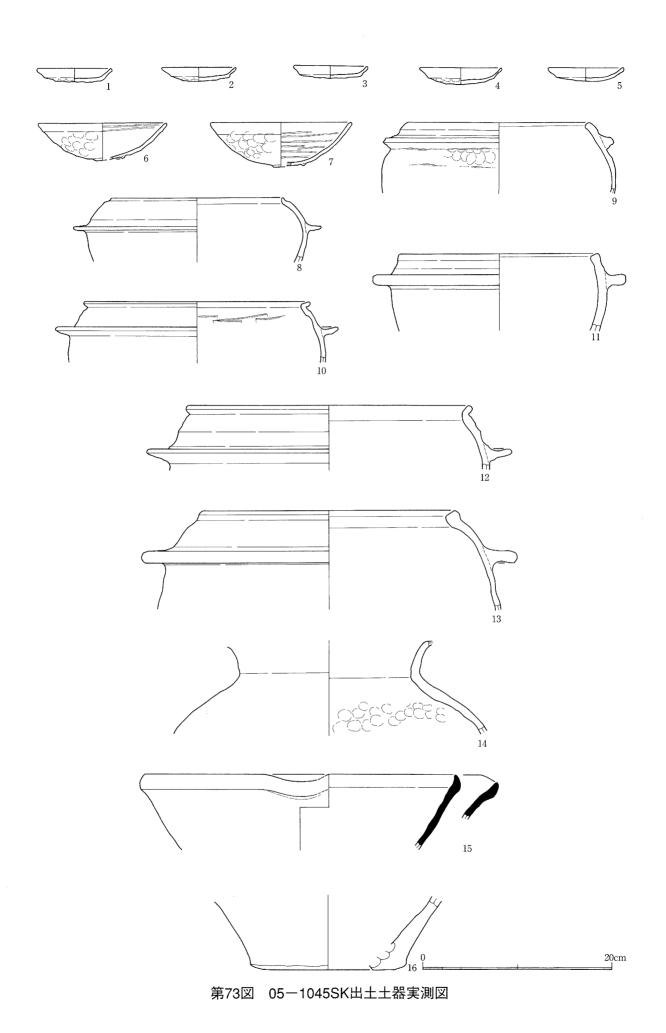
05-1045SK出土土器(第73図)1~4は瓦器小皿。 内面は摩耗し、調整を観察できない。5は土師器小皿。 6、7は瓦器塊。高台は細い粘土紐を貼り付けただけで ある。体部内面は圏線状の粗いヘラミガキで仕上げてい る。7は口径15cm、器高4.8cm。8~13は土釜。球形の 胴部から口縁端部は僅かに上に摘んでおさめる8、内傾 する面をつくる9、13、僅かに「く」字形に外反させ る10、12、短く開く鍔から口縁部が内傾気味に立ち上 がり、僅かに内傾する面をつくる11がある。いずれも 13世紀~14世紀初め頃のもの。14、16は須恵器の甕。



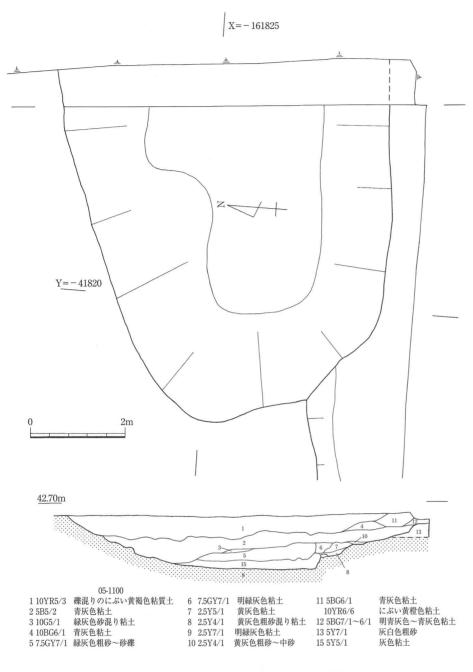
第71図 05-1046SE平面·断面図



第72図 05-1045SK 平面・断面図



- 52 -



第74図 05-1100SK(池) 平面・断面図

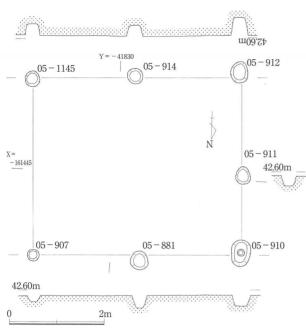
14は体部内面に指 頭痕が残る。16は 底部破片である。 15は東播系の片口 鉢で、口縁端部は 断面三角形状であ る。

05-1100SK (第74図) $A \times$ 南東隅で検出した 池である。里道の 下にある条里溝と 南東端が重なって おり、断面でみる と池の廃棄後も溝 は浚渫して利用さ れている。池の平 面形は隅丸の方形 で、規模は、南北 6.9m、東西7.6m 以上、深さは1.4 mを測る。埋土は 下層に灰色粘土や 砂礫層、中層に青 灰色粘土が堆積

し、上層は人頭大程度までの礫を多量に含む黄褐色粘質土である。中下層は滞水時、上層は廃棄 時の投入土砂である。遺物は上層に多く、瓦片や土師器皿、瓦器片、青磁が出土しているが小片 が多く実測できたのは青磁1点のみであった。

05-1113SD (付図1) A調査区の南端、里道の下で検出した溝である。05-1100池に流れ込む溝であったと考えられるが、池の廃棄後、流路を南に僅かに振らせ中近世の条里溝として機能していたと考えられる。北肩部を検出したのみで、主要部は里道下にある。また、側溝掘削時に壊してしまったこともあり、土層図を作成することはできなかったが、埋土は主に灰白色系粘土で、深さは0.3m以上を測った。

建物跡 区画溝05-105SDの南側で2棟の掘立柱建物を復元した。



第75図 建物 9 平面・断面図

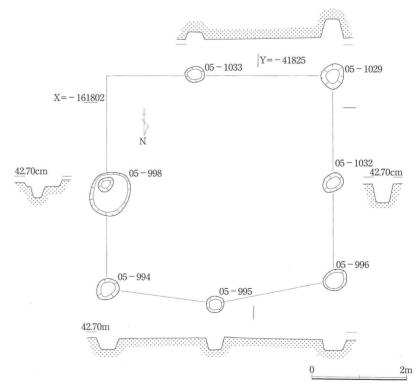
建物 9 (第75図) A南部で検出した 2 間四方の東西建物跡である。桁行4.4m、梁行3.8mで、面積は16.7㎡を測る。東側は中央の柱を欠くが、柱間寸法は桁行きが2.2m、梁行きは1.7m、2.1mを測る。柱穴は円形で北東隅が大きいが直径0.25~0.55m、深さは0.2~0.3mを測り、北東隅の柱穴は柱痕が残っていた。他の柱穴は埋土が褐灰色や灰色土層で柱痕は確認できなかった。

建物10 (第76図) A区の南部、X = -161802m、Y = -41825m付近で復元した 2間四方の建物跡で、南東隅の柱穴を欠き、 北側中央は外に張り出すが、南北約4.4m、

東西約4.8mを測る。柱間隔は西側桁行が2.1m、2.3m北側梁行は2.5mを測り、間隔が広い。柱穴は円形で直径0.4~0.5m、深さは0.25~0.35mを測る。この建物は工房区画の南側にある。地山は礫を多く含む粘土層で居住には適さない所であり、物置小屋的なものと考えられる。

05-1115SK (第88図) 溶解炉600SKの北約4mの所で検出した平面が歪な五角形の土坑である。この付近は北東に緩く傾斜しており、工房として利用される前後に整地されているが、この

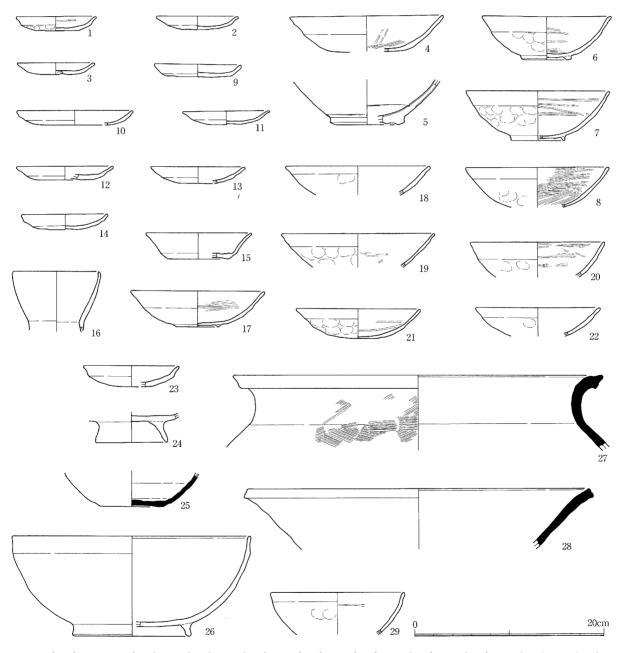
土坑は整地以前に造られた土坑である。大きさは長径2.3m、短径1.95m、深さは約0.3mを測る。底面に接して礫石が出土しており、熱は受けていないが鋳造に関わる作業に使用されたと考えられる。



第76図 建物10平面・断面図

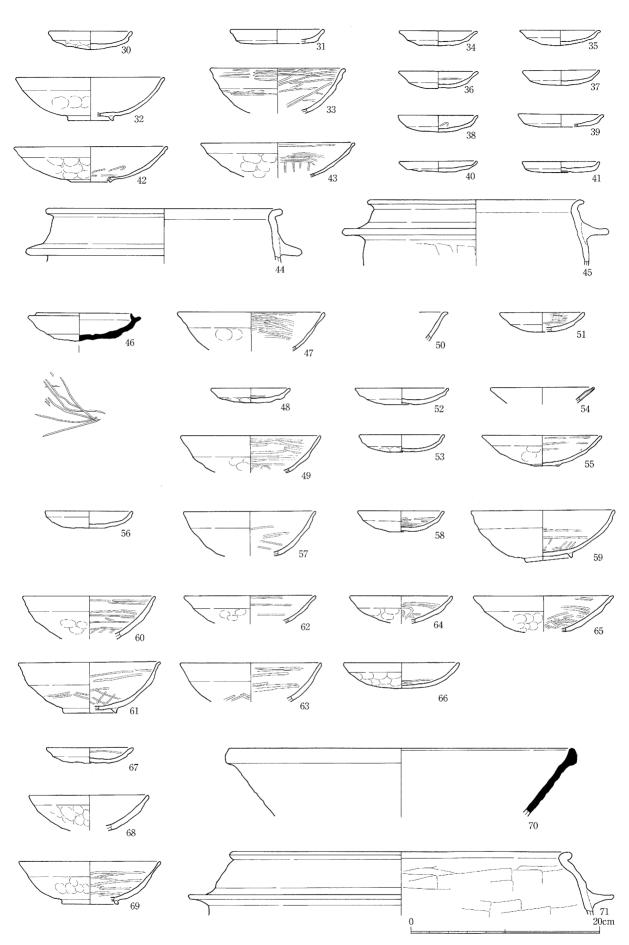
各遺構出土土器(第77~86図) A区で多数の遺構を検出したが、各遺構から多くても数点しか出土しなかったのでまとめて掲載した。遺構の位置は別表に示した。また、調査年次毎に整理したのでB地区屋敷地内で検出した遺構の遺物も掲載している。

第77図(1~29) 1、2は瓦器小皿。3は土師器小皿。4は瓦器城。5は白磁碗で高台の削りだしが浅い。北端で検出した溝状の遺構210SD出土。6~8は瓦器城で、外面のミガキは省略されるが高台が逆台形のもの。北端の05-110SK出土。9~11、13、14は土師器小皿。12は瓦器小皿。15は白磁の杯で底面を浅く削って浮かせる。16は須恵器の口縁部。17~22は瓦器城。21は高台がない。23は瓦器小皿。24は脚部で皿か城になる。25は須恵器の城で、東播系のもの

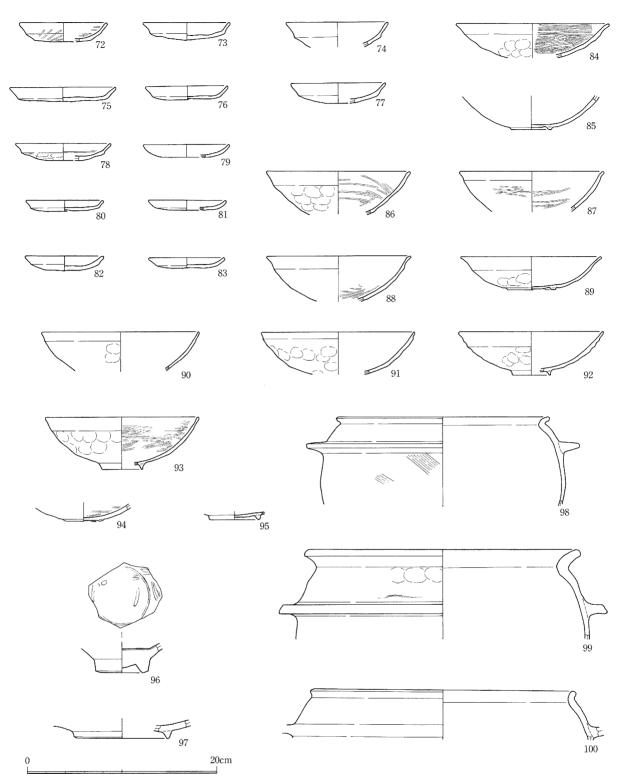


 $1\sim5 \quad (210) \quad 6\sim8 \quad (110) \quad 9 \quad (205) \quad 10 \quad (323) \quad 11 \quad (445) \quad 12 \quad (325) \quad 13 \quad (335) \quad 14 \quad (777) \quad 15 \quad (980) \quad 16 \quad (330) \quad 17 \quad (320) \quad 18 \quad (205) \quad 19 \quad (600) \quad 20 \quad (379) \quad 21, \quad 22 \quad (453) \quad 23\sim26 \quad (902) \quad 27 \quad (897, \quad 870) \quad 28 \quad (950) \quad 29 \quad (779)$

第77図 A区各遺構出土土器実測図3 () 内は遺構番号を示す



30、32(110)33(292)34~45(300)46(330)47(260)48、49(205)50、51(219)52、53、56(485)54、55(530)57(905)58、59(510)60、61(515)62(1029)63(545)64、66(480)65(495)67~69(520)70(540)71(335) 第78図 A区各遺構出土土器実測図 4



72 (449) 73, 74, 84 (591) $75 \sim 77$, 85 (538) 78 (506) 79 (405) 80 (553) 81 (434) 82 (444) 83, 86 (469) 87, 88 (450) 89 (576) 90 (545) 91, 92 (569) 93 (555) 94 (518) 95 (436) 96 (422) 97, 100 (453) 98 (471) 99 (448)

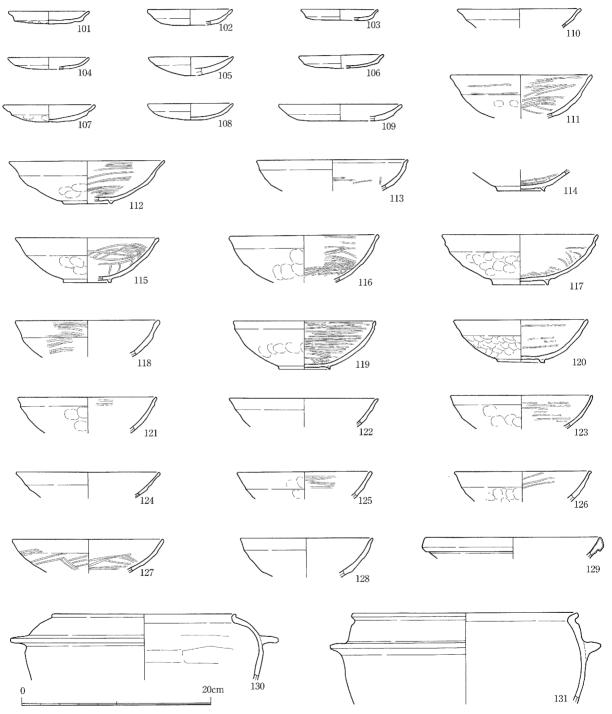
第79図 A、B区各遺構出土土器実測図5

か。26は瓦器 城で全体に摩耗していて調整が残っていないが、器形や大きさから11世紀代に遡る。 $16\sim26$ は調査区東部、X=-161790m付近の浅い落ち込み902SK出土。27は須恵器で甕の口縁部、28は東播系の鉢である。29は瓦器 城で摩耗が著しい。

第78図 (30~71) 主に溝から出土した土器である。

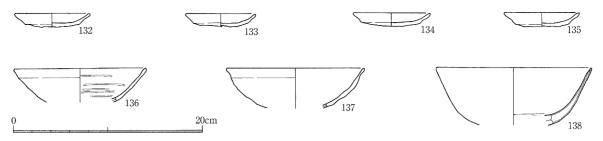
30、31は土師器小皿である。32、33は瓦器塊で、32は器壁が摩耗している。33は体部外面を 疎なヘラミガキ、内面はやや密にヘラミガキする。34~41は瓦器小皿。35~37は見込みに暗文 を描く。39~41は土師器小皿。42、43は瓦器塊で見込みに暗文、体部内面は圏線状のヘラミガ キである。44、45は土釜。31~41は05~300SD出土。

46は須恵器杯身で古墳時代後期のもの。府営住宅の調査でこの時期の畠が検出されており、



 $101 \ (49) \ 102 \ (835) \ 103, \ 110 \ (657) \ 104 \ (652) \ 105 \ (703) \ 106 \ (764) \ 107, \ 119, \ 123 \ (765) \ 108 \ (855) \ 109, \\ 111, \ 113, \ 114 \ (858) \ 112 \ (608) \ 115 \ (624) \ 116 \ (698) \ 117 \ (744) \ 118, \ 122 \ (650) \ 120 \ (867) \ 121 \ (687) \ 124 \\ (683) \ 125 \ (707) \ 126 \ (719) \ 127 \ (865) \ 129 \ (693) \ 130 \ (788) \ 131 \ (697)$

第80図 A、B区各遺構出土土器実測図 6



第81図 B区05-1336SP出土土器実測図

近くに集落の存在が予想される。47は瓦器城。50は白磁碗の口縁部小片。35、48、51、58は瓦器小皿。52、53、56は土師器小皿。54は青磁で碗の口縁部破片。55は瓦器城で高台が著しく退化した時期のもの。

60~65は瓦器境。61、63、64は体部外面に疎なヘラミガキ、内面は圏線状の密なヘラミガキを施す。66は土師器皿である。67~69は05-520SDから出土した土器。67は瓦器小皿。68は瓦器境。68は内面が摩耗している。69は内面にやや密なヘラミガキが残る。70は東播系の鉢、05-540SD出土。71は土釜で05-335SD出土。

第79図(72~100) 主にピット、土坑などから出土した土器である。

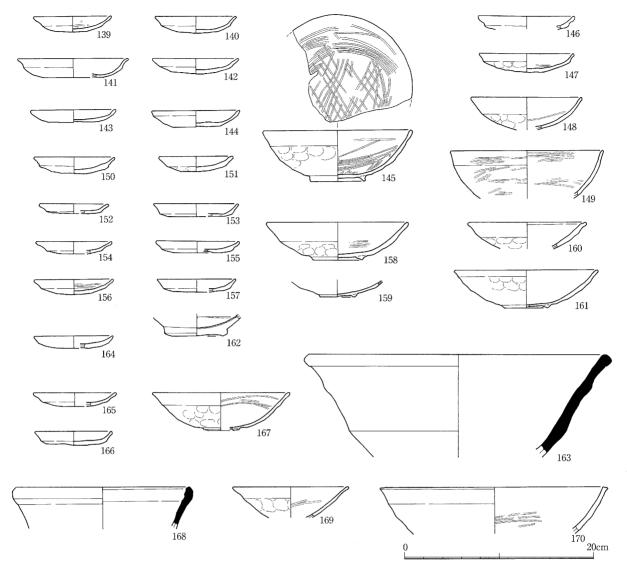
72~75、77、78は瓦器小皿で、摩耗しているが、内面に暗文やヘラミガキの痕が微かに観察できるものが多い。75の内面はナデである。76、79~83は土師器の小皿で底部外面に指オサエの残るものが多い。84~95は瓦器塊。全体に器壁が摩耗し、脱色して灰白色の胎土が露出しているものもある。外面のミガキは省略され、内面の暗文や圏線ミガキも粗雑である。高台も退化し、断面が歪な三角形を呈する。98~100は土師質の土釜。98の口縁端部は短く外反する。99は内面を削るためやや肥厚気味になる口縁部を大きく外反させる。100は内彎する口縁端部を摘み上げて仕上げる。60は白磁碗の高台で底部は露胎である。97は土師器塊の高台部分。

第80図 (101~131) 主にピットや土坑から出土した土器である。

101、102は瓦器小皿、102は内面をミガキ痕が見える。103~109は土師器の皿で、口縁部を摘んでヨコナデする。底面は指オサエ痕が残る107とナデで仕上げるものがある。110~128は瓦器 境。高台は歪な台形の120と逆三角形の114、117、119がある。体部外面は規則的なヘラミガキを施す118と数条のミガキを施す111、118と、ミガキが省略され、指オサエだけで仕上げるものがある。内面は見込みに平行線や螺旋状の暗文を巡らせ、体部内面は圏線状のミガキで仕上げるものが多い。いずれも12世紀末から13世紀前半頃のものであろう。129は白磁碗の玉縁状に肥厚する口縁部。130は瓦質の羽釜で、鍔部から大きく内彎し、口縁端部は短く立ち上がる。口径19.3cmで、三足釜になるのであろう。131は土師質の羽釜で鍔は断面三角形状で短く、口縁部の内傾度も小さい。

第81図(132~138) B区のピット05-1336SPから出土した土器である。

132~135は瓦器小皿。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はナデで仕上げている。136、137は



139~144、145 (982) 146 (532) 147~149 (950) 150~163 (1351) 164 (983) 165~167 (275) 168 (1046) 169、170 (10) 第82図 A、B区各遺構出土土器実測図 7

瓦器城。内面は粗い圏線ミガキを巡らせる。

第82図 (139~170) 主に井戸から出土した土器である。

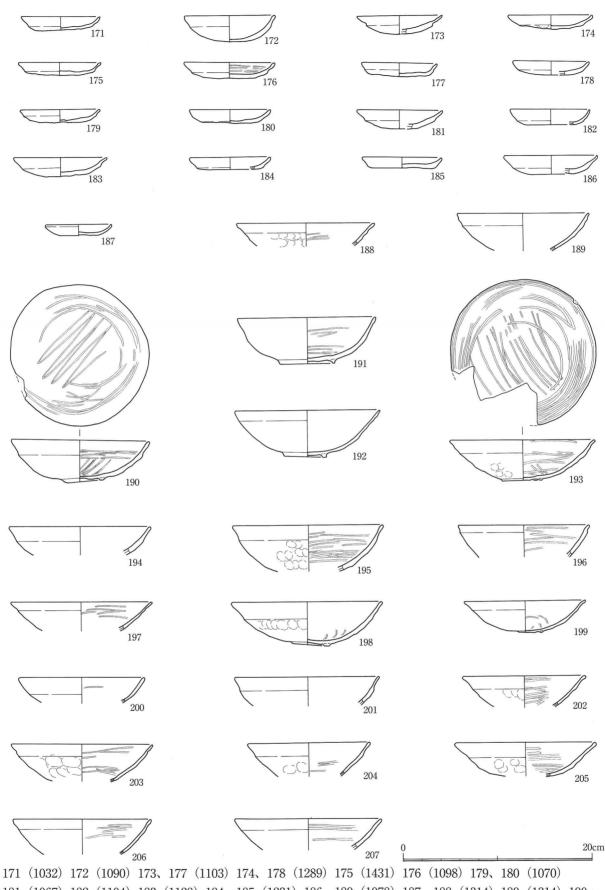
139~145は既述のように05-982SEから出土。

146~149は区画溝05-105SDを切る井戸05-950SEから出土。146は瓦器小皿で、摩耗しているが内面はミガキが微かに残る。147は土師器小皿。148、149は瓦器塊で、149は体部外面に口縁近くまでやや密なミガキを施す。

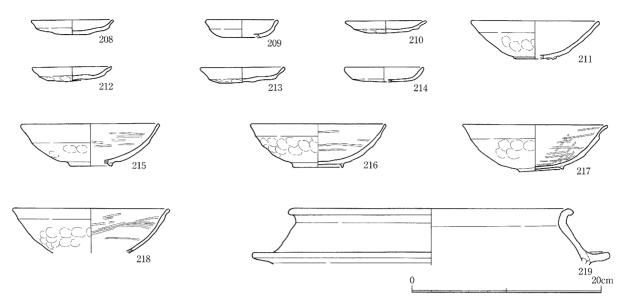
150~163はB区屋敷地1北側の井戸05-1351SEから出土した土器。150~156は瓦器小皿。156は口縁部内面にミガキで調整する。152~155はヨコナデ調整。見込みはナデ調整。157は土師器小皿。158~161は瓦器塊で、151は体部外面を2段のヨコナデで成形する。162は白磁碗の高台。外面は無施釉である。163は東播系の鉢。内面は丁寧なナデである。

164は土師器小皿で、A区南端の05-983SEから出土。

165~167は05-275SE出土。165は瓦器小皿で口縁部はヨコナデ調整。166は土師器小皿。167



第83図 A、B区各遺構出土土器実測図8



208 (940) 209~211 (947) 212 (910) 213、214 (944) 215~217 (944) 218 (996) 219 (921) 第84図 A区各遺構出土土器実測図 9

は瓦器城で、体部外面は指オサエ、内面は粗い圏線状のミガキである。13世紀後半のもの。168 は玉縁状の口縁端部を作る小型の須恵質の鉢である。05-1046SE出土。

169は瓦器 城で体部は直線的に開く。復元口径12.1cm。170は瓦質の鉢であろう。169、170は D 区から出土した。

第83図(171~207) 主にピットから出土したもの。

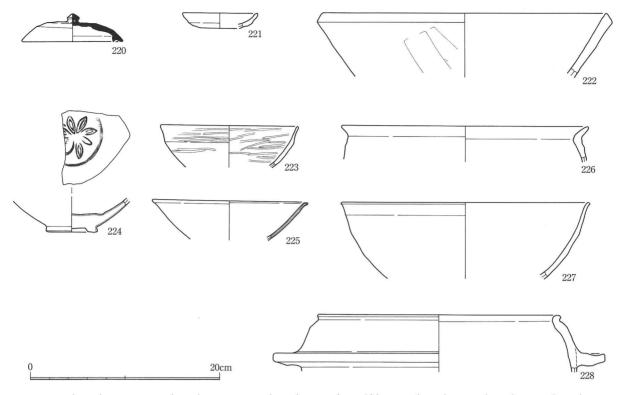
171~176は瓦器小皿。口縁部は内彎気味に立ち上がるものと、強くヨコナデして外反気味に立ち上がるものがある。内面はナデで仕上げるものと、ヘラミガキで仕上げる172がある。171は口径8.4cm、器高0.9cm。177~187は土師器小皿。口縁部は内彎気味に立ち上がるものが多く、ヨコナデで仕上げている。

188~207は瓦器城。高台は断面が小さな台形の191と粘土紐を貼り付けた程度の190、193、199がある。体部外面は指押さえとヨコナデで仕上げられている。見込みは平行の暗文や鋸歯状に折り返して連続させるものがあり、内面は密な圏線状のミガキを施す193、195と、粗略化されたものがある。190は口径14.8cm、器高4.6cm。

第84図(208~219) A区の05-105SDの南側のピットや土坑から出土したもの。

208、211、213は土師器小皿。底部はナデ、口縁部はヨコナデ調整する。208は口径8.5cm、器高1.5cm。209、210、212は瓦器小皿で、底面には指オサエ、口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げており、内面のミガキが消失した段階のもの。212は口径8.9cm、器高1.7cm。214~218は瓦器塊。214は高台の退化が著しい。215~217の高台は断面三角形で、体部外面は指オサエ、内面はミガキで仕上げる。217は口径15.1cm、器高5.0cm。器壁は摩耗している。体部は直線的に開いて立ち上がり、高さも低い。口径13.8cm、器高4.0cm。219は土釜の口頚部破片で、口縁部直下を強くヨコナデする。

第85図 (220~228) A区南部とB区のピットから出土したもの。



220 (1281) 221、222 (1309) 223、226 (1074) 224 (1100池) 225 (1205) 227 (1031) 228 (1347)

第85図 A、B区各遺構出土土器実測図10

228は須恵器の杯蓋で7世紀代のもの。混入したのであろう。221は瓦器小皿。222は東播系の鉢で13世紀後半のもの。221、222は屋敷地柱穴群内の05-1309SP出土。224は青磁で見込みに花文を描く。龍泉窯系のもの。225は白磁碗で直線的に開く口縁端部を僅かに外反させる。227は瓦質の鉢。228は土釜で、水平に開く鍔から内彎して立ち上がる口縁部をつくる。

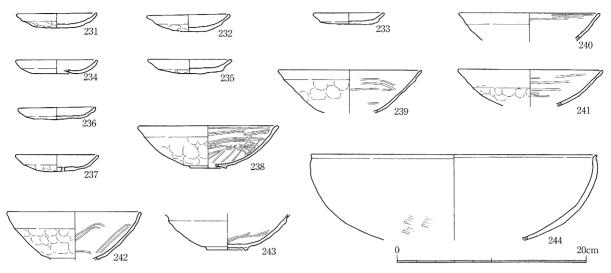
第86図 (229、230) A区のピットから出土。229は土師器皿、230は土釜の小破片で、口縁端部を外反させる。

第87図 (231~244) 231、232は瓦器小皿。口縁部はヨコナデで仕上げる。233~237は土師器小皿。235、237は底面に指頭痕が残る。238~243は瓦器埦。238、239、242は見込みに粗い螺旋状の暗文を描き、体部は圏線状のミガキで調整する。244は土師器の坏で口径30.0cm。底部にハケメが残る。



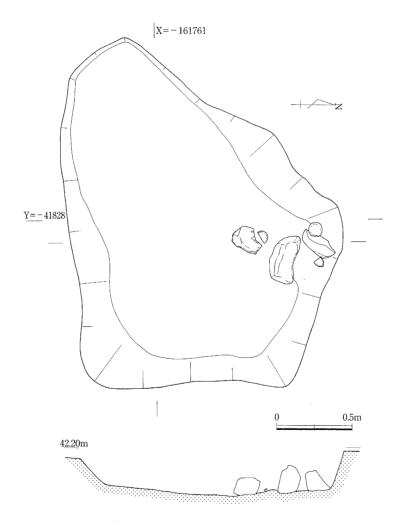
229 (1423) 230 (1440)

第86図 A、B区各遺構出土土器実測図11



 $231 \sim 233, \ 240, \ 241 \ (1332) \ 234, \ 235, \ 238, \ 239 \ (1115) \ 237 \ (1131) \ 242 \ (1051) \ 244 \ (1153)$

第87図 A、B区各遺構出土土器実測図12



第88図 05-1115SK平面・断面図

第2節 B、C区の遺構と遺物

B、C区は府道美原泉大津線の北側から調査地を東西に通る里道まで南北の長さ約170mを測る。掘削土置き場の関係で2004年(平成16年)度に府道から130mの調査を行い、残りの40m区間は2005年(平成17年)度にA区と一緒に調査を実施しB区とした。幅は32mである。

この地区は、おもに耕作地や耕作地を盛土して個人住宅として利用されていたので遺構の保存 状態は比較的良好であった。しかし、調査前に隣接する府営北余部住宅建替え工事の車両進入路 として利用された際に、工事業者が無断で土壌改良を行っており、北部に遺構面が攪乱を受けて いるところがあった。

調査区は周辺耕作地に給水する農業用水路によって3区に分断されており、X = -161924m付近の東西水路を境に南側をC南区、北側をC北区、Y = -41822m付近の南北水路の東をC東区として記述する。

また、美原泉大津線との交差点となるラッパ口部分は、個人住宅への進入路があり、三角形状の小調査区を設定した。この場所には大型看板が建てられており、その基礎工事で一部攪乱されていた。検出した遺構はL字形に曲がる耕作溝のみであった(付図2、3、5参照)。

層序

調査前は耕作地や個人住宅として利用されていたので、一部の攪乱を除くと遺物包含層、遺構ともに良好な状態で保存されていた。

現耕土の下は、灰白色の床土が5cm前後、薄く帯状に沈澱する黄褐色物質によって2~3層に分離できる黄灰色土(30~50cm)、中世の遺物包含層である褐灰色土(20cm前後)、地山の黄橙色粘質土となっている。

地山面は北に緩やかに傾斜しており、南端の府道美原泉大津線沿いでT.P.43.5m、約70m北の 里道際ではT.P.43.0m前後を測る。

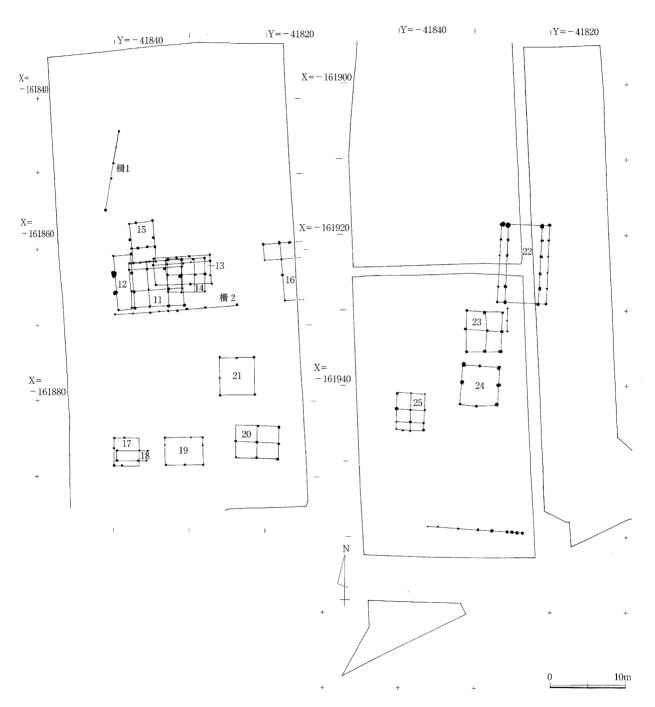
遺構

この地区で検出した遺構としては溝で区画された屋敷地、建物跡、井戸、採土坑とみられる不 定形土坑、府道工事の際に確認された「余部城」の西堀と北堀などがある。

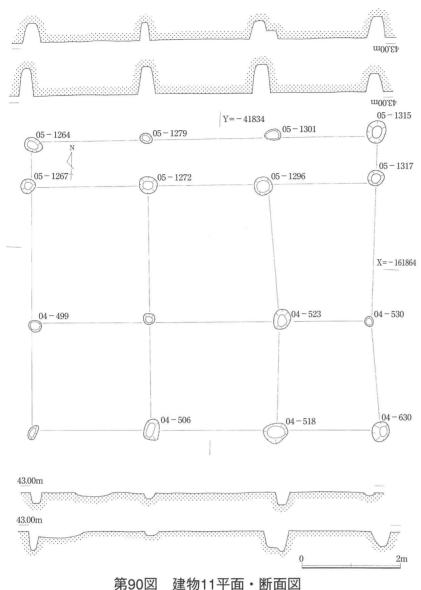
屋敷地1

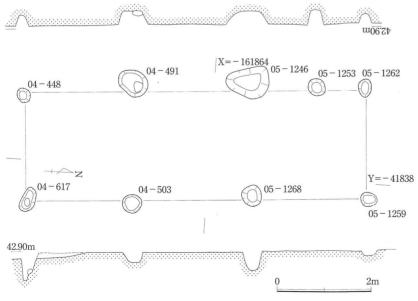
屋敷地1の南北は、A区南端の里道の下、X = -161830m付近を通る溝05 -1113SDとC区の X = -161870m付近を東西に走る04 - 500SD、東西はY = -41846m付近を南北に走る05 - 1200SDを西端とし、東端は調査区外にあり、南北約40m、東西30m以上の広さを持つ。屋敷地内は府営住宅工事の際に仮設道路として使用された際にL字形に幅約10mが攪乱されていた。

屋敷地1内では南側を中心に6棟の建物と2条の柵列を復元した。



第89図 B、C区 建物位置図





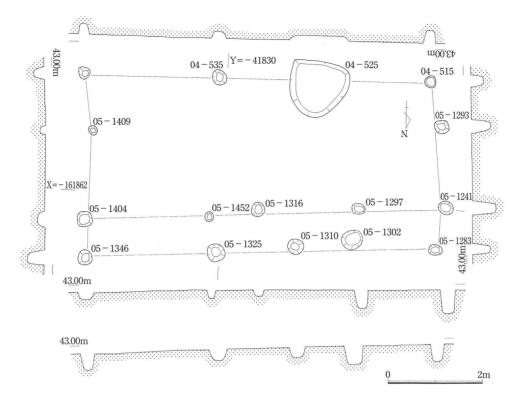
第91図 建物12平面・断面図

建物11 (第90図) 04-500SDの約1 m北側で復元した3間×2間の総柱建物で、北側に庇を造る。

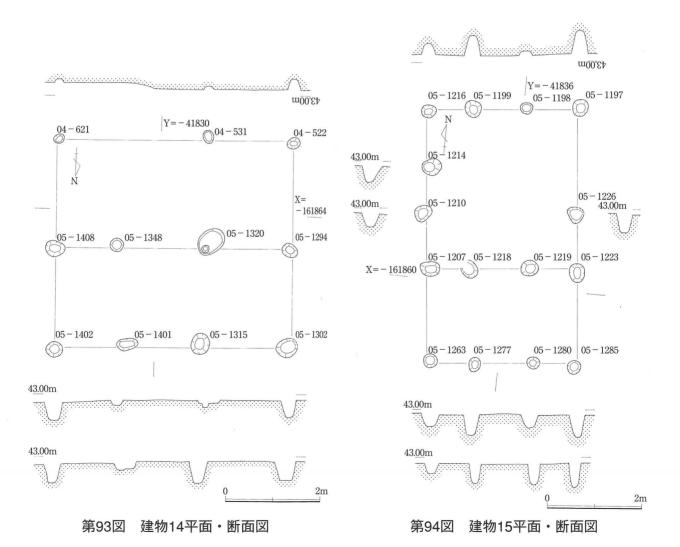
建物の規模は7.1m×5.1mで、面積は36.2㎡を測る。庇の幅は1.0mを測る。桁行の柱間隔は2.2m~2.3mであるが、梁行は2.2m、2.9mを測り、北側の柱間隔が開いている。柱穴は円形や楕円形で長径0.2~0.5m、深さは0.2~0.6mを測るが、04年度調査のピットが浅いので、底まで掘りきれなかったのかもしれない。

建物12 (第91図) 建物 6 の西側で復元した 3 間×1 間の南北建物で、規模は7.2 m×2.3mを測る。桁側の柱間寸法は約2.4mで、北端には柱間に副柱が組込まれている。柱穴は円形や楕円形で、長径0.3~0.5 mを測るが、05-1244、04-491の掘方が大きく、抜柱後土坑が掘られた可能性もある。

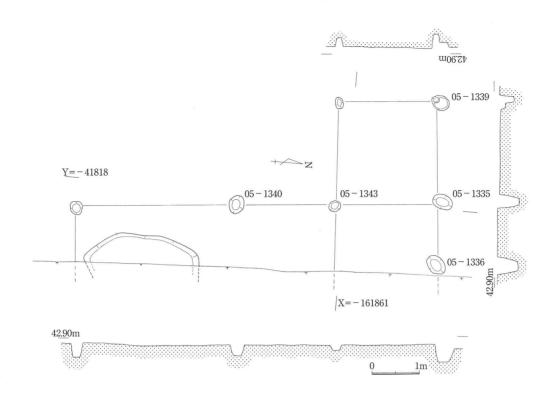
建物13(第92図) 04-500SDの北側で復元した南側が建物11と重なる建物である。北側に庇を持つ3間×2間の東西建物である。母屋の規模は規模は7.7m×3.1mで、庇の幅は1.0mを測る。柱間隔は不揃いで、北桁は西から



第92図 建物13平面·断面図



- 68 -

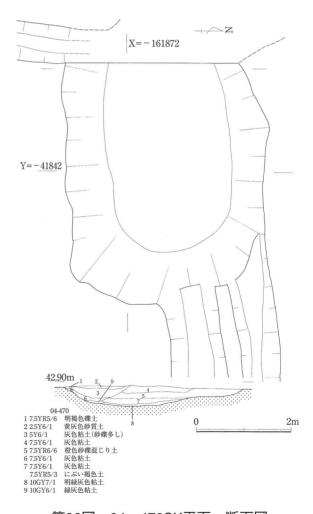


第95図 建物16平面・断面図

1.8m、2.1m、1.0m、2.8m、梁行の間隔は1.1m、2.0m、庇の柱間隔は2.5m、2.5m、2.1mを測る。桁、庇共に東側の柱間隔が開いており、柱穴を見つけられなかったのかもしれない。土坑が重なった04-525SKの底面では柱穴を確認できなかった。柱穴は円形や楕円形を呈し、長径0.3~0.6m、深さは0.2~0.4mを測る。

建物14 (第93図) 04-550SKの北側で復元 した東西に長軸を持つ3間×2間の総柱建物で ある。建物の規模は5.0m×4.3mで、面積は 21.5㎡を測る。桁行寸法は1.5m、1.5m、2.0m、 梁行は2.0m、2.3mを測り、梁行北側の柱間隔 が開いている。柱穴は歪な楕円形で、長径0.25 ~0.45m、深さは0.1~0.5mを測る。

建物15 (第94図) 桁行 4 間、梁行3間の建物で、規模は5.2m×3.2mを測る。桁側の柱間隔は桁行が1.0m~1.3m、梁行は0.9m~1.4mで、柱間隔の狭い建物である。柱穴は円形を呈する

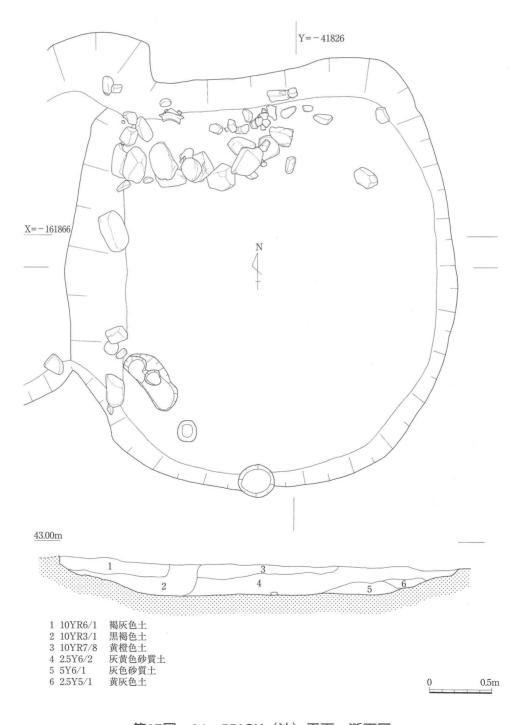


第96図 04-470SK平面・断面図

ものが多く、直径は0.3~0.5mを測る。建物内の南側が広く開いていて束柱が復元できるので、 南の幅2.1m間が三和土、北側に床を造る建物と考えられる。

建物16(第95図) 屋敷地東端で復元した南北3間、東西2間以上の建物で、西北側に副屋がつく。母屋の規模は7.8m×1.4m以上を測る。母屋は南側に建物内土坑があるため、柱間隔はまちまちで、北から2.3m、2.1m、3.4mを測る。副屋は2.1×2.2mを測る。作業棟であろうか。

柵 1 (第89図) 屋敷地内の建物群北西部、Y = -41840m付近で復元した長さ 11m以上の柵列で、方向は $N-10^{\circ}-E$ を示す。杭の間隔は、2.0m ~ 4.3 mを測る。



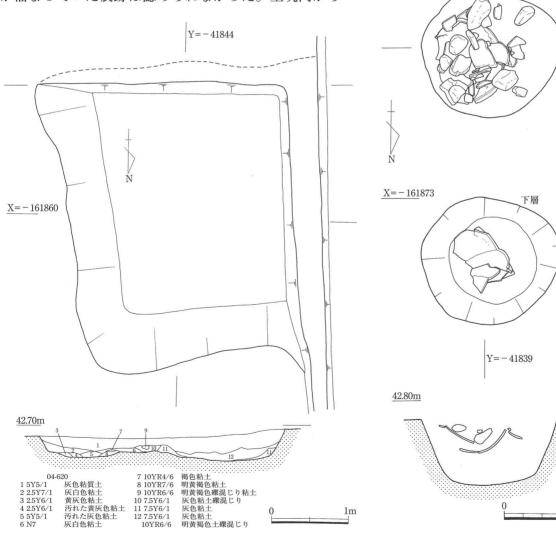
第97図 04-550SK(池)平面·断面図

柵 2 (第89図) 屋敷地の区画溝04-500SDに沿って復元した柵列である。区画溝西端の池 (470SK) の北側から、04-628SPまでの12mは柱間隔が2.2m~2.5mでほぼ揃っている。土坑 550SKの東側は地山が削平されており、柱跡を検出できなかった所もあるが、04-728SPと建物 16と重なるが、04-727SPを柵の続きとすると全長は23m以上になる。

04-470SK(第96図) 屋敷地区画溝の西端に造られた歪な方形池で、南北3.7m、西側は調査区外であるが、溝04-575SDとの関係から東西は5.5m前後になる。深さは約0.4mで、掘方はなだらかに傾斜する。埋土は地山直上に地山から流れ込んだ明緑灰色粘土、その上は灰色粘土、砂礫を多く含む灰色系粘土が堆積する。埋土から第111図に示す土器や掲載しなかったが多数の瓦片が出土している。

04-550SK (第97図) 屋敷地内の建物11の東側で検出した大型土坑で、区画溝04-500SD に接して掘られている。規模は東西5.0m、南北は3.05

mを測る。図化したのは東部の石組が見られたところである。埋土は褐灰色土、灰黄色土、灰色土等で、水が溜まっていた痕跡は認められなかった。土坑内から



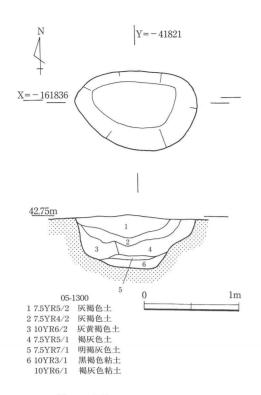
第98図 04-620SK平面・断面図

第99図 04-475SK平面·断面図

0.5m

Y = -41839

X = -161873

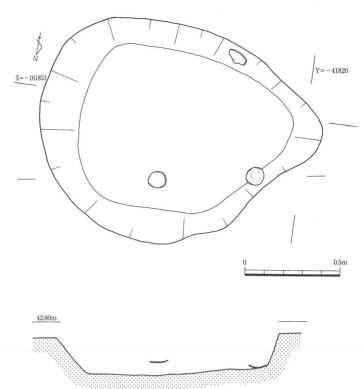


第100図 05-1300SK 平面・断面図

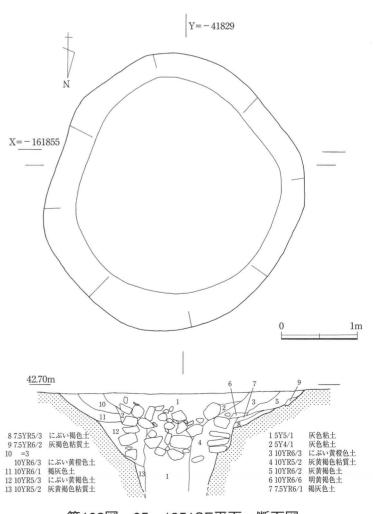
瓦片や第113図に示す土器が出土している。底が比較的平坦なことから、作業場かもしれない。

04-620SK(第98図)や敷地西端で検出した池と見られる土坑である。 土層観察断面の設定ミスで東と西の輪郭を図示できなかったが、南北3.7m、東西3.5m以上の方形土坑で、深さは0.3mであった。西側は調査区外に広がるが、04-575SDが05-1200SDに繋がる区画溝になるので、この溝の水を溜めるような池と考えられる。埋土は下層に灰色粘土、上層は灰色粘質土であった。地山は硬い礫層で、西側は一段高くなっている。第112図に示す遺物が出土している。

04-475SK (第99図) 屋敷地内 堀南西部にある池の東側で検出した土



第101図 05-1332SK平面·断面図



第102図 05-1351SE平面·断面図

坑で、円形に近い形状で、長径0.75m、短径0.7mを測る。掘方は逆台形で、深さは約0.35mを測る。内部に底を欠いた羽釜を割って埋置し、その後に長径20cm程度までの角礫や川原石、瓦器の塊や皿片、土師器片が纏まって投入されていた。羽釜は接合すると胴部はほぼ完周する程度に残っていた。

05-1300SK(第100図) B区北東端近くで検出した。南は府営住宅工事の際に約20cm地山が削られているが、現況は楕円形で長径1.3m、短径0.9m深さ0.5mを測る。埋土は褐灰色粘土、灰褐色粘土で、瓦器境や土師器皿が出土している。

05-1332SK(第101図) 屋敷地の東部で検出した土坑である。上面は府営住宅工事の進入 路建設時に削平されており、下層だけが残っていた。現況は1.5m×1.2mを測る歪な楕円形で、 深さは0.2mであった。地山が残っている調査区東端からは約0.4mの深さを測る。埋土は主に黄 灰色土や褐灰色土で、坑内から瓦器の埦片と小皿が2枚出土している。

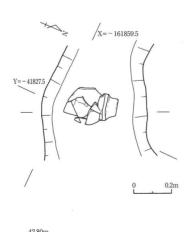
05-1351SE(第102図) 屋敷地建物群の北側で検出した素掘りの井戸である。平面は円形で直径約3.6mを測る。掘方は地表から1mまでは緩やかに傾斜し、その下は直径1m程度の円形で垂直に近い掘方を示す。下層は灰色粘土で、地表から1.5m前後までは人頭大程度までの川原石や礫石、瓦片や、須恵器片がびっしり詰まり、礫の重なった隙間を灰色粘土が充填しているような状況であった。

05-1328SD (付図 2 第103、104図)

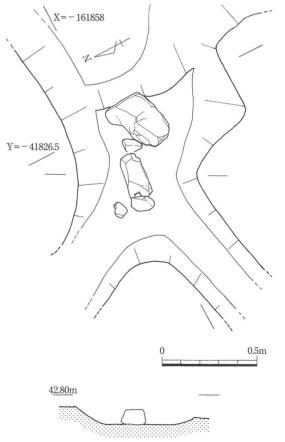
屋敷地東部で検出した溝である。南はC区のX = -161865m、Y = -41825m付近から北に延び、X = -161859m、Y = -41825m付近でほぼ直角に東北東に曲がり調査区外に延びている。コーナー部分には踏み石が置かれていた。

溝は幅0.7~0.8m、深さは0.2m前後を測る。 溝の東側では柱穴が極端に減ることから、家屋と庭や畠地などを区画するために掘られた溝と考えられる。

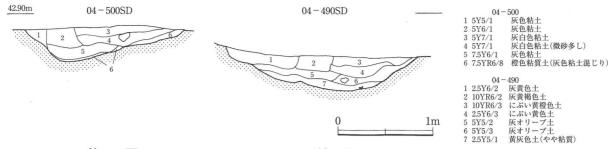
04-490、500SD (付図2 第105図) 屋敷地1の南区画溝 で、二重の溝となって いる。屋敷地の南側は



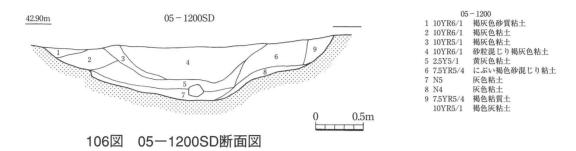
第103図 05-1328SD 土器出土状態平面・断面図



第104図 05-1328踏み石部平面・断面図



第105図 04-490SD、04-500SD断面図



10cm~20cm低くなっており、地山が礫混じり土から粘質土に変わるが、04-490、500は傾斜変換点に掘られている。西区画溝西側も地山がやや高くなっており、470SDの南側は表土を薄く削平したのかもしれない。05-490SDは幅1.2m、掘削断面は浅いU字形を呈し、深さは0.2m~0.3mを測る。埋土は上層に灰黄色土、下層に灰オリーブ粘質土が堆積する。埋土から瓦や瓦器、土師器が出土している。500SDは幅がやや狭く0.7m~

0.9 m、深 Y = -41832さは0.2m N 前後を測 る。埋土は 主にマンガ X = -161864ンを多く含 む灰色粘土 で、瓦器や 42.90m 土師器皿、 瓦片が出土 している。 第107図 04-525SK平面·断面図

Y = -41824 Y = -41825 Y = -41826 0 = 0.5m

X = -161871

X = -161870

第108図 04-725SD平面図

05-1200SD(付図 2 第106図) 04-470、04-620SK(池)を介して04-675SDから北に 延びる屋敷地西端の区画溝である。北は攪乱のため途切れているが、B区北端まで続いており、 条里溝05-1113SDに繋がると考えている。この溝からは土師器皿や瓦器埦が出土している。

04-725SD(付図2 第108図) 屋敷地区画溝490SDを南に広げた溝で、490SDとは石列で 区画している。最大幅1.3m、長さは約4mで浅くなって途切れている。

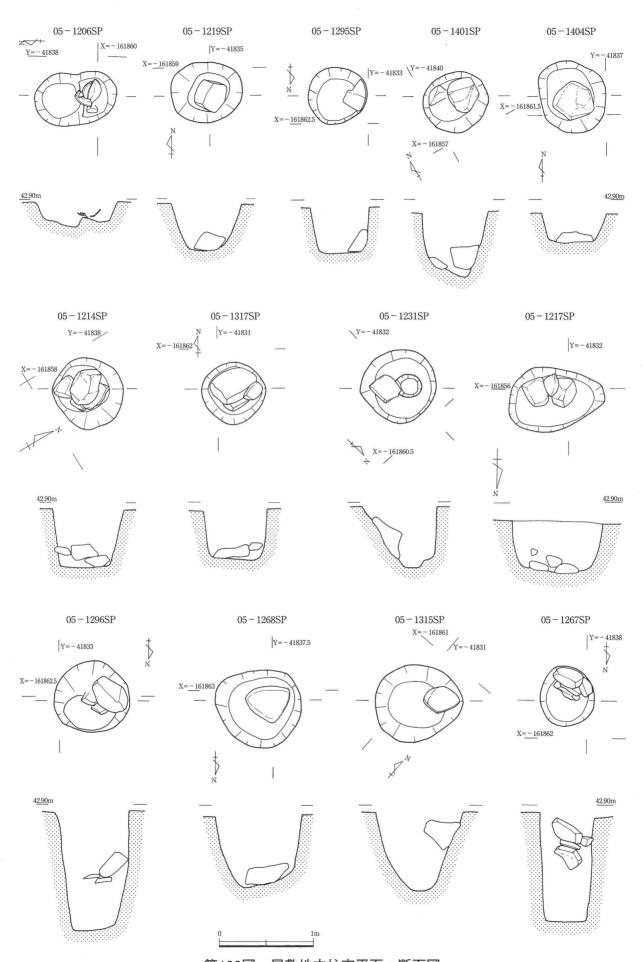
04-675SD(付図2) 屋敷地西端を区切る区画溝である。溝の西側は東側より地山が約10 cm高くなっており、中世条里施行時に地形を改変したことも考えられる。溝の幅は0.3~0.4m、掘削断面は「U」字形で、深さは0.1m前後を測る。埋土は黄灰色粘質土1層であった。

05-525SK (第107図) 屋敷地の建物群内で検出した隅丸三角形の土坑で規模は1.25m×1.2 m、深さは約0.1mを測る。埋土は主に褐灰色土である。瓦器や土師器の小破片が出土した。

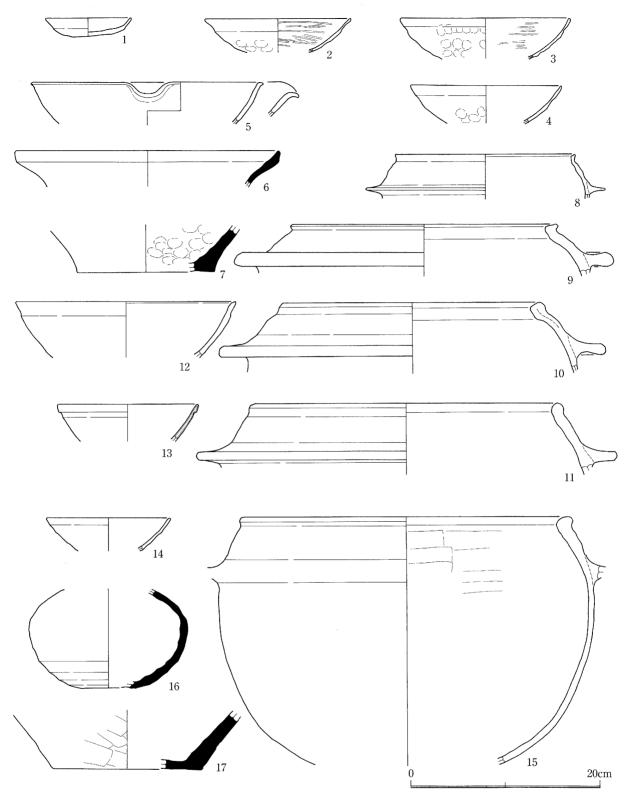
屋敷地内の柱穴(第109図) 屋敷地 1 からは建物を復元できたものを含め多数の柱穴を検出した。礎盤を置くものや、柱を固定するため川原石を嵌めたと見られるものがある。特に04-500SDの北側は同じ位置で数度の建て替えが行われたため、柱痕や礎盤が残っているものの建物を復元できなかった柱穴が多い。深さが0.4~0.5mの柱穴では、立てた柱を支持するためか壁面に川原石を嵌めたものもある。

04-470SK出土土器(第111図)) 屋敷地1の南端の池と、490SD、500SDから出土した遺物も含んでいる。1~8は瓦器塊。高台が退化して細い粘土紐を貼り付けた程度になり、法量の小型化が進んだ時期のもの。内面は圏線状のミガキで調整する。9は瓦質の鉢。内面はハケ目ののちナデで仕上げる。口径18.4cm。10、11は青磁碗で、10は玉縁状の口縁端部をつくる。12、13は土釜。12は小型で口径16.8cm。

04-620SK出土土器(第112図) 1 は瓦器小皿。 2 、 3 は瓦器城で、法量の小型化が進んだ時期のもの。 4 は土師器で、城の脚台か。 5 は白磁で合子の蓋。 6 、 7 は瓦質の羽釜。 8 、 9 は土釜で、 9 は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、わずかに内鸞する口縁端部を外反させる。



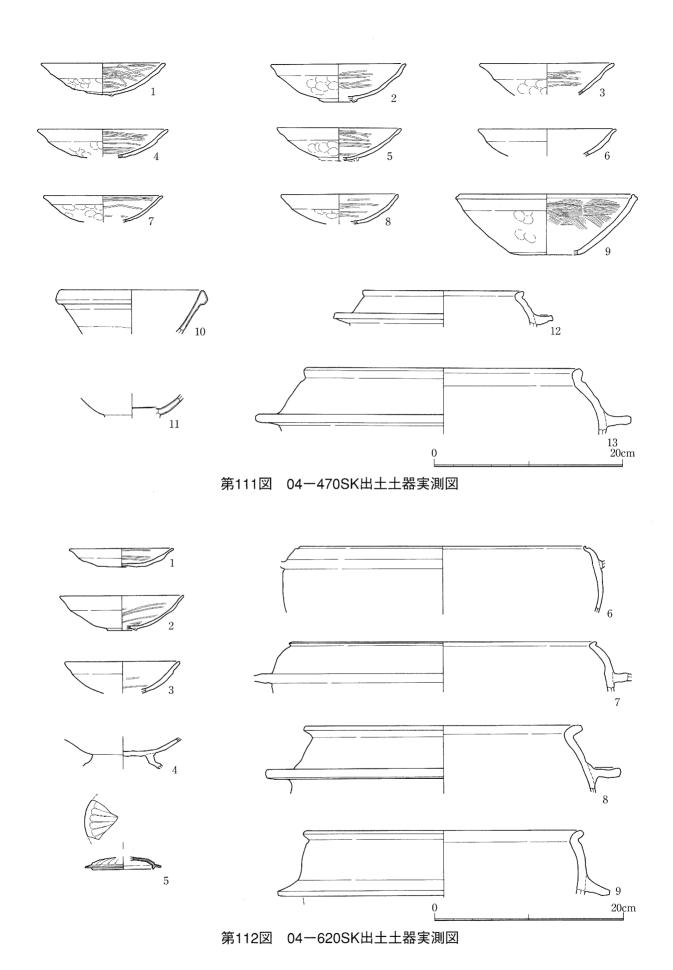
第109図 屋敷地内柱穴平面・断面図



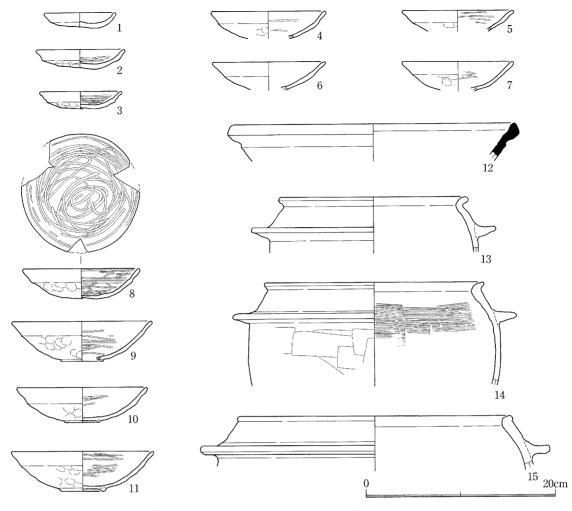
1~13 (1200) 14 15 (1328) 16 (1157) 17 (1195)

第110回 屋敷地内溝他出土土器実測図

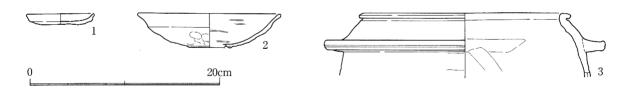
05-550SK出土土器(第113図) 1 は土師器小皿、2、3 は瓦器小皿で見込みは暗文、口縁部内面は平行線のミガキである。 2 は口径9.5cm。 4~11は瓦器塊で、高台の退化が著しい時期のもの。口縁部外面は 2 段のヨコナデ、内面は圏線状のミガキで仕上げる。 8、9 は見込みに渦巻き状の暗文を巡らせる。12は須恵質の鉢、13、15は土釜、14は瓦質の羽釜で、頸部内面は横ハ



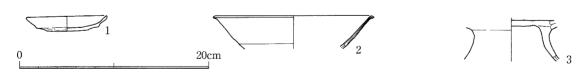
- 78 -



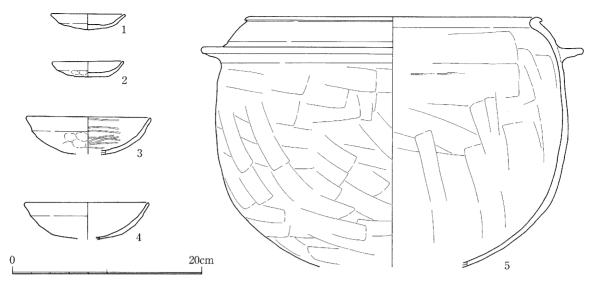
第113図 04-550SK出土土器実測図



第114図 04-589SP出土土器実測図



第115図 04-727SP出土土器実測図



第116図 04-475SP出土土器実測図

ケ、体部内面は板ナデである。

04-589SP (05-1332) (付図 第114図) 出土土器 04-525SPの北約2mで検出したピットである。

1は土師器小皿。2は瓦器埦で高台が退化し、器高も低くなる時期のもの。3は土釜で、口縁端部を小さく外反させる。

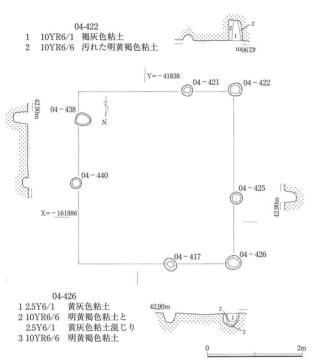
04-727SK (付図 第115図) 屋敷地東端近くで検出したピットである。

1は土師器小皿。2は白磁碗で口縁端部を僅かに外反させる。3は土師器皿の脚台である。

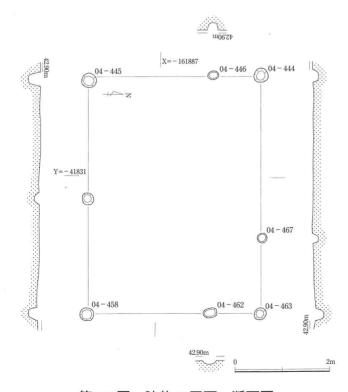
04-475SK出土土器(第99、116図) 1、 2 は土師器小皿で、底面に指頭痕が残る。 3、 4 は 瓦器塊で、外面は指オサエ、内面は粗い圏線状のミガキである。 5 は土釜で、体部内面は板ナデ、 外面はヘラケズリ。口頸部は大きく内彎し、口縁端部をわずかに肥厚させて丸める。

屋敷地2

B地区中央、南はX = -161892m付近で検出した溝04-350SD、北をX = -161870m付近で検出した04-490SD、西を04-675SDとする南北23m、東西30m以上の広さを持つ屋敷地である。 屋敷地1は地山が砂質土で、屋敷地2より約20cm高いが、屋敷地2は地山が粘質土で水捌けが悪い。屋敷地2内で検出した柱穴数は多かったが復元できた建物は5棟分であった。



第117 図 建物17平面・断面図

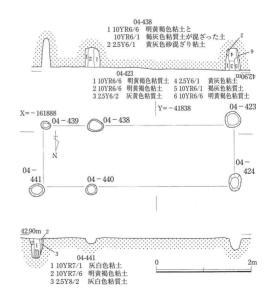


第118図 建物19平面・断面図

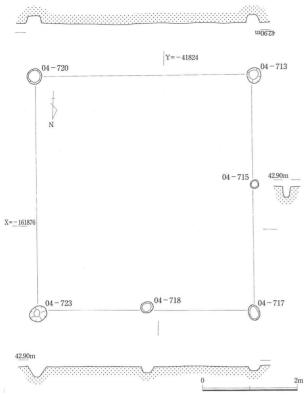
建物17 (第117図) 04-350SDの北側で 復元した2間四方になると考えられる建物である。柱間隔が不揃いで南東と北東隅の柱穴も検出できなかったが、規模は南北3.8m、東西3.0mを測る。柱間隔は桁側が1.5m、2.3m、梁行きが1.3m、1.7mを測る。柱穴は円形で直径0.3~0.5m深さ、0.15~0.45mを測る。

建物18(第119図) 建物1と重なって 復元した2間×1間の東西建物で、規模は 4.2m×1.4mを測る。柱間寸法は2.8m、1.4 mと西側の柱間隔が広いので、本来3間の 建物かもしれない。柱穴を柱穴は円形や楕 円形で直径0.2~0.5mを測る。

建物19 (第118図) 建物17の東側で検 出した 2 間×1 間の東西建物で、北側に 庇がつく。規模は5.0 m×2.5 mで、柱間



第119図 建物18平面・断面図



第120図 建物20平面·断面図

04-683 1 2.5Y7/1 灰白色土 2 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質土 04-697 1 2.5Y7/2 B 灰黄色土 マンガン粒混 明黄褐色土と 2 10YR6/6 2.5Y7/2 3 2.5Y7/1 灰黄色土混 灰白色土 m06'71 04 - 68304 - 69704 - 68704 - 68842.90m 04-670 42.90m X = -1618504-687 04-687
1 2578-71
灰白色土(砂質土)
天白色土(砂質土)
2 10787-8
黄橙色土
3 10788-71
灰白色微砂 69
4 10786-71
褐灰色微砂 月 42.90m Y=-41820 04 - 69104 - 69404-694 褐灰色土 褐灰色土と 明黄褐色粘土混ざった層 1 10YR6/1 2 10YR6/1 42.90m 10YR6/6

第121図 建物21平面・断面図

寸法は2.5mを測り、柱間隔の広い建物である。庇は幅1mで、中間の柱位置は身屋と対応しない。柱穴は円形や楕円形で長径約0.3mを測る。

建物20 (第120図) 04-450SKの東側で 復元した 2 間四方の南北建物で規模は5.0 m×4.7mを測る。東側と南側の中間柱を検 出できなかったが、柱間隔は西桁行きが2.7 m、2.3m、北梁行が2.3m、2.4mを測る。柱 穴は円形や楕円形で長径0.25~0.4mを測る。 建物東側に柱穴が観察されるので、東に庇が つくかもしれない。

建物21 (第121図) 04-350SDに繋がる 余部城北堀 (04-685SD) の北側で復元した 2 間四方の総柱建物で、規模は東西5.4m、

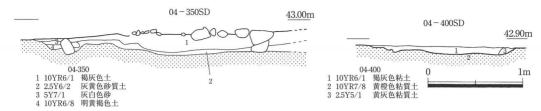
> 南北4.3mを測る。北西隅の 柱を検出することができな かったが、柱間寸法は桁側が 2.7m、梁側は西梁が2m、東 は2.3m、2mを測る。柱穴は 円形で、直径0.25~0.4mを測 る。

溝、土坑

屋敷地2内では屋敷地1で 取り上げた04-475SKを含め 多数の井戸や土坑を検出し た。

04-350SD (付図2 第 122図) 屋敷地2の南を画す る溝である。南端には幅0.3

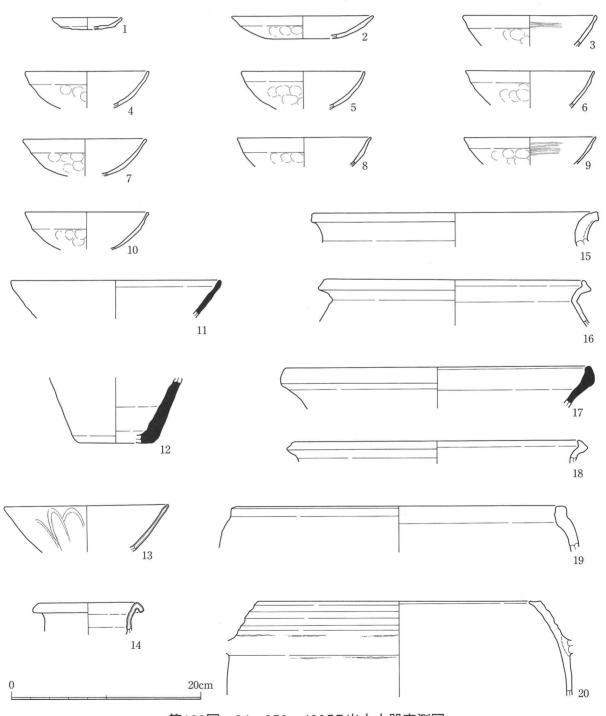
m、0.4m、深さ0.15mを測る細い溝(350-1 SD 3 , 4 層部分)があり、その北側は幅約 3 mに渡って浅く掘削されている。深さは $0.05\sim0.15$ m程度で、埋土は上層が褐灰色土、下層は灰黄色砂質土であった。この溝の北側は幅 $4\sim6$ mに渡って全体に0.1m程度低くなっており(04-600SD)、北端には幅1.1m ~1.5 mの溝(04-400SD)が検出されたことから、全体に土砂を鋤



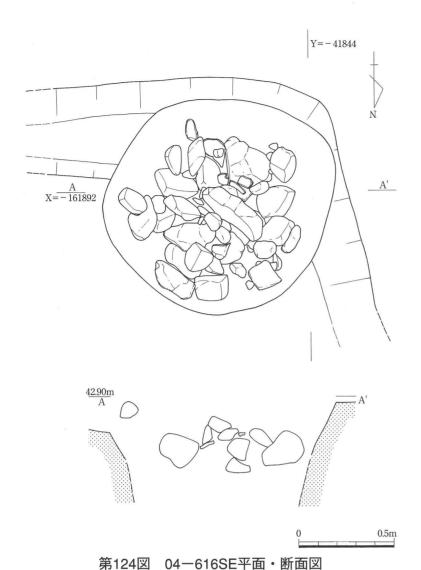
第122図 04-350SD、04-400SD断面図

取ったと考えている。この粘質土を除去したところで柱穴を検出した。04-350SDは余部城北外 堀と同位置にあり、溝や城はこの地域の中世条里に規制されていたと考えられる。

04-400SD (付図 2 第122図) は幅1.1m~1.5m、深さ0.1~0.15mを測る。埋土は褐灰色粘土 1



第123図 04-350、400SD出土土器実測図



層であった。西端の04-675SDとは繋がらず、Y=-41828m付近で浅くなって消滅する。

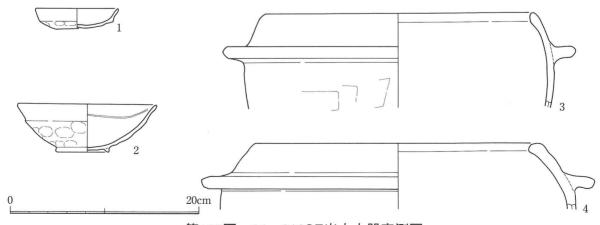
04-350、400SD出土土器 1は土師器小皿。 (第123図) 2は丸底の土師器皿である。3 ~10は瓦器城で、器壁が内外 面とも摩耗しているが、3、9 は内面に疎なヘラミガキが残 る。11は須恵器の埦である。 12は須恵器で壺の底部。13は 青磁碗で蓮弁文をつける。14 は白磁で、壺の口縁部。15は 瓦質で甕の口縁部、13世紀末 頃のもの。16は土師器の口縁 部で羽釜か甕。17は東播系の 鉢。19、20は土釜。20は口縁 部に段を付ける

04-616SE (第124図) 04-350SDの南西端で検出し

た井戸である。04-350 S D小溝と重なっており、この井戸の方が新しい。平面形は歪な円形で 長径1.2m、短径1.15mを測る。井戸は小児の頭大くらいまでの角礫や瓦片を地表面まで投入して 埋めており、礫石の隙間に灰白色粘土が充填している様な状態であった。礫層が不安定で崩落の

危険があり、約0.5mまでしか掘削できなかった。

04-616SE出土土器 (第125図) 1は瓦器小皿で、口縁部はヨコナデである。 2は瓦器城で、



第125図 04-616SE出土土器実測図

外面のミガキは施されず、内面に疎なミガキが残る。3、4は土釜。短い鍔から、内傾して立ち 上がる口縁端部を丸く収める。3は口径28.2cm。

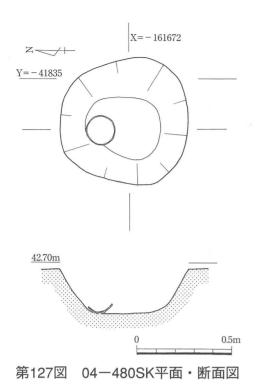
04-727SK(第126図) 04-600SD内で検出した石敷きの遺構である。形状は東西1.8m、南北1.2mの方形で、溝を5cm程度埋めて高くし、南側に20~30cm程度の礫石を10個程並べ、その北側に拳大程度までの川原石や礫石を2,3段積み重ねて敷き詰められた遺構である。礫に混ざって瓦器や土師器皿、高台、白磁碗片が出土したが遺物は少ない。検出時は井戸を埋めた礫と考えていたが、断面で確かめたところ、下層に土砂を積んで高くした上に礫石を敷き詰めている。用途を推定できない遺構である。

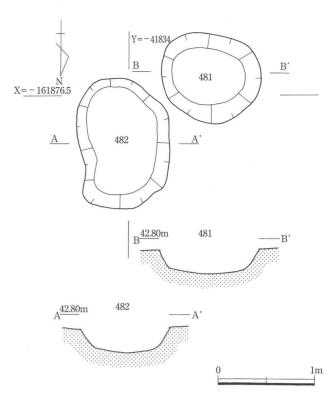


04-480SK(第 127図) 屋敷地区 画溝の南約1mの所 で検出した0.65m× 0.65mを測る丸い台 形状の小土坑であ る。深さは0.25mで 底面に接してほぼ完 形の瓦器埦が出土し ている。

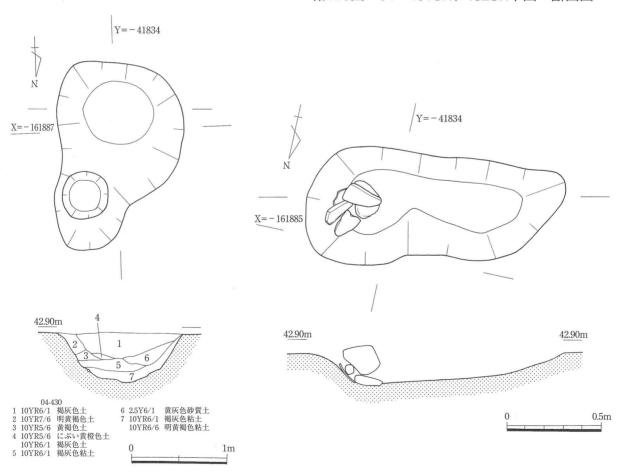
04-481SK(第 128図) 屋敷地区 画溝、04-490SDの 南側約5mの所で検 出した楕円形の土坑 で、長径1.05m、短 径0.9m、深さは0.25 mを測る。埋土は褐 灰色粘土で実測でき る遺物は出土してい ない。

04-482SK(第128図)04-481SKの北東で検出した楕円形の土坑で、長径1.4m、短





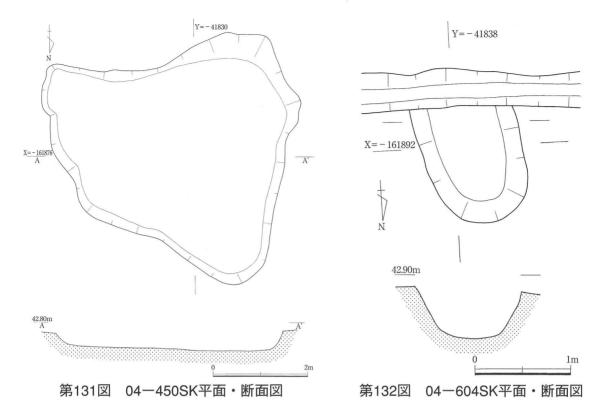
第128図 04-481SK、482SK平面・断面図



第129図 04-430SK平面·断面図

第130図 04-442SK平面·断面図

径0.9m、深さは0.3mを測る。埋土は褐灰色粘土で、実測できる遺物は出土していない。 04-430SK(第129図) 04-400SDの南側で検出した瓢箪型の土坑で、長径2.0m、短径1.4m、



深さ0.55mを測る。埋土は下層に褐灰色粘土と地山の明黄褐色粘土が混ざった土や褐灰色粘土、 上層が褐灰色土で、全体がほぼ埋没した後に再掘削したと考えられる。

屋敷地南溝の北約6m、建物群の東側にある東西に長い歪な楕円形 04-442SK (第130図) 土坑である。長径1.35m、短径0.6m、深さは東端で0.15mを測る。東端に長径20cmの角礫と板状 の石や東播系の鉢の破片が重ねて置かれていた。

04-450SK (第131図) 屋敷地南溝の北側で検出した歪な大 型土坑である。形状は西が広い台形状で、底辺は5.3m、上辺3.2 Y = -41836.5X = -16189142.90m 42.90m 04-607 1 5Y6/1 灰色粘土 2 10YR7/1 灰白色土 10YR6/6 2.5Y5/2 明黄褐色粘質土 暗灰黄色土 25Y6/4 第133図 04-607SK 第134図 04-612SK

平面・断面図

m、東西約5m、深さは西 に深く約0.18mを測る。埋 土は灰白色粘土で、土砂を 薄く削り取った後に滞水 し、粘土が堆積したような 遺構である。

04-604SK (第132図)

屋敷地南溝内で検出した楕 円形を呈する土坑で、南北 1.2m以上、東西1m、深さ 0.5m 0.4mを測る。南端の04-350SDより古い。

平面・断面図

04-607SK (第133図) 04-350SD内の西隅で検出した楕円形の土坑である。大きさは長径 0.6m、短径0.5m、深さ約0.5mを測る。埋土は主に灰色粘土で、ほぼ完形の瓦器塊と土師皿が出土している。

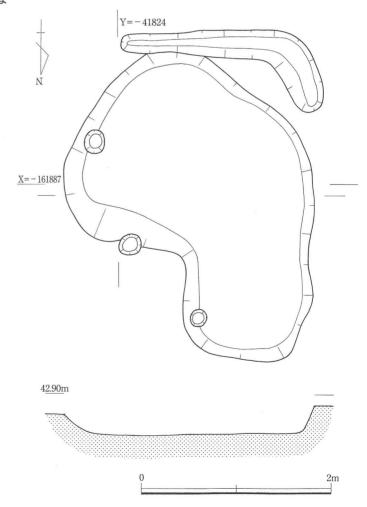
04-612SK (第134図) 04-350SD内で検出した楕円形の土坑で、長径0.7m、短径0.35m、深さ0.25mを測る。南東部に礫石が重ねて埋置されていた。

04-673SE(付図 2) 04-350SDの東端、溝が余部城北堀へと深くなる所で掘られていた長径1.8m、短径1.6mを測る井戸で、人頭大の川原石や礫石で充填されていた。礫石が不安定で断面図を作成することができず、検出面から0.5m程度までしか掘削することができなかった。礫石に混ざって古墳時代の須恵器や瓦器、中世須恵器が出土している。

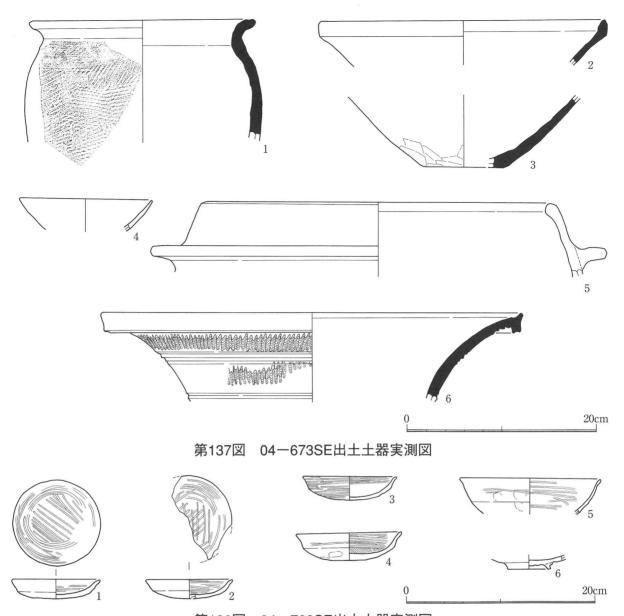
04-676SK (第136図) 屋敷地南溝の北側、建物13の西側で検出した地山を浅く削った土坑である。平面は歪なL字形で、東西2.6m、南北3.2m、深さ0.15mを測る。埋土は灰白色粘土であった。水溜まりに粘土が堆積して平坦化した遺構である。

04-700SE (第135図) C北区東端で検出した井戸状の遺構である。南北1.3m、東隅は調査区外に広がるが、東西1.5mを測る。断面が崩壊したため作図できなかったが、埋土は20~30cmまでの礫を含む礫を褐灰色粘土で、深さは

第135図 04-700SE平面·断面図



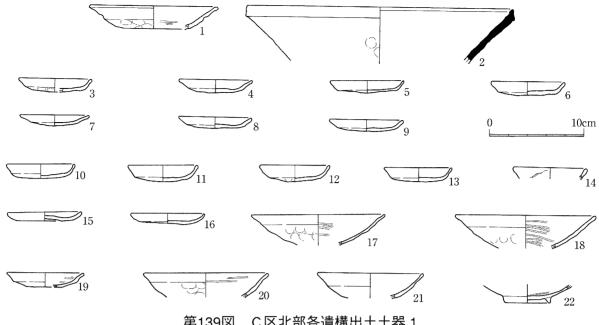
第136図 04-676SK平面·断面図



第138図 04-700SE出土土器実測図

04-673SE出土土器(第137図) 1は須恵器で小型の壺。体部は平行線のタタキ目が残る。 2、3は東播系の鉢。3は底部外面をヘラケズリで整える。4は瓦器塊で、器壁が摩耗している。 5は土釜の破片である。6は古墳時代前期の須恵器甕の口頚部で、口縁端部は垂下する面をつくり、口頚部に波状文を巡らせる。

04-700SE出土土器(第138図) $1\sim 4$ は瓦器小皿。 1 は底面外面にもヘラミガキを施す。 1 口縁部内面は横方向、内面の見込みにも丁寧なヘラミガキを施す。 1 は見込みに格子の暗文を描く。 1 は口縁部を内外面ともにていねいなヘラミガキ、 1 は外面に疎なヘラミガキ、 見込みは密な平行線の暗文、口縁部内面は密なヘラミガキで調整する。 1 は瓦器塊で、 1 は口縁部外面に疎なヘラミガキが残る。



第139回 C区北部各遺構出十十器 1

C区北部各遺構出十十器1 (第139図) 1は瓦器の深皿で、体部は直線的に開く。2は東播 系の鉢で口縁端部を摘んで仕上げる。04-427SK出土。

3~9は04-437SP出土。04-350SDと400SDに挟まれた建物群内にあるピットで、10枚分程 度の土師器小皿が出土した。地鎮遺構であろうか。実測できたのは7枚である。皿は底面に指頭 痕の残るものが多い。口縁部はヨコナデで仕上げる。口径は7.2cm~7.8cmに納まる。

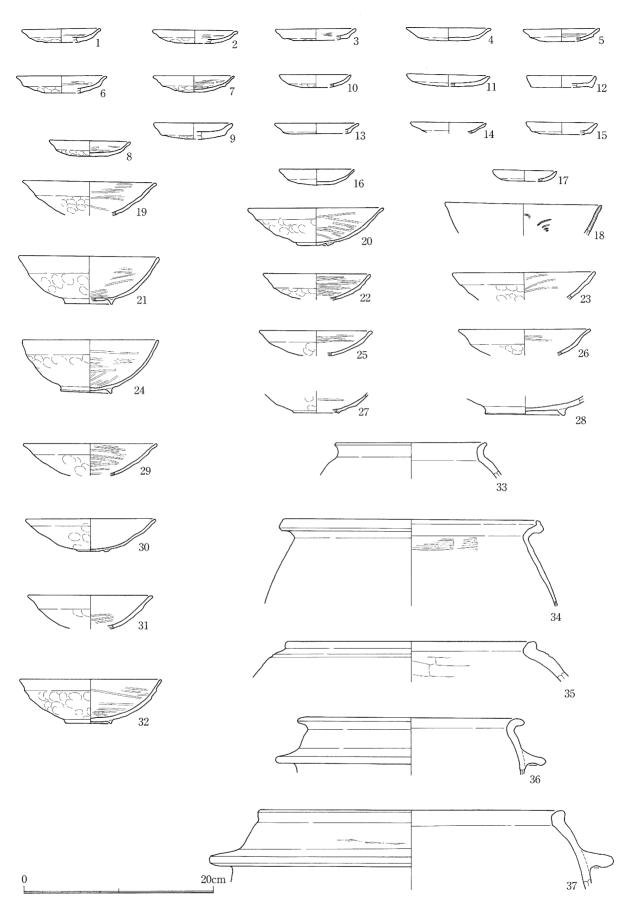
04-689SPは余部城北堀の北側にあるピットで、10~14が出土。10は瓦器小皿で内面はナデ調 整である。11~14は土師器小皿。口径7.0cm~7.8cm、器高1.5cm~1.8cmの範囲内にある。口縁部は ヨコナデ、底部はナデで調整する。15、16は土師器小皿。内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ で調整する。17、18は瓦器埦。直線的に開口縁部をつくり、内面は粗い圏線状のミガキである。 17は口径13.9cm。15~18は04-613SP出土。19は瓦器皿、20は瓦器 城で内面に僅かにヘラミガキ が残る。屋敷地2 東隅、04-732SEの肩部で検出したピット04-733SP出土。21、22は瓦器埦で 屋敷地2東部で検出した04-734SD出土。

C区各遺構出土土器 2 (第140図)

1~8は瓦器小皿。底面に指頭痕を残し、口縁部内面は細いヘラミガキで調整するものと、ナ デで仕上げる4がある。9~17は土師器小皿。底部は丸みを持つものが多いが、12は平底で器 壁も厚い。18は青磁碗の小破片である。

19~32は瓦器城。器高が低く、法量は小型化が進んだ時期のもの。器壁が摩耗し、調整の観 察が困難なものが多いが体部外面は指頭痕を残し、口縁部を1、2段のヨコナデで調整し、内面 は見込みに螺旋状か平行線の暗文、体部内面は疎な圏線状ミガキを施したものが殆どである。 24は外面が摩耗しているが、高台は逆台形で、見込みは平行線の暗文、内面は密な圏線状のミ ガキで整えている。口径14.4cm、器高5.6cm。20は口径14.2cm、器高4.0cm。

33~37は土釜で、口縁端部は外反させるものと、肥厚して終わるものがある。



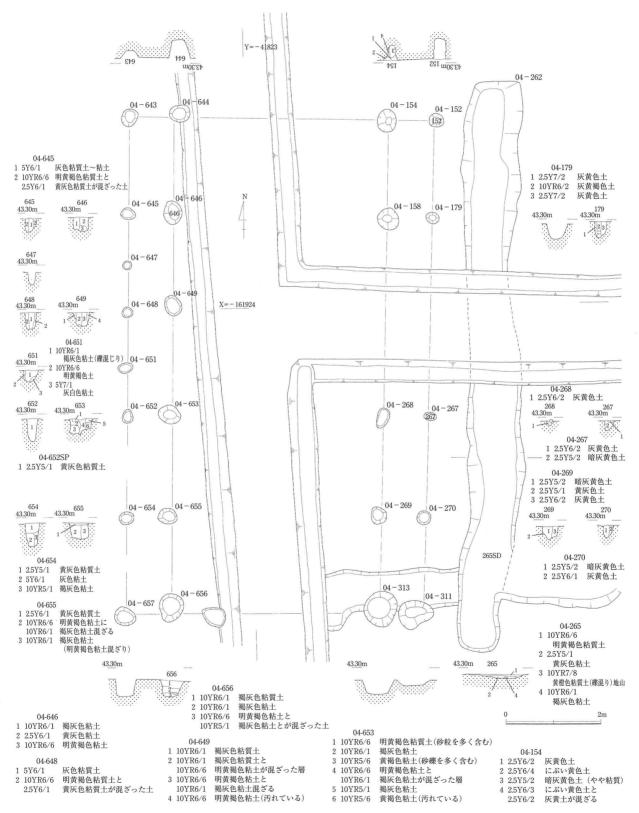
1 (578) 2 , 7 (730) 3 (561) 4 (569) 5 (578) 6 (527) 8 , 19 (599) 9 (572) 10 (568) 11 (569) 12 (578) 13 (526) 14 (475) 15 (587) 16 (607) 17, 18 (517) 20 (607) 21, 24 (626) 23, 26, 29 (492) 22 (414) 25 (491) 27 (419) 29, 30 (729) 31 (420) 32 (674) 33 (574) 34 (610) 35 (431) 36 (632) 37 (455)

第140図 C区各遺構出土土器 2

C区南部の遺構

C区の南部、X = −161890m~−161880mまで南北約90mの地域では区画溝を持たない建物 跡4棟と採土坑、余部城の西堀などの遺構を検出した。

建物22 (第141図) 堀の西側、X = -161925 m付近で復元した東西両側に庇を持つ南北建物である。中央に農業用水路があり、梁側の柱を確認できないが、 $5 間 \times 2 間の建物になり、規模$



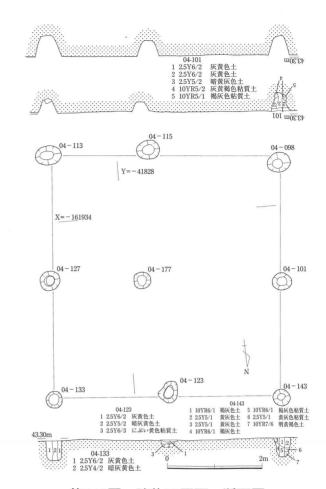
第141図 建物22平断面図

は10.4m×6.3mを測る。主屋の柱間隔は2.0 mで、中央だけが2.4mを測る。庇は幅半間 (0.8m) 幅で、主屋の柱間隔の幅が広い北から3間目と4間目の間に副柱がある。柱穴は北西隅を除いて円形で、直径0.4~0.8m、深さ0.3m前後を測る。庇の柱穴はやや小さく、直径0.3~0.4mを測る。建物の西側には建物と同じ長さの幅約1.2m、深さ0.1mの浅い溝がある。雨落ち溝と考えている。

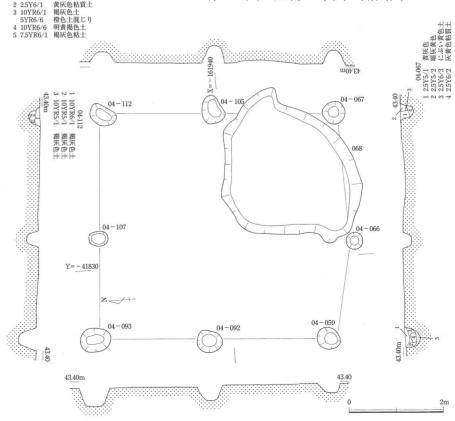
建物23(第142図) 建物22の南側で復元 した2間四方の建物で、中央東側に柱穴が あり、総柱の建物になると考えられる。規 模は南北4.9m、東西4.8mで、ほぼ方形であ る。柱間隔は2.0m~2.5mを測り、梁側の中 央柱が東にずれている。また、中央の柱も 西から2.9m、1.9mを測り、東側の柱間隔が 狭い構造となっている。

建物24(第143図) 建物23と棟続きとなる2間四方の南北建物である。規模は 5.0m×4.8mを測しる。 柱間寸法は、桁西別る。 柱間寸法は、桁西別る。 2.2m、2.6mを測る。 この建物内には両の建物内には大の4-068SKがある。土器や川原石だりは出土のある。 作業場と考えられる。

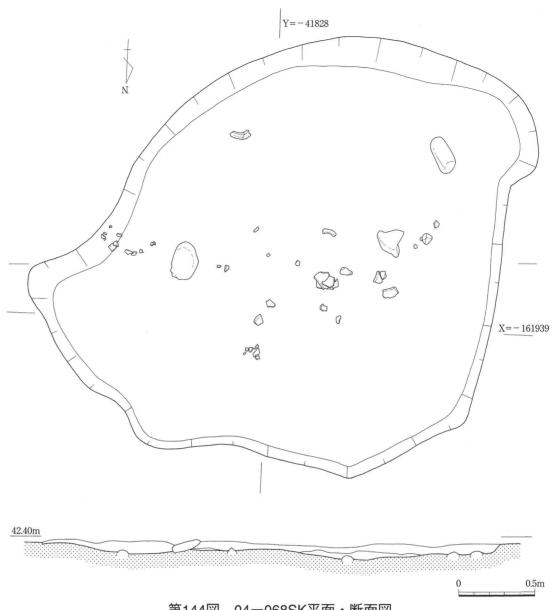
梁側の中間柱の位 置が異なる事から建



第142図 建物23平面・断面図



第143図 建物24平面・断面図

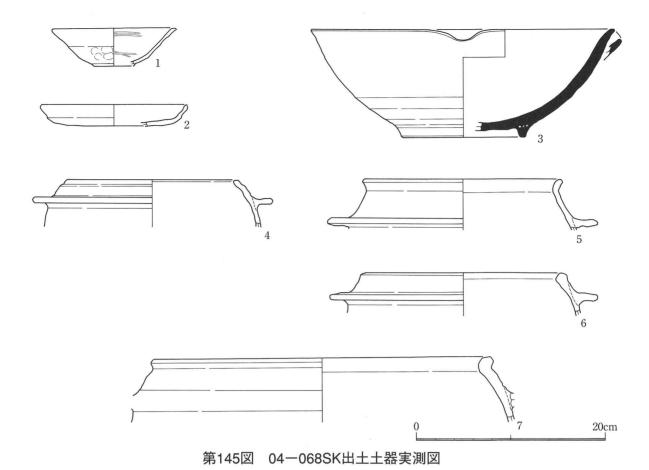


第144図 04-068SK平面・断面図

物23と別建物としたが、一つの建物の可能性もある。この場合、5 間×2 間で桁行は12mとなる。

04-068SK (第144図) 建物24内で検出した歪な土坑である。大きさは東西約3.1m、南北2.9 m、堀方は西側から北側は鋭角的であるが、南から東側は地山を浅く削り取ったような掘方であった。底面は比較的平坦で深さは0.1m前後を測る。内部から地山に接して人頭大程度の礫石が数個と土器が出土した。礫石に擦痕等の使用痕はなかったが、建物内の作業場と考えられる。

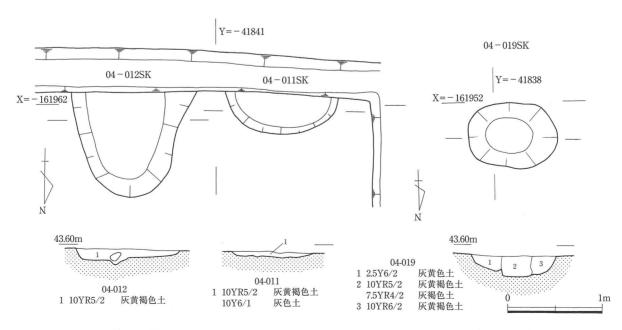
04-068SK出土土器(第145図)1は瓦器塊。口縁部外面は2段のヨコナデ、内面は粗いミガキで仕上げる。2は土師器の中皿で、口径15.5cm。3は須恵質の片口鉢で、口縁端部はナデで円く仕上げる。底部外面は回転ヘラケズリで、断面逆台形の高台がつく。緑灰白色を発する軟質土器である。4~7は土釜で、4は口縁部外面に段が付く。7は大型で口縁端部を僅かに外反させ丸く収める。復元口径35.4cm。



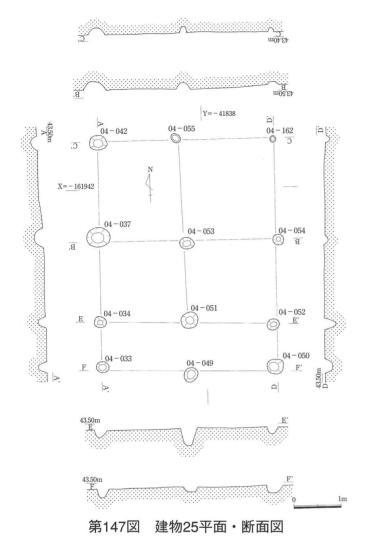
建物25 (第147図) C区の南西部で復元した桁行 2 間×梁行 2 間の総柱の南北建物で、南に庇を付ける。規模は桁行3.8m、梁行3.6mで、庇の幅は1.0mを測る。柱間寸法は桁側が2.0m、1.8m、梁側は1.8mを測る。古墳時代頃と推定される河道に堆積した砂層に柱穴が掘られており、

m、梁側は1.8mを測る。古墳時代頃と推定される河道に堆積した砂層に柱穴が掘られており、柱穴は小さく $0.2\sim0.3m$ 、深さは $0.1\sim0.2m$ を測る。

04-011SK (第146図) C南調査区用水路際で検出した浅い土坑である。北側は用水路下にあ



第146図 04-011SK、04-012SK、04-019SK平面・断面図



る。東西1.2m、南北0.6m以上、深さ0.1 mを測る。埋土は灰黄褐色土であった。

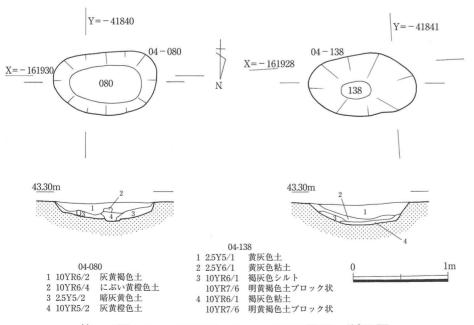
04-012SK (第146図) 04-011SK の東側で検出した楕円形土坑で、北側は 用水路下に延びる。南北1.2m、東西1.3 m、深さ0.2mを測る。埋土は灰黄褐色土で実測できる遺物は出土していない。

04-019SK (第146図) C区南西部で検出した楕円形を呈する土坑である。 大きさは長径0.95m、短径0.6m、掘削断面は「U」字形で、深さは0.3mを測る。 埋土は主に黄灰色土であった。

04-080SK (第148図) C南区にある東西に長い楕円形土坑で、長径1.1m、短径0.65m、深さは0.2mを測る。埋土は地山を攪拌した明黄褐色土と包含層の灰黄褐色土である。

04-138SK (第148図) C区にある 用水路の南側にある楕円形土坑で、長径

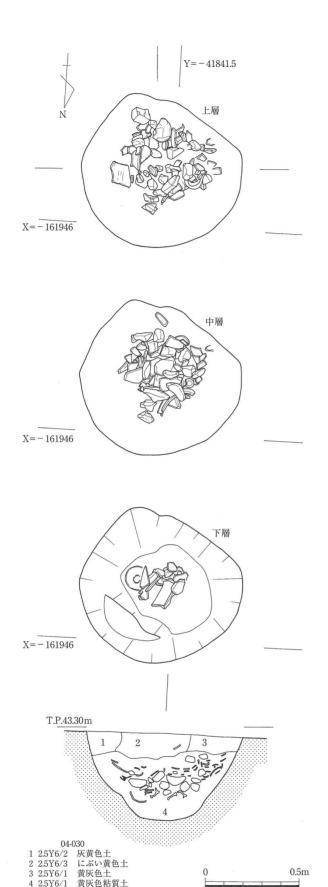
1.15m、短径0.65m、深さ0.2mを測る。掘方は船底形を呈する。埋土は下層に褐灰色粘土、上層に包含層の黄灰色 土が堆積する。掘削後暫く放置されていたのであろう。



第148図 04-080SK、04-138SK平面・断面図

04-030SK (第149図) C区 南西部で検出した やや東に脹らむ歪 な楕円形の土坑で ある。規模は東西 0.85m、南北0.8m を測る。

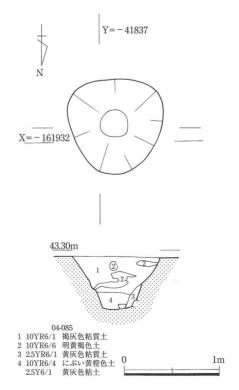
掘方は擂鉢形で 底部は丸く、深さ は0.45mを測る。 下層に黄灰色粘土 が堆積していた



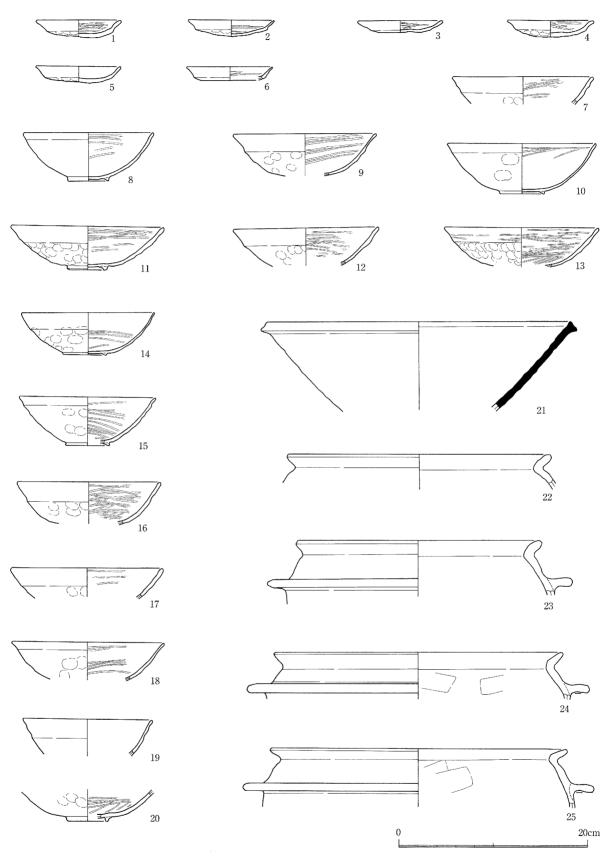
第149図 04-030SK平面・断面図

が、その中に地山の約10cm下まで、瓦器塊や瓦器皿、羽釜片と拳大までの川原石や角礫石などが纏めて投棄されていた。瓦器塊や皿には完形のものもあったが、大部分は破片であった。地鎮の遺構であろうか。

04-030SK出土土器(第151図)1~6は 瓦器皿。口縁部を外彎気味に強く摘む1~4、 6と開き気味に摘み上げる5がある。内面に はミガキを施す。7~20は瓦器境で、高台 は小さい逆台形の11と三角形状のものがあ る。口径14~16cm、器高4~5cm程度のも のが多い。体部外面は指オサエ痕が残り、口 縁部を1,2段に分けてヨコナデ調整する。 13は口縁部外面をミガキ調整する。体部内 面は圏線状のミガキと底部に平行線の暗文を 施す。8は口径13.8cm、器高5.2cm。13は口径 16.4cm。21は須恵器の鉢で口縁部端部を僅か に拡張させ、外傾する面をつくるもの。22 ~25は土師器の羽釜で、短く水平に面をつ



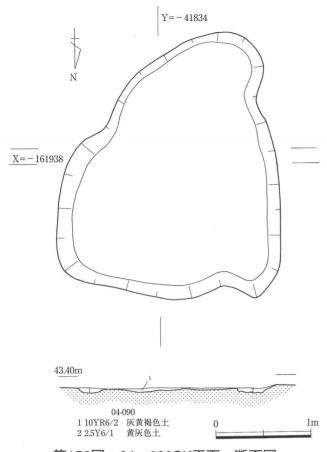
第150図 04-085SK平面・断面図



第151図 04-030SK出土土器実測図

くる鍔から内彎して立ち上がる口縁部を「く」字形に折り曲げ口縁端部は外傾する小さな面をつくる。出土した土器は13世紀前半~中頃に比定できる。

04-085SK (第150図) C南区の北側で検出した。平面は丸みを持つ角形状で、東西1.0m、南



第152図 04一090SK平面・断面図

北0.9mを測る。掘方は擂り鉢状で、深さは 0.5mを測り、底面は平坦である。埋土は主 に褐灰色粘土で、地山の明黄褐色土や包含層 の黄灰色土が粘土化したブロック状に観察さ れる。採土穴と考えらる。

04-090SK (第152図) C南区中央で検出した土坑で、平面は歪な三角形状で長径 2.8m、短径2.35m、底面は南に傾斜し、最深部で約10cmを測る。埋土は黄灰色土と灰黄色土であった。

04-103SK (第153図) 建物23の西側で 検出した方形の土坑で、規模は0.95m×1.0m、 深さ0.7mを測る。埋土は主に黄灰色土で あった。実測できる遺物は出土しなかった。

04-149SK (第153図)C区中央の農業用水路の南側で検出した浅い楕円形の土坑で、規模は1.7m×0.65m、深さ0.1mを測る

04-150SK(付図3) C南区の北端近くで検出した土坑である。歪な方形を呈し、長径4.9m、 短径1.45mを測る。深さは最深部でも0.1m程度で、埋土は地山の明黄褐色土と包含層の黄灰色土

Y=-41834 Y=-161926 Y=-161926 Y=-161926 Y=-161932 Y=-161932 Y=-41837 Y=-

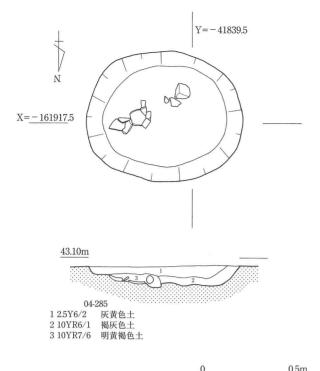
埋土は主に包含層と同じ黄灰色土で、瓦器小皿が出土している。

第153図 04-103SK、04-149SK平面・断面図

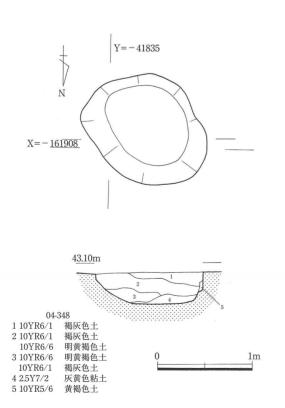
が混ざった土である。瓦器城の高台が出土している。12世紀後葉頃のものである。

04-180SK (付図3) 建物23の北側で検出した土坑で、平面は歪な三角形を示す。 長径1.7m、短径0.85m、深さは0.3mを測る。実測できる遺物は出土しなかった。

04-251SK(付図3) C 区水路の北側で検出した。南 は水路のため確認できなかっ たが南北0.7m以上、東西0.7 m、深さ0.2mを測る。完形



第154図 04-285SK平面・断面図 04-348SK(第155図) C南区中央で検出した。平面は歪な楕円形で長径1.3m、短径1.1mを測る。深さは約35cmで、掘方は逆台形を呈し、底面は平らである。埋土は褐灰色粘土と地山の明黄褐色粘土が混

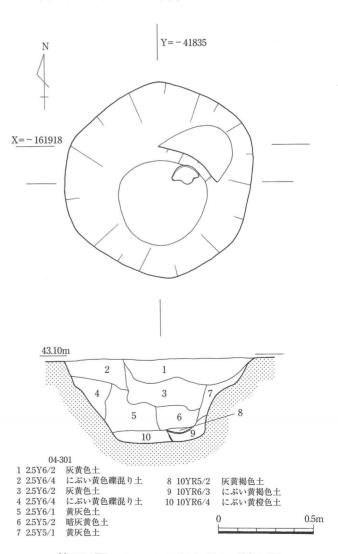


第155図 04-348SK平面·断面図

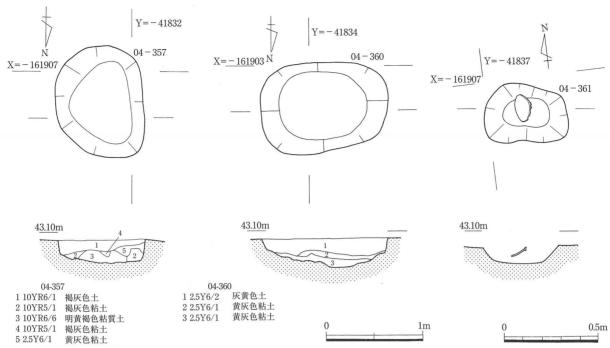
の瓦器埦が出土している。

04-285SK(第154図) 採土坑群の北側で 検出した楕円形の土坑で、長径0.85m、短径0.7 m、深さ0.1mで、底面は凸凹している。底面 に接して土釜片や瓦器境、礫石が出土したが、 実測できる遺物は出土しなかった。

04-301SK(第156図) 採土坑群の北東1 mで検出した土坑である。形状は歪んだ円形を 呈し、直径約1.05m、深さ0.45mを測る。掘削 断面は東にテラス状の段を造る。埋土は主に包 含層の灰黄色土と黄灰色土であった。北の304、 305SKと約1間間隔で並ぶが、掘方の形状や 埋土から採土坑と考えられる。図は瓦器境の体 部破片で、実測図は掲載していない。



第156図 04-301SK平面・断面図



第157図 04-357SK、04-360SK、04-361SK平面・断面図

ざった土である。埋め戻された遺構である。採土穴であろう。

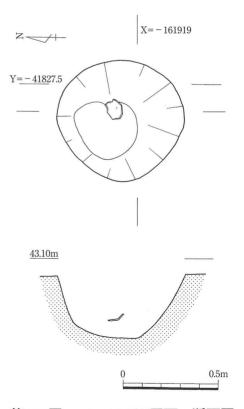
04-357SK (第157図) 調査区中央で検出した土坑で、平面形は歪な楕円形を示す。長径1.2 m、短径0.9m、深さは0.25mを測る。埋土は主に褐灰色土で、採土坑と思われる。

04-360SK (第157図) 採土坑群と区画溝間のほぼ中央で検出した隅丸方形の土坑で長径1.3 m、短径0.95m、底部は船底状で深さ0.3mを測る。埋土は主に灰黄色土と黄灰色土である。

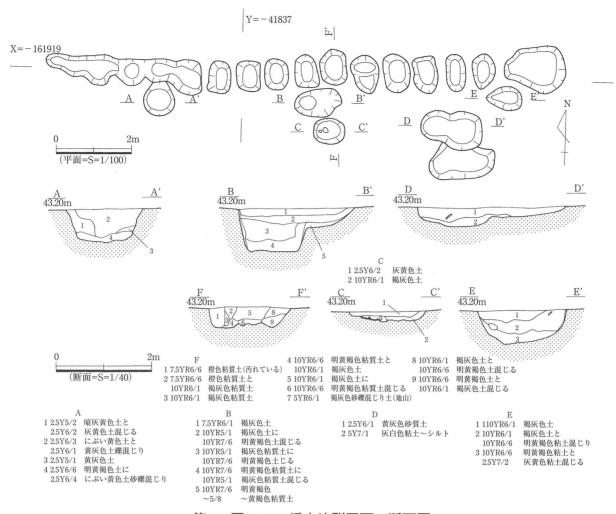
04-361SK(第157図) C区中央、X=-161901m、Y=-41837m付近で検出したピットである。平面は円みを持った長方形で、東西0.45m、南北0.3m、深さ0.1mを測る。第157図に示すほぼ完形の瓦器境が出土している。

04-674SK(第158図) 建物22の西側にある幅1m の雨落ち溝04-155SD内の北端で検出した土坑である。 平面はほぼ円形で、直径0.65m、深さ0.3mを測る。埋土 の黄灰色土内から瓦器埦が出土している。溝の検出時に は確認できなかったので、溝より古いものと考えられる。

採土坑群(第159図) C北区、X = -161919mライン付近にある東西に並ぶ土坑群である。南北に長い楕円形や隅丸方形に掘られ、平面は長径0.7~1.0m、短径0.6m~0.7m、深さ0.3~0.6mを測る。土坑は0.2m前後の間隔で掘削されているが、西側の肩が崩れ膨れた形状を呈するものが多い。地山は明黄褐色粘土で、坑底付近から



第158図 04-674SK平面·断面図

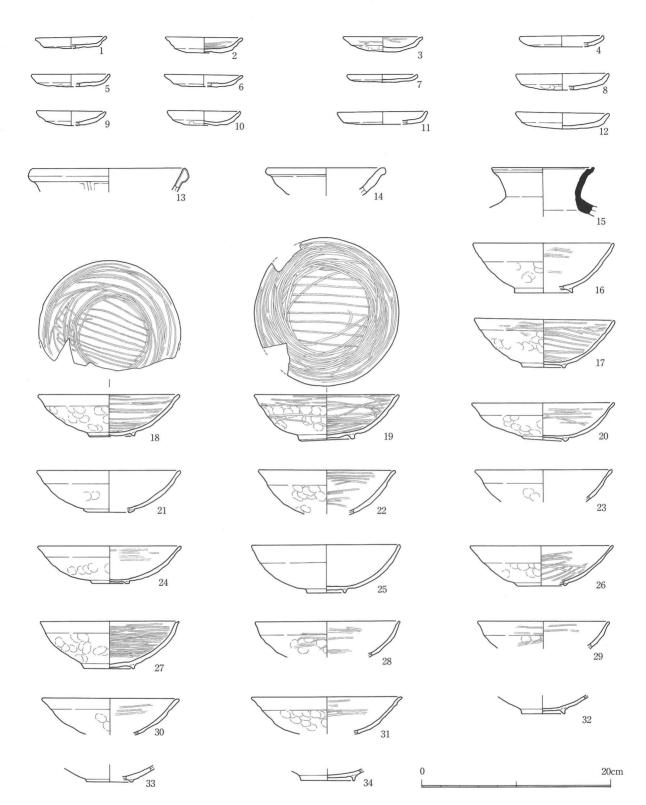


第159図 04一採土坑群平面・断面図

含まれる礫が大きく、しかも多くなるので、この礫層を目処に止めたのであろう。土坑埋土は包含層の黄灰色土、灰黄色土、褐灰色土と地山の明黄褐色粘質土がブロック状に混ざり、粘質化した土で、埋め戻したり、放置されて自然に土砂の堆積が進んだものがある。鋳物を生産する炉壁や鋳型に使用する土を採取したものであろう。

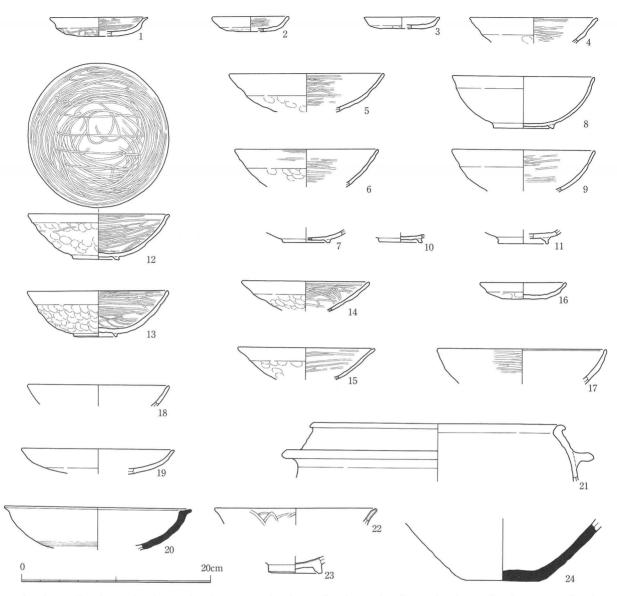
各遺構出土土器 第160図 1~3は瓦器小皿。2は口縁部内面、3は口縁部内外面をミガキで調整する。4~12は土師器小皿で底面は指頭痕を残す5,8とナデで平滑にするものがある。口縁部はヨコナデで調整する。13は白磁碗の玉縁状の口縁部破片。14は土師器碗で、磁器を真似たものか。15は須恵器壺の口縁部。

16~33は瓦器塊である。17~19は見込みに平行線の暗文を描き、体部内面は粗い圏線ミガキで調整する。18の高台は断面三角形で、体部外面は指頭痕、口縁部はヨコナデで成形する。19は外に僅かに踏ん張る逆台形の高台を付け、体部外面は指頭痕の上から粗いミガキで調整する。見込みは平行線の暗文、体部内面はやや密な圏線状ミガキを施す。17、19、28、29は体部外面に粗いミガキで調整する。16、18、21~27、30、31は体部のミガキが消滅した時期のもの。高台は断面三角形か、細い粘土紐を貼った程度のものになる。27は内面に密な圏線状のミガキを施し、口縁端部に沈線を巡らせる大和型のもの。口径14.6cm、器高5.0cm。

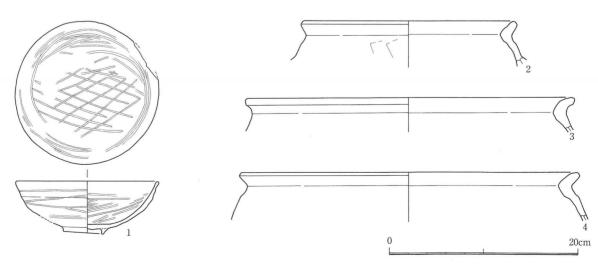


第160図 C区各遺構出土土器 3

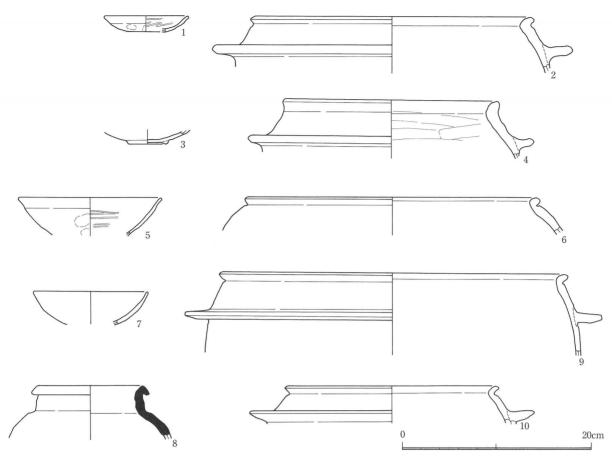
第161図 1、2 は瓦器皿で、1 は底部外面を疎な、内面は密なヘラミガキで調整する。2 は底部外面に指オサエが残る。内面は密なヘラミガキを施す。3、16は土師器小皿。4 \sim 15、17、18は瓦器城である。6、12、17は体部外面に疎なヘラミガキを施し、12は見込みに平行線と螺旋状の







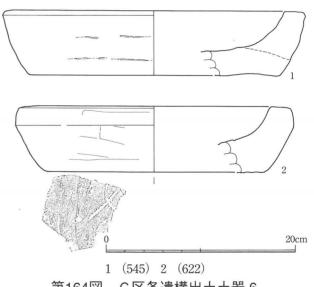
第162図 04-200SK (2~4)、04-301SK (1) 出土土器実測図



1, 2, 4 (600) 3 (656) 5 (735) 6 (725) 7, 8 (608) 9 (612) 10 (635)

第163図 С区各遺構出土土器実測図5

暗文、体部は内面は圏線状に密なヘラミガ キで調整する。8は器壁が摩耗している。 13は体部外面のヘラミガキが消失した段 階のもので、見込みは平行線、体部内面は やや密なヘラミガキを施す。14は直線的 に開く体部を持つ1が、内面は密なヘラミ ガキを施す。19は土師器の中皿で口径16.2 cm、口縁部はヨコナデで仕上げる。20は 古墳時代後期の須恵器高杯で混入したも の。21は土釜、22は青磁碗、23は白磁の 高台である。24は須恵器で、鉢の底部である。



第164図 C区各遺構出土土器 6

第162回 04-200SK、301SK出土土器。1は瓦器椀。外面は疎なミガキを施し、見込みに格 子の暗文を描く。高台は断面逆三角形であるが、しっかり踏んばる。2~4は土釜の口縁部

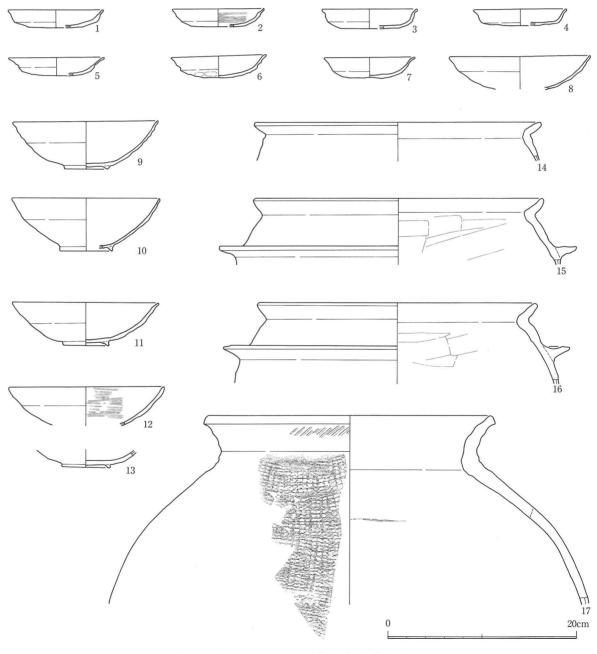
第163図 1は瓦器皿。内面に暗文が残る。8は須恵器の壷。2、4、6、9、10は土釜。4は 内面をイタナデする。9は口縁の内傾が小さく、端部を「く」字形に外反させる。

第164図 1,2は瓦質の淺鉢(火鉢)で、器壁は厚く、口縁の立ち上がりは低い。1は復元

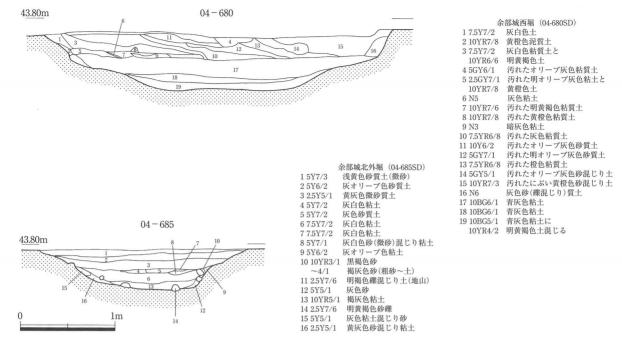
口径31.5cm、器高6.8cm。 2 は体部外面や口縁部を面取する。復元口径28.2cm。

04-650SK出土土器(第165図) 建物22の北東隅、X=-161920m、Y=-41820m付近で地山に埋め込まれた状態で土器が纏まって出土した。地山をやや掘り下げて精査したが掘方は確認できなかった。土器溜まりである。

1~7は瓦器皿で、口縁部は開いて立ち上がり、口縁端部を外反させるものが多い。野ざらし状態であったのか、器壁は摩耗が進んでいる。底面は丸みを持つものが多いが、平らなものもある。8~13は瓦器境である。体部の成形は観察できないものが多いが、12は内面に丁寧なヘラミガキが微かに観察できる。高台は整った逆三角形を呈するものが多い。11は口径15.4cm、器高4.6cm。14~16は土師器の羽釜で、鍔はやや上を向く。口縁部は内傾して立ち上がり、端部を外反させて丸める。口縁部内面は板ナデで調整している。17は須恵器の甕である。



第165図 04-650SK出土土器実測図

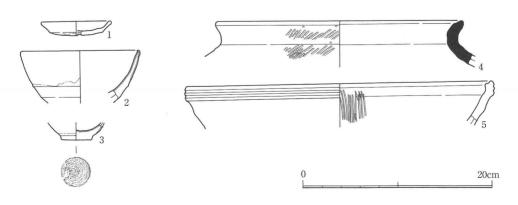


第166図 余部城西堀(04-680SD)、北外堀(04-685SD)断面図

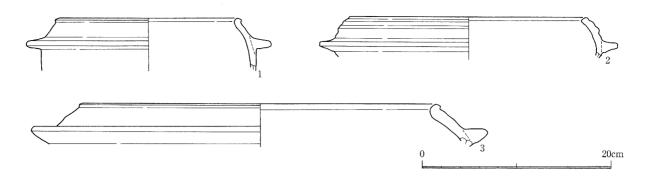
余部城西堀(付図 第166図) C地区南東端で検出した溝である。調査地の小字名に「城の前」、「城の西」、「城の山」などが残っており、『日本城郭大系』で存在が指摘されていた。阪和道建設に伴う調査で南堀と西堀の一部が検出され、城跡の存在が明らかとなった。この調査時にレーダー探査が実施され、城郭の範囲が「城の山」の範囲とほぼ一致することが確認されている。

今回の調査では、西堀の続きと北堀を検出した。北堀は2m程度しか検出できなかったが、 レーダー探査の推定位置とほぼ一致した。また、北堀の北約20mの所で東西堀を検出し、北側 は二重の堀が設けられている事が明らかとなった。

西堀はの阪和道と接する南端のラッパ口部では堀の全幅と内郭の一部を確認できたが、ラッパ口以北では堀の中央部以東が調査範囲外となっている。調査の都合でX=-161920m以北は堀を完掘できなかった。確認した西堀はほぼ南北向きであるが、北端の約10mは僅かに東に振る。溝の上肩幅は $6.2\sim6.4$ m、底幅は2.5m前後、深さ $1.2\sim1.5$ mを測る(掲載した断面図は南端のもので調査境界線と平行になっており、幅が7.5mと広くなっている。)。溝は深さ約0.7mの所で両肩に幅 $0.5\sim0.8$ mのテラスを造る二段掘りである。南端の内郭側は遺構がないので前回調査でも指



第167回 余部城西堀出土土器、陶器実測図



第168回 余部城北外堀(04-685SD)出土土器実測図

摘しているように掘削した土を積み上げ土塁を造っていたと思われる。埋土は最下層に植物遺体を含む青灰色粘土、中下層に砂混じりの青灰色粘土が40~50cmの厚さで堆積する。中上層は砂礫を含む橙色粘質土や灰白色粘土が斜めに堆積している。堀の最終期には西側を浚渫して維持していたことが窺われる。

溝内から出土した遺物は少ないが、瓦器埦や、瓦質甕の小片、唐津焼が出土しており江戸時代 初め頃まで堀や池として機能していたと考えられる。

西堀出土遺物(第167図) 1は瓦器皿、2、3は唐津焼の埦で、2は底部が露胎である。3は糸切り底の高台部分。4は須恵器で甕の口頸部破片。5は備前焼の擂鉢で、上下に拡張した口縁部外面に2条の凹線を巡らせる。室町時代後期から江戸時代のものが混在する。

余部城北外堀(付図 第166図) 北外堀は調査の都合で全体を約30cm掘り下げたのち、幅1 mのトレンチで深さや底幅、埋土を確認した。溝の幅は4.5m、深さは0.85mを測る。掘削断面は北側が深くなるが逆台形を呈し、底面の幅は約2mを測る。埋土は下層に褐灰色粘土、中層に灰白色粘土、上層は黄灰色や浅黄色の砂質土で、人頭大までの礫石や川原石を各層に含んでいる。トレンチ掘りのため遺物は少ないが、平瓦や丸瓦の小片、瓦器片が出土している。

この溝の西側は屋敷地の南溝と繋がっており、屋敷地の東溝が調査地内で確認できないことから、当時の土地区画に従い屋敷地南溝を掘り直し、外堀としたのであろう。また、西堀とは埋土が異なり、粘土や砂質土が水平に堆積していることから、滞水状態が長く、流水は少なかったのであろう。

北外堀出土土器(第168図) 1、3 は土釜、3 は短い鍔に大きく内傾する口縁部をつくる。口径18.5cmを測る。2 は瓦質の羽釜で、内傾して立ち上がる口縁部に段をつくる。

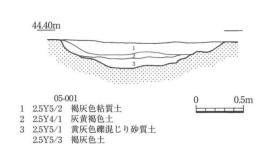
第3節 D、E、F区

阪和道(主要地方道美原泉大津線)と中池の間の調査区である。町道と府道堺富田林線(35号)があり、D、E、Fの3調査区に分けた。調査はF区が平成15年11月、D、E区は平成17年6月に実施した。

D、E区は旧耕土、床土の下に中世頃の遺物包含層である灰黄色土、黄灰色土が堆積する。遺構面は褐灰色シルトと明黄褐色粘質土で、高さはD区が44.0m~44.1m、E区は44.2m~44.3mであった。

D、E区で検出した遺構は少なく、F区からC区まで蛇行して流れる河道の痕跡とD区では浅い落ち込み、F区では中近世頃の溝、ピットを検出したのみである。

05-001SR (第169図) E区の東南部から北流し、調査区中央で西南西に蛇行して北に



第169図 05-001SR断面図

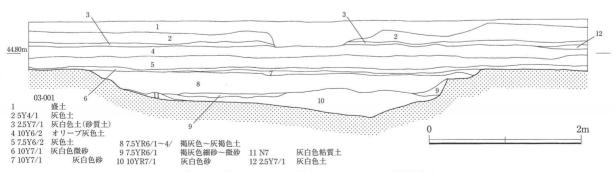
向かい、D区では調査区の西端を掠めるように 北へ流れる川である。D地区では幅2.5m~3.5 m、深さは0.3m前後を測る。埋土は上層が黒 褐色土と褐灰色土が混ざった層、下層は褐灰色 から灰白色を発する微砂で、部分的に灰白色の 砂礫が地山の硬く締まった褐灰色シルトや明黄 褐色土を抉っている。

C区でこの河道は、黄橙色粘質土の地山に幅4m前後の褐灰色砂質土としてX = −161960m 付近で西側から現れて北に流れ、採土坑群の北側で向きを東に変え、余部城の堀と重なって観察 される。この付近では土色が褐灰色から灰白色に薄くなり、底も浅くなっていた。余部城付近で 消滅すると考えられる。

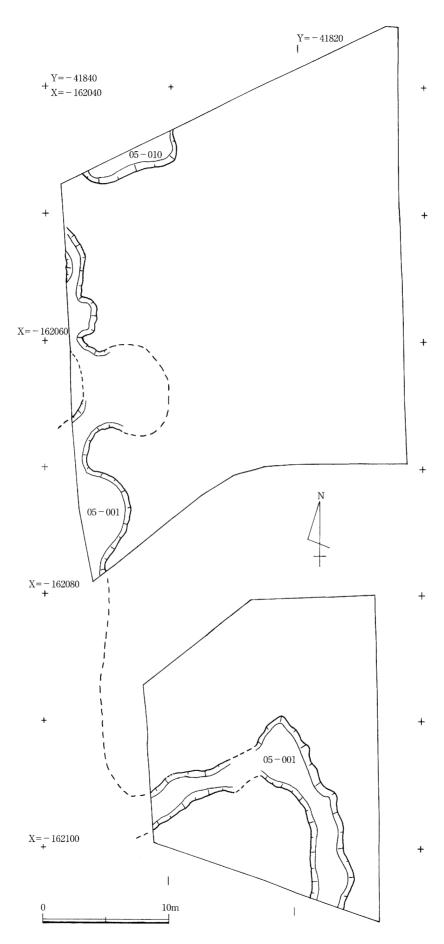
05-010SK (第171図) D区北端で検出した浅い落ち込みである。東西幅約8.0m、南北は1.5 m以上を測る。掘方は不明瞭で地山が緩く傾斜した様な遺構である。深さは約0.15mで灰黄色粘土が埋積していた。中世頃の土師器小片が出土している。

F区は「く」字形の調査区であるが、この南西隣の空地で確認調査を行ったところ、約1.5m 下にある耕土層の下は礫混じりの灰白色土層であった。地山が削平されたと考えている。

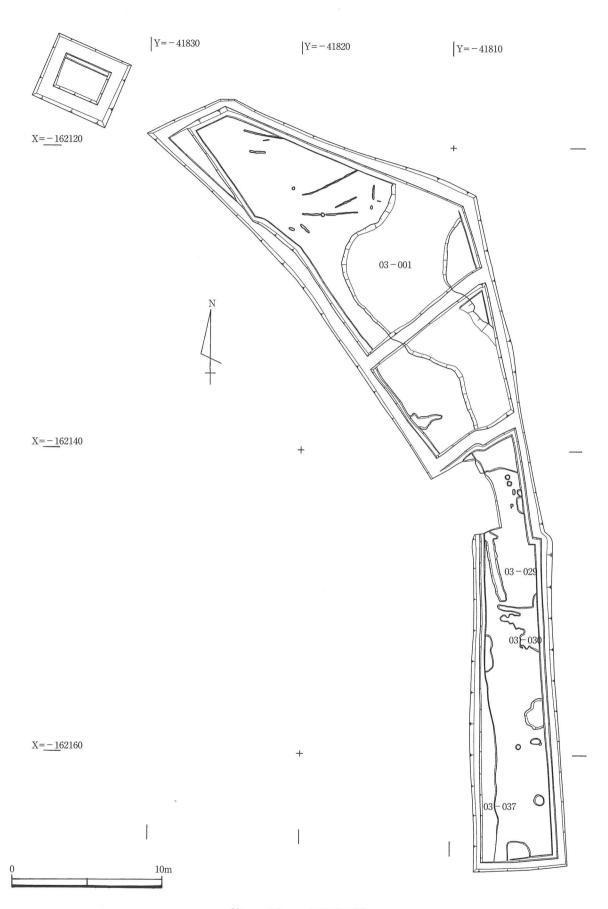
F区は主に水田として利用されており、中池北堤より約1.5m低い。現地表(耕土上面)は



第170図 F区土層と03-001SR断面図



第171図 D、E区平面図



第172図 F区平面図

45.0m前後で、耕土(約20cm)、床土(灰白色土5cm)の下はオリーブ灰色土、(約15cm)、マンガンが沈着する灰色土 (7.5YR6/1)が20cm前後厚さで堆積する。地山は黄色粘質土である。F区では D、E地区で検出した河道の他、浅い溝やピット、土坑を検出した。

03-001SR(第172図) 大きく蛇行しながらF区からC区まで流れる幅 $2 \sim 7$ m、深さ0.4m 前後を測る河道である。F区の中央、X=-162141m、Y=-41805m付近から北西に流れ、X=-162130m付近で西側の地山を浸食して幅約7mに広がって向きを北に変え、北端では幅約5.1mに狭くなってE、D区に向かう。付近では西から北に流れ、E区では北から西へ調査区外に延びる。E区では攪乱により一部右岸側の肩部が不明であるが、調査区西側で半円形に調査区をかすめて北西に走る。

埋土は上層は褐灰色を発する土から微砂、下層は灰白色砂であった。掘削したC、D、E区で遺物は出土しなかったがF区では上層の褐灰色土上面で土師器の小片が出土している。時期は特定できない。

F区の遺構

03-029SD(第172図) 調査区南部X = -162150m付近から北西に走る溝である。幅0.6m前後、深さ $0.1 \sim 0.15$ m測る。攪乱の北側では検出できなかった。埋土は灰色粘土で、土師器の小破片が出土している。

03-037SD (第172図) 西端で検出した南北溝である。西肩は調査区外にあり、幅1m以上、深さ0.05~0.1mを測る。埋土は小石混じりの青灰色粘土で、陶磁器片が出土しており、近世以降に掘削された溝である。

F区では溝の他にもX=-162140m以南でピットや土坑を検出した。柱穴と考えられるピットも数個ある。土坑は不定形で、深さも浅いものが多かった。

G区

中池の南側である。南から北流して中池に注ぐ水路と、2枚の水田により3ヶ所に分かれる。 水路の西側、G西区では床土の下で溝や耕作溝、洪水の砂礫堆積が確認されたが、水路の東側で はこの層で遺構は確認できなかった。

層序を簡単に記しておくと、南端(X=-162334m付近)では耕土、床土の下に中世の遺物を包含する黄灰色土($2.5\,Y\,6/1$)が20cm前後堆積する。この下は遺構検出面(地山)の明黄褐色土で、標高は46.4m前後を測る。地山は北に緩やかに傾斜している。調査区中央の東西用水路(X=-162300m)より南では南北30mの間で約20cmの差であるが、北側では傾斜がやや大きくなり、35mの間に約50cmの比高差がみられ、G区北端(X=-162265m)では遺構検出面はT. P.45.65m前後を測る。

近世以降の遺構

03-101SD (第173図) G西区で検出した。用水路と平行する溝で、幅約1.0m、深さ0.2mを

Y=-41828 Y=-41825 X= - 161330 X= -161320 X=-161310 03 - 10703 - 101

第173図 G西区03-101SD 03-107SD平面・断面図

測る。南端から約30m北で消滅する。埋土はマンガンを含む灰白色砂で、遺物は出土しなかった。この用水路の東側では水路に平行する耕作溝が観察される。

03-107SR(第173図) G西区で検出した南北河道 痕である。大半は用水路と重なっており、幅0.5m以上 深さ0.3m以上を測るが、用水路の東側では砂層を確認 できないので、幅は2m以内におさまる。埋土は灰色砂 層で、白磁碗片が出土している。

この他、G西区では中近世の耕作溝や浅い土坑を検出している。

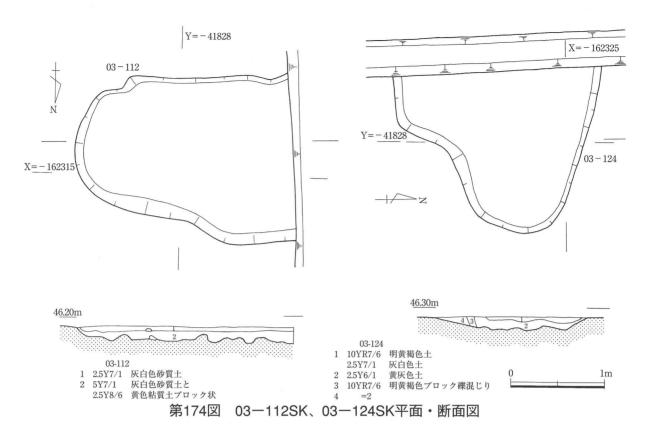
中世の遺構

中世の遺構は調査地全面に展開しているが、東西用水路の北側は地山が傾斜しており、居住には適していなかったのか、検出した遺構は少ない。建物跡など主要な遺構は調査区の南に集中している。

03-112SK(第174図) G西区の中央南よりで検出した浅い土坑である。南北1.8m、東西2.4m以上、深さは0.15m前後を測り、底面は地山の礫が露出し凸凹している。埋土は灰白色土で、濃淡により上下2層に分かれる。実測できる遺物は出土しなかった。

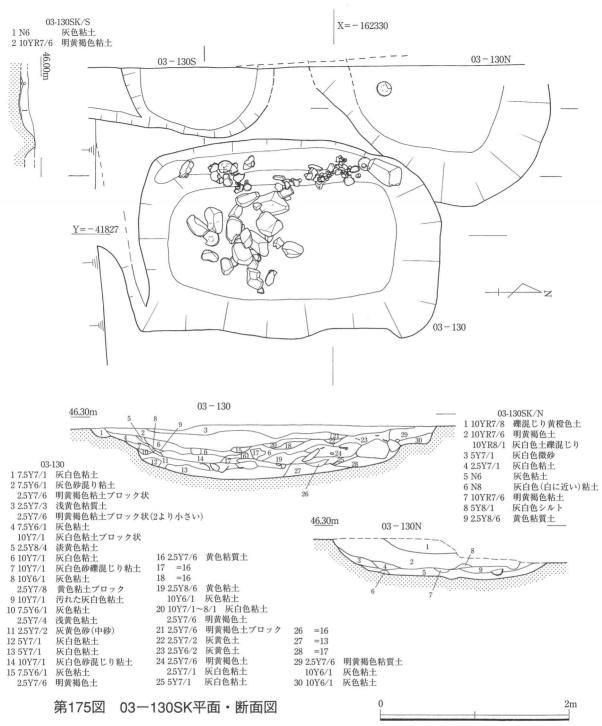
03-124SK(第174図) 歪な形状の浅い土坑である。 南北2.2m、西側は水路下にあり、検出長は1.7mを測る。 深さは最深部で0.08mを測り、底面は凹凸が激しい。

03-130SK (第175~177図) G西区南西端で検出した土坑である。出土当初は埋土に粘土や礫石を含むことから大型方形井戸と認識していたが、全体を掘り下げたところ、3ヶ所以上に分かれる土坑であった。最初に検出した東の土坑は方形を呈し、長径3.4m、短径2.1mを測る。掘削断面は緩傾斜の逆台形で、底面は中央がやや深い浅い境形を呈し、深さは地山面から0.55mを測る。底部の埋土は主に灰白色粘土で水が溜まっていたことを示す。中層以上は完形の瓦器椀や、土師器皿を等の土器類や直径20cm位までの川原石、地山の黄褐色粘質土、



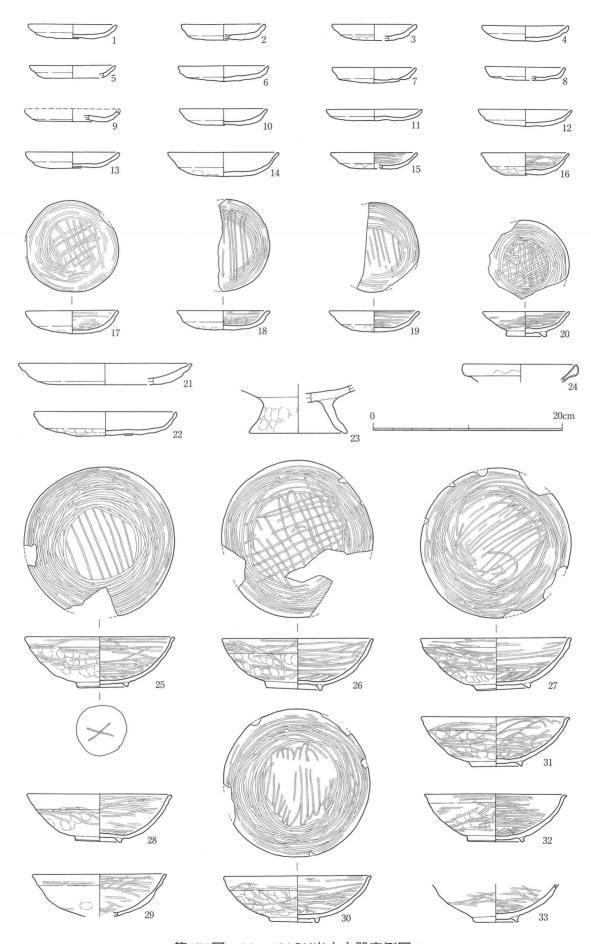
浅黄色土をブロック状に含む灰白色粘土である。西側の2土坑は調査区外に広がっているが、検出時の形状は、南の130 S 土坑が半円形で、南北1.6m、東西0.75m以上、深さは底面中央がやや浅くなる皿形を呈する。埋土は人頭大までの大きな礫を含む灰色粘土、灰白色粘土である。北の130N土坑は東側の土坑に南東部が切られているが、南北2.5m、東西1.4m以上、深さは0.4mを測る。埋土は底部に灰色粘土、中上層は灰白色粘土に地山の黄橙色土がブロック状に混ざった土で、完形の瓦器境や土師器、須恵器、礫が多く含まれていた。中下層に粘土が堆積し、人為的に埋められている。池か水溜めと考えられる。

出土土器(第176、177図) 1~13は土師器小皿、短く立ち上がる口縁部内外面はヨコナデ、見込みはナデで仕上げる。底面は丸みを持ち、やや不安定なものや、中央がやや凹むものが多い。ナデで仕上げるものが殆どであるが、3は指頭痕を残す。14~19は瓦器小皿で、14は内面が摩耗し、調整が残らない。15~19は見込みに細い原体で平行線や格子の暗文を描き、口縁部内面は密圏線状ミガキを施す。底面は指オサエを残し、口縁部外面はヨコナデで仕上げる。17は口径9.6cm、器高2.5cm。20は瓦器の小塊。復元口径9cm、底径2cmの八字形に踏ん張る逆台形の高台を付ける。外面はやや疎なヘラミガキ、内面は格子の暗文に密な圏線状のヘラミガキを施す。器高2.6cm。21、22は土師器中皿。21は口縁部外面を3回に分けてヨコナデする。21は底面に指オサエが残る。底部から内彎して短く立ち上がる口縁部を作る。口縁部はヨコナデ、内面はナデで仕上げている。23は土師器の脚台で、境か皿に付ける。外面を指オサエで整えている。24は白磁碗で、玉縁状の口縁部である。復元口径12cm。磁器はこの1点のみであった。25~51は瓦器塊である。高台は逆台形で、「ハ」字形に踏ん張るものが多い。25~38の体部外面は指オサエで

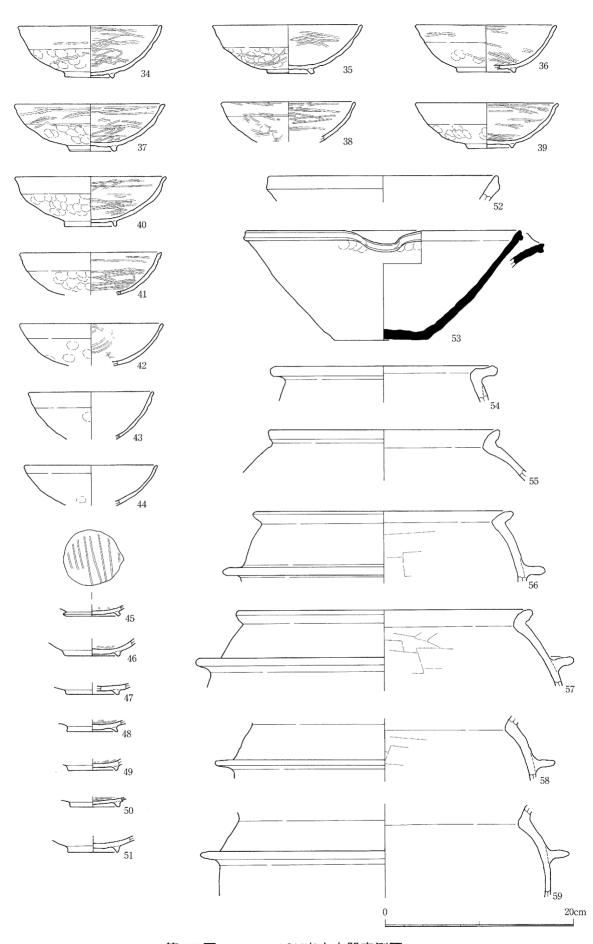


成形した後、粗いヘラミガキを巡らせる。口縁端部外面はヨコナデで仕上げるものと、ヨコナデの後にやや粗いヘラミガキを施す26、27、31などがある。見込みの暗文は格子目と平行線のものがある。体部内面は密なヘラミガキで器壁を整えている。25は底面に「×」状のヘラ記号を印す。39~42は高台が三角形で、体部外面にヘラミガキを施さず、規則的な指オサエが残る。見込みの暗文は平行線と格子状のものがあり、体部内面はやや密なヘラミガキで成形している。43、44は器壁が摩耗している。

52は瓦質の鉢、53は須恵器の片口鉢で、口縁端部を摘み、外面をヨコナデする。54~59は土釜で、水平に開く鍔から内彎して口縁部を付ける。口縁端部は「く」字形に外反させるものと、短く水平近くまで折り曲げる54がある。



第176図 03-130SK出土土器実測図 1



第177図 03-130SK出土土器実測図 2

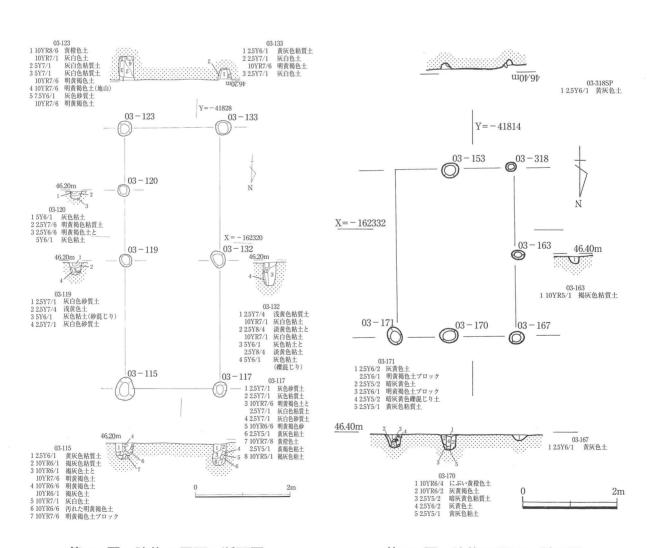
多数出土した瓦器は、形態や成形から12世紀前半から後葉頃に比定できる。この遺構は瓦質 鉢が混入しているが、12世紀後半頃と考えられる。

建物跡 G区は中池に近い北部の地山が緩く傾斜し、居住には適さなかったのか、柱穴は調査 区南部に集中する。4棟の建物を復元した。

建物26 (第178図) 03-130SKの北側で検出した。西側が調査区外にあり、東西の規模は不明であるが南北2間×東西1間以上の総柱建物である。東桁の柱間隔は北側が2.7m、南は中間に東柱があり1.5m、1.4m、西桁の柱間隔は2.7m、2.8mを測り、柱の間隔が広い建物である。柱穴は円形で径0.3~0.5m、深さは0.2m前後を測る。

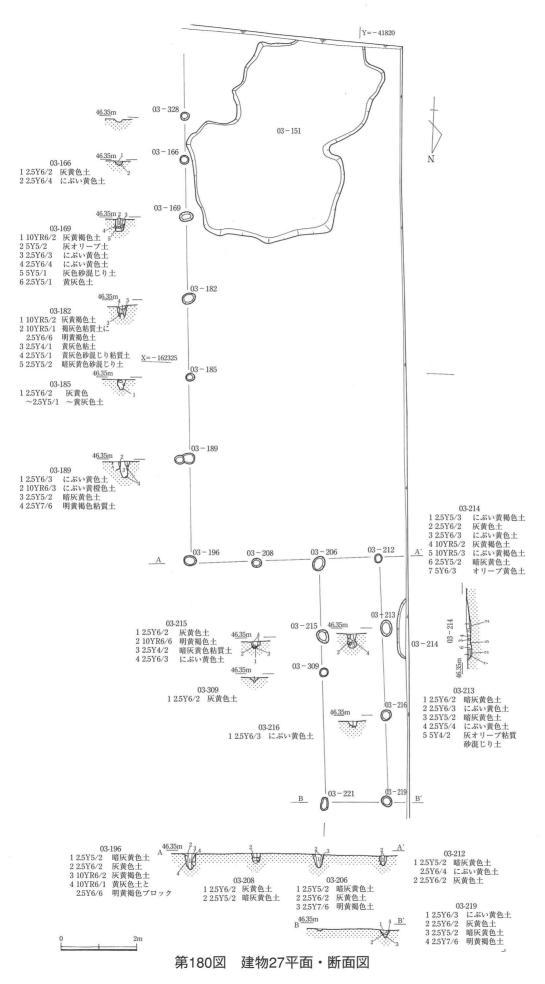
建物27 (第180図) G区南端で検出した北側に副屋をもつ大型の南建物である。南北の桁行 6 間で11m以上、梁間は西側桁が用水路の下にあるが、4 間、約6.5m前後と考えられる。東と北側は柱穴位置と直接対応しない所もあるが、庇が付くと思われれる。母屋の南端には建物内土 坑03-151 K があり、工房として利用されたと考えられる。

建物28 (第181図) 建物27と重複する位置で復元した南北建物である。桁行4間、梁間2間



第178図 建物26平面・断面図

第179図 建物29平面・断面図



で 規模は6.3 m×4.2mを 測隔では 水北、 北、 北、 1.4m、 1.4m、 1.3m、 1.4m、 2.2m がくる。 がくる。 がくる。 がくる。

建物29 (第179図) 建物27の東 側で復元し た 2 間× 2 間の南北建 物である。 東桁側の柱 穴を検出で きなかった が、規模は 桁行3.7m、 梁行2.76m を測る。柱 間寸法は、 桁 行 が 1.9 $m \cdot 1.8 m$ 北梁側は1.5 m、1.2mを 測る。柱穴

03-183 03-180 1 2.5Y5/2 暗灰黄色土 1 2.5Y7/1 灰白色土 2 10YR5/2灭黄褐色土 2 10YR7/6明黄褐色土 3 2.5Y5/3 黄褐色土 3 10YR6/1褐灰色土 4 2.5Y4/2 暗灰黄色土 m35.94 -41818 $\sqrt{03-180}$ 03 183 B 03-184 _B' 03 - 312_C... C" 0 $\bigcirc 03 - 202$ 03 - 18C' X = -16232303-209 D 03 - 192D **◎** 03 - 211 03 - 19503 - 31403-205 E E 46.35m 03-184 В 1 2.5Y6/2 灰黄色土 2 2.5Y6/6 明黄褐色礫混じり土 46.35m 03-187 03-202 03-312 1 2.5Y5/2 暗灰黄色土 1 10YR6/1 褐灰色土 1 2.5Y6/1 黄灰色土 10YR7/6 明黄褐色土 2 10YR6/1 裾灰缶+と 10YR7/6 明苗褐色十 3 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 46.35m D' 03-192 03-211 03-209 1 2.5Y6/2 灰黄色土 1 2.5Y6/2 灰黄色土 1 2.5Y6/2 灰黄色土 2 2.5Y6/3 にぶい黄色土 3 2.5Y5/2 暗灰黄色土 03-195 03-205 1 2.5Y6/2 灰黄色土 1 2.5Y6/2 灰黄色土 46.35m Е E' 03-314 1 10YR6/2 灰黄褐色土 4 25Y5/1 黄灰色粘質土砂混じり 2m 2 2.5Y6/2 5 2.5Y4/1 灰黄褐色土 黄灰色粘土

にぶい黄色十 第181図 建物28平面・断面図

3 2.5Y6/4

は円形で径0.25~0.4m、深 さ0.2m前後を測る。

井戸、土坑

03-150SK(第184図) 調査区南端、南北に流れる 03-160SDの東側で検出し た歪な形状の浅い土坑であ る。西は03-160SDに切ら れるが、南北2.3m、東西 0.15m以上を測る。土坑の 最深部は西端近くにあり、 0.15mを測る。埋土はにぶ い黄色土や、灰黄色土で、 地山の土で埋めたようてい る。遺物は出土していない。

03-151SK (第182図)

建物27内にある大型土 坑である。規模は南端が調 査区外に広がるが、南北 5.4m以上、東西は約4m を測る。深さ0.2mで、底 面は地山の砂質土に多く含 まれている礫が露頭してい るため凹凸が激しい。埋土 は黄灰色土や灰白色土で、 地山の灰白色土、黄褐色土 を粒状に含む。第2層の黄 灰色土は遺構全面に観察さ れた。硬く叩き締めた状態 ではなかったが、貼り床を 施したと考えている。

03-152SK(第183図) 調査区南端で検出した歪 な方形土坑で、長径1.15m、

にぶい黄色粘質十

6 2.5Y6/3

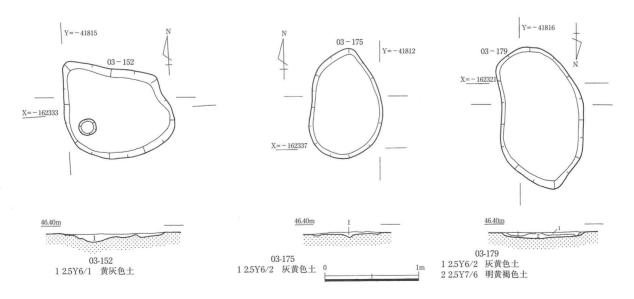
Y = -41820X = -16233046.40m 03-151 1 10YR6/6 明黄褐色土 2.5Y6/1 黄灰色土 2 2.5Y6/1 黄灰色土 3 2.5Y7/1 やや汚れた灰白色土 4 10YR7/6 明黄褐色土 ~7/8 ~黄橙色土 5 10YR7/1 灰白色土に 10YR7/6 明黄褐色土ブロック状 6 6N8/ 灰白色砂〜粗砂 7 25Y6/1 黄灰色砂質土 2m

第182図 03-151SK平面・断面図

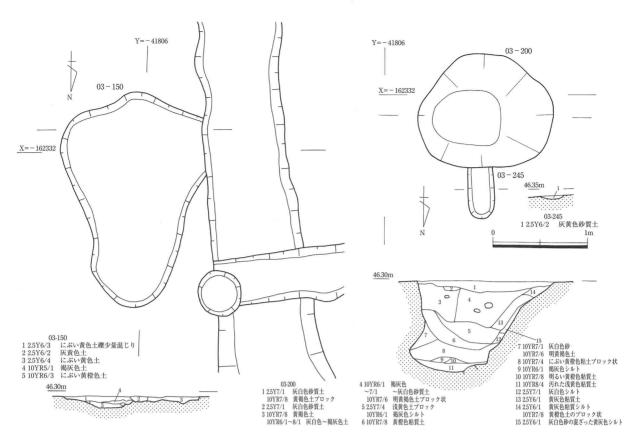
短径0.95m、深さ 0.08mを測る。底面 は地山が礫を多く含 むため、全体に凹凸 している。建物の柱 痕で囲まれており、 規模は小さいが建物 内土坑である。

03-175SK(第 183図) 調査区中 央で検出した土坑で ある。平面は南北に 長い楕円形を呈し、 長径1.2m、短径0.75 m、深さは0.05mを 測る。埋土は灰黄色 土である。

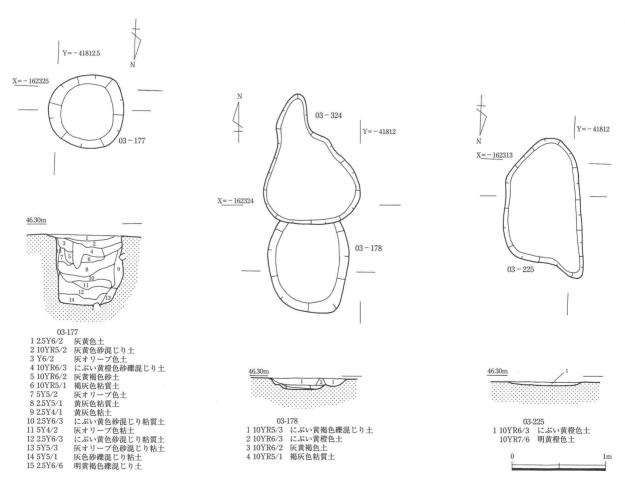
03-177SK (第 185図) やや歪ん だ円形土坑で、直径 0.8mを測る。



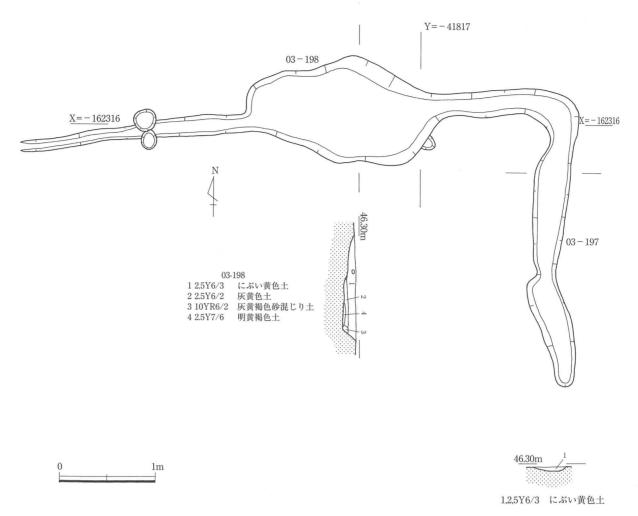
第183図 03-152SK、03-175SK、03-179SK平面・断面図



第184図 03-150SK、03-200SE平面・断面図

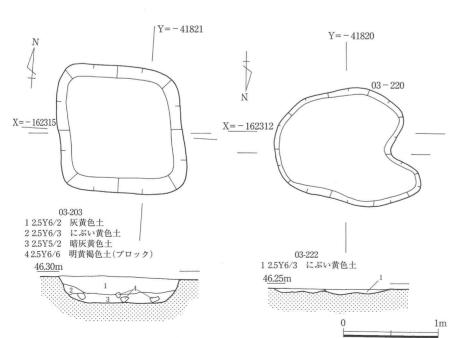


第185図 03-177SK、03-178SK、03-324SK、03-225SK平面・断面図



第186回 03-197SD、03-198SK平面·断面図

掘方はほぼ垂直で0.75mを測る。埋土は下層が灰色から灰オリーブ色の粘質土、中上層は黄灰色



第187図 03-203SK、03-222SK平面・断面図

から灰黄色の砂混じ り土で、下層は自然 堆積、上層は人為的 に埋め戻された土で ある。採土坑か水溜 めであろう。

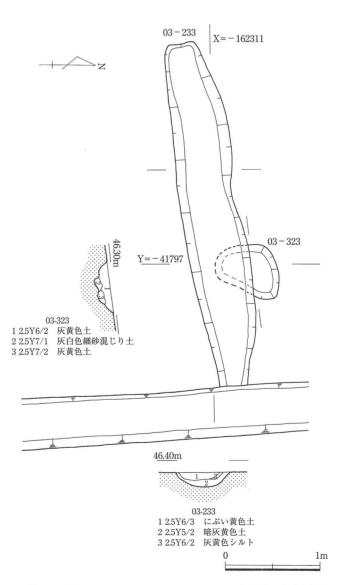
03-178SK (第 185図) 楕円形の 土坑で、南は03-324SKに切られてい る。東西0.85m、南 北は1m以上、深さ 0.15mを測る。埋土 03-224 1 2.5Y6/3 にぶい黄色土 2 2.5Y5/2 暗灰黄色土 2.5Y7/6 明黄褐色土ブロック m08.04 X = -1623133 2.5Y6/4 にぶい黄色土 03 - 224Y = -4181603 - 2041m 46.30m 03-204 1 2.5Y6/3 にぶい黄色土 2 2.5Y6/2 灰黄色砂混じり土 Y = -4181703 - 231X = -16232646.4m 03-231 1 10YR6/2 灰黄褐色土 2 10YR6/3 にぶい黄橙色土 3 10YR5/2 灰黄褐色土

第188図 03-204SK、03-224SK、 03-231SK(下) 平面・断面図

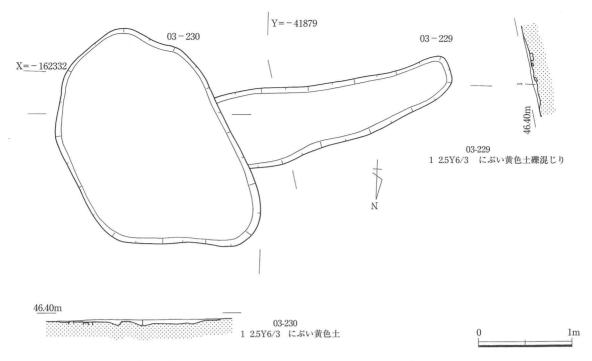
は砂礫を含む黄褐色土、灰黄褐色土である。

03-179SK (第183図) 大型の建物 2 の東側で 検出した歪な楕円形土坑で、長径1.5m、短径0.9m、 深さは0.06mで、底面は平坦である。埋土は包含層 の灰黄色土と地山を掘り返した黄褐色土である。

03-197SD、03-198SK(第186図) 建物27の 東北側で検出したL字形に曲がる溝である。建物 27の副屋東側から始まり、中央に幅2.2m、深さ0.1 mの土坑 (03-198SK) を介して、東西の長さ約



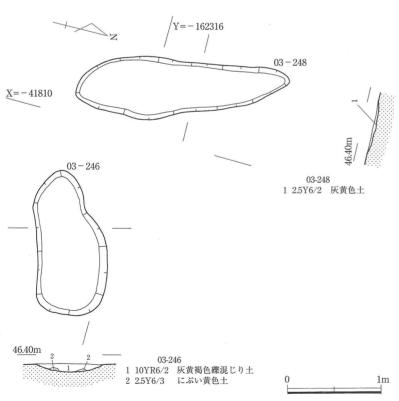
第189図03-233SD、03-323SK平面・断面図



第190図 03-229SD、03-230SK平面・断面図

5.8m、ほぼ直角に南に曲がり、母屋の北側まで約3mの長さを測る。幅は $0.25\sim0.35$ m、深さは0.05m前後を測る。建物27の北東を区画する溝と考えられる。

03-200SE(第184図) 調査区中央付近で検出した土坑である。平面は歪んだ楕円形を呈し、南北1.2m、東西1.45mを測る。掘方は西側は内に傾斜するが、東側は袋状に抉っており、最深部

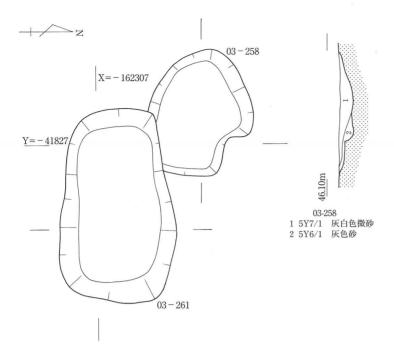


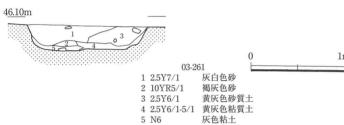
第191図 03-246、03-248SK平面·断面図

は東側にあり、0.95mを測る。 上層は灰白色砂質土、黄橙色 土、底部には黄橙色粘土が堆 積していた。湧水層には達し ておらず、調査時にも水が染 み出す事はなかった。貯蔵穴 であろうか。

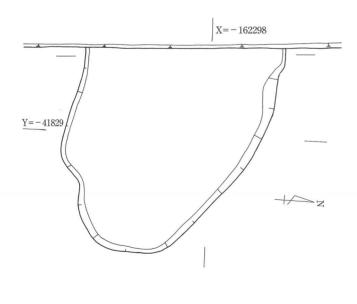
03-203SK (第187図) 調 査区中央で検出した整った方 形を呈する土坑で、規模は 1.3m×1.3m、深さ0.3mを測 る。埋土は灰黄色土、灰白色 土である。

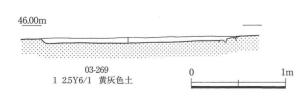
03-204SK(第188図)L 字形溝03-197SDの北側で検 出した長楕円形を呈する土坑



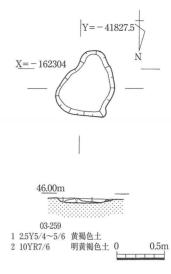


第193図 03-258SK、03-261SK平面・断面図





第194図 03-269SK平面・断面図



第192図 03-259SK 平面・断面図

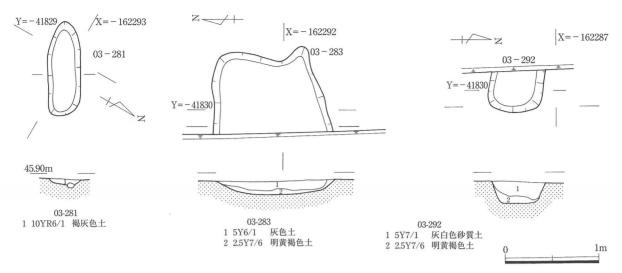
で、長径2.7m、短径0.8mを測る。 深さは西側が深く、0.16mを測る。 ^{1m} 埋土は地山土を攪拌したにぶい黄 色土や灰黄色砂質土である。

03-222SK (第187図) 西がくび れる円みのある歪な土坑で、南北1.2 m、東西1.45m、深さ0.07mを測る。 埋土はマンガンを含むにぶい黄色土 である。

03-224SK(第188図) 歪な楕円 形の土坑で東西1.35m、南北1.05mを 測る。南側が深く、検出面からの深 さ0.08mを測る。埋土は地山に近いに ぶい黄色土である。

03-225SK (第185図) 調査区中 央で検出した不定形土坑である。平 面形は北辺は円形、南は方形を呈し、 長径1.4m、短径0.8m、深さ0.07mを 測る。埋土はにぶい黄橙色土で、地 山を攪拌した土である。

03-229SK(付図4) 調査区南 東部にある浅い溝状の遺構である。



第195図 03-281SK、03-283SK、03-292SK平面・断面図

東は03-230SKに切られるが、検出長は2.5m、幅0.8mを測る。深さは0.05mで、埋土はにぶい黄色土である。

03-230SK (第190図) 楕円に近いいびつな形状の浅い土坑である。長径2.3m、短径1.7m、深さ0.05m前後を測る。底面は地山が礫を含むため凹凸している。埋土はにぶい黄色土で、遺物は出土していない。

03-231SK (第188図下) G区南東端近くで検出した浅い楕円形土坑で、長径0.95m、短径 0.85m、深さは0.1mを測る。埋土はマンガン粒を多数含む灰黄褐色土、にぶい黄橙色土で、遺物 は出土していない。

03-246SK (第191図) G区東南の160SDの西側で検出した歪な楕円形の土坑である。長径 1.5m、短径0.75mを測る。掘方は緩やかな弧状で、深さは0.1m、埋土は灰黄褐色土である。

03-248SK (第191図) 246SKの西側で検出した、長楕円形の浅い土坑で、長径2.25m、短径0.65m、深さは北が僅かに深く、0.06mを測る。埋土は灰黄色土1層である。

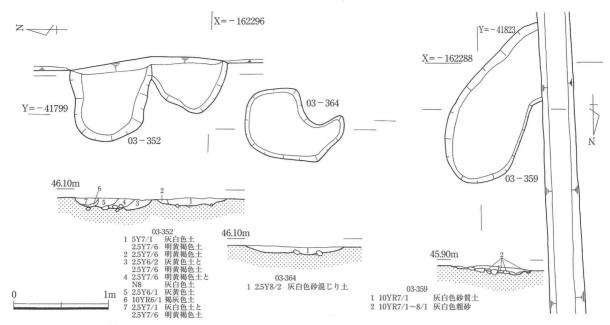
03-258SK (第193図) G区の北部で検出した不定形土坑である。くびれのある方形の平面形で、東西1.35m、南北1.1m、深さ0.17mを測る。砂質土が埋土となっている。

03-259SK (第192図) G西区の中央で検出した歪な三角形状の土坑で、南北0.65m、東西 0.6m、深さ0.05mを測る。埋土は黄褐色土で実測できる遺物は出土しなかった。

03-261SK (第193図) 03-258SKと接する土坑で、2.1m×1.2mの方形を呈する。深さは約0.25mを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は拳大程度の川原石を含む灰白色砂質土、黄灰色砂質土である。規模から墓壙の可能性がある。遺物は出土しなかった。

03-269SK (第194図) G西区中央で検出した歪な楕円形の土坑である。南北2.1m、西は調査区外に広がるが、東西2.2m以上、深さは0.06mを測り、底面は平坦である。埋土は包含層の黄灰色土である。実測できる遺物は出土していない。

03-281SK (第195図) G西区中央部で検出した楕円形の浅い土坑である。長径1.0m、短径



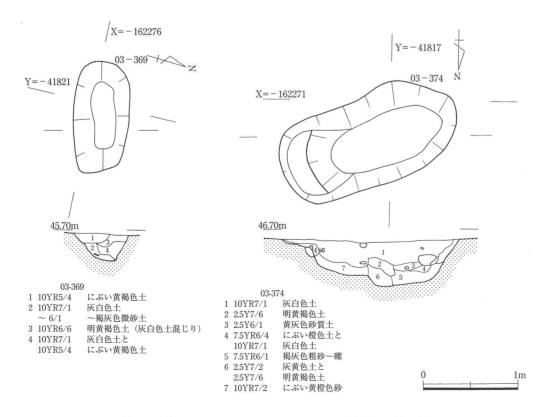
第196図 03-352SK、03-364SK、03-359SK平面・断面図

0.25m、深さは0.06mを測る。埋土は褐灰色土で、地山にある礫のためか底面は凹凸している。

03-283SK (第195図) G西区西端で検出した浅い方形の土坑である。南北1.3m、西側は調査区外にあるが、東西0.8m以上、深さ0.1mを測る。埋土は灰色土と明黄褐色土である。

03-292SK (第195図) G西区の北部にある方形土坑で、西側は調査区外に広がるが、南北 0.6m、東西0.45m以上、深さ0.2mを測る。埋土は灰白色砂質土と明黄褐色土である。

03-323SK (第189図) 歪な三角形状の土坑で、南は03-233SDと重なる。規模は0.6m×0.7



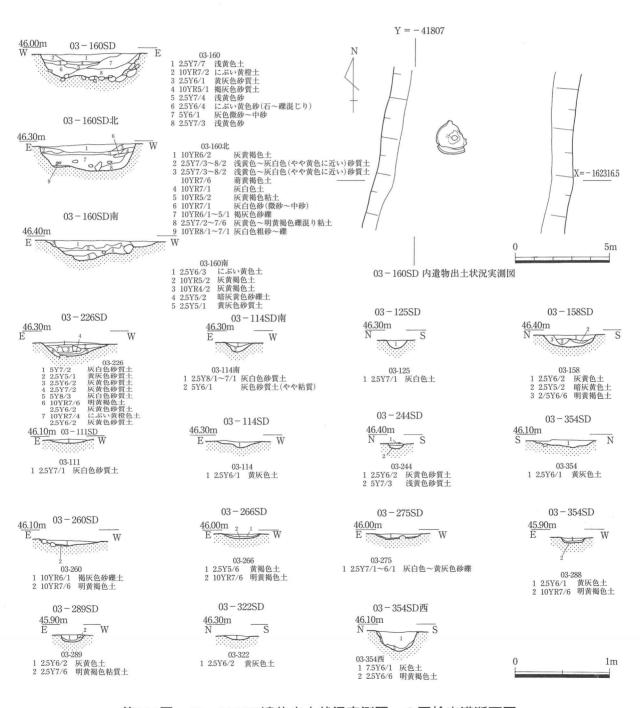
第197図 03-369SK、03-374SK平面・断面図

m、深さ0.2mを測る。底面は凹凸している。埋土は主に灰黄色土である。

03-324SK (第185図) 03-178SKの南側で検出した南に長い不定形土坑で、東西1.2m、南北1.4m、深さ0.05mを測る。

03-352SK(第196図) G北区東端で検出した土坑である。東は調査区外に広がっているが、 平面は楕円形で、長径0.65m以上、短径0.8m、深さ0.1mで、底面は礫が露出して凸凹している。 埋土は灰白色土や地山の明黄褐色土のブロックである。

03-359SK (第196図) 南北溝03-226SDの西側で検出した歪な楕円形状の浅い土坑である。 西側は用水路の下に延びるが、長径1.8m以上、短径0.8m、深さは0.05mを測る。地山は礫が露



第198回 03-160SD遺物出土状況実測図、G区検出溝断面図

出し凸凹が激しい。

03-369SK(第197図) 長径1.1m、短径0.6mを測る東西に長い楕円形を呈する土坑で、深さは0.3mを測る。掘削断面は擂鉢状で、埋土は地山の黄褐色土混りの灰白色土、褐灰色土である。

03-374SK(第197図) 調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径1.95m、短径0.9m 深さ0.35mを測り、底面は凹凸がある。西側はやや傾斜したテラスを造る。埋土はマンガンを多く含む灰白色土である。

溝(付図4 第198図)

この調査地は北に緩やかに傾斜しており、溝も南北方向に掘削されているものが多い。03-160SDのように調査地を縦断するように長さ30m以上のものもあれば、数m程度で掘削意図を推測できないものもある。また、幅数cmで2、3条の溝が2m前後の間隔で平行に走る溝も掘削、図化した。当遺跡では轍状に平行する溝が多数観察されるが、形成原因は不明である。

03-114SD 西区のY=-41826mラインで検出した小溝である。南は03-130SKの東側から始まりX=-162315m付近まで検出長は15mである。幅は $0.3\sim0.6$ m、深さ $0.1\sim0.15$ mを測る。建物27の東を画するための溝と考えている。

03-160SD G南区中央を南から北北東に流れる溝である。幅は1.0m~1.2m、深さは0.2~0.3 mを測る。掘方は北部では逆台形、南部では地山に礫が多く含まれるため浅くなり凹凸のある歪な逆三角形状になる。埋土は上層が中世の灰黄色~にぶい黄色土、下層は浅黄色砂~褐灰色砂で、上層からは中世の瓦器や土師器の小片、下層からは古墳時代後期頃の高杯脚部や須恵器が出土している。

03-226SD G区中央付近から北北西に流れる溝である。X = -162280m付近で浅くなり、G区内では側溝に沿ってかろうじて追跡できたが、G西区では確認できなかった。幅は $0.5\sim0.8$ m、深さは $0.05\sim0.1$ m前後であったが、X = -162300m付近で0.25mとやや深くなる。

03-233SD G区中央の東端で検出した幅0.6mの東西溝で、検出長は3.5mである。堀方は半円形を呈し、深さは0.15mを測る。03-323SKより新しい。

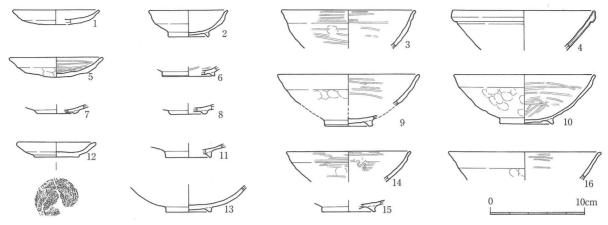
03-260SD 西区のX = -162290m付近で始まり北に流れる溝である。途中で途切れるが調査区北端近くまで延びる溝である。幅は $0.6 \sim 0.8$ m、深さは0.05m未満である。

03-266SD 西区X = -162300m付近で検出した溝で、長さ約4m、幅0.4m、深さは約0.05 mを測る。

03-289SD 西区のX=-162290m付近で始まり03-260SDに合流する小溝である。幅 $0.4\sim0.5$ m、深さは0.05m前後を測る。

03-322SD X = -162306m付近で検出した東西溝で、全長3.5m、幅0.25m、深さ0.04mの小溝である。

03-354SD X = -162295m付近を東西に走る溝で、幅約0.6m、深さは0.15m前後を測る。 03-160SDより新しい。

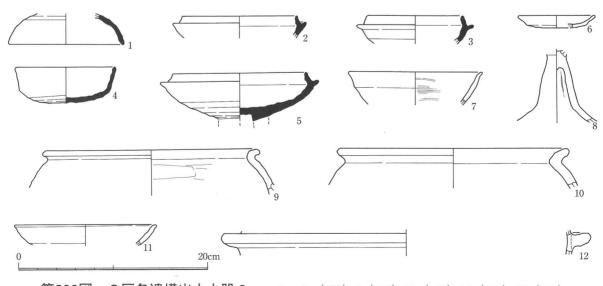


 $1 \sim 3 \quad (114) \quad 4 \quad (107) \quad 5 \sim 10, \quad 12, \quad 15 \quad (151) \quad 11 \quad (177) \quad 13 \quad (179) \quad 14, \quad 16 \quad (124)$

第199回 G区各遺構出土土器実測図1

G区各遺構出土土器 1 (第199図) 1 は土師器小皿、 2 は小型の瓦器塊で高台は逆三角形であるが、体部のミガキは省略されている。 3 は瓦器塊で内外面に疎なヘラミガキがみられる。 4 は白磁碗の体部で、口縁を玉縁状につくる。小片である。 5 は瓦器小皿で口縁部外面はヨコナデ、内面は細い原体で圏線状の密なヘラミガキを施す。 6~11は瓦器塊。 9、10の外面はやや摩耗しておりミガキは観察できない。内面は圏線状のミガキを密に施す。 6~ 8 は瓦器塊の底部破片で、6、 8 の高台は粘土紐を貼り付けた程度のもの。 12は土師皿で、糸切り底のもの。 紀伊地方からの搬入品であろう。 5~12は建物内土坑、 03 - 151SK出土。 13~16は瓦器塊である。 15は内外面にやや密なヘラミガキを施す。 復元口径13cm。 16は逆 3 角形の高台で、底径5.8cmを測る。

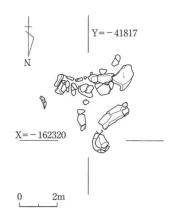
G区各遺構出土土器 2 (第200図) 1~5 は須恵器。1 は杯蓋で、回転ナデの範囲が広い。6 世紀後半のもの。2、3、5 は杯身である。2 は口縁部が短く内傾して立ち上がる。6 世紀中頃のもの。4 は高杯の杯身である。5 は底面を回転ヘラケズリする。7世紀後半頃のもの。口径10.6cm。6 は土師器小皿で、口縁部は強くヨコナデして外反気味に立ち上がる。7 は瓦器境の小片で、外面は摩耗している。8 は土師器の高杯脚部で古墳時代のもの。1~8 は03-160SD出土。



第200図 G区各遺構出土土器 2 1~8 (160) 9 (180) 10 (175) 11 (164) 12 (178)

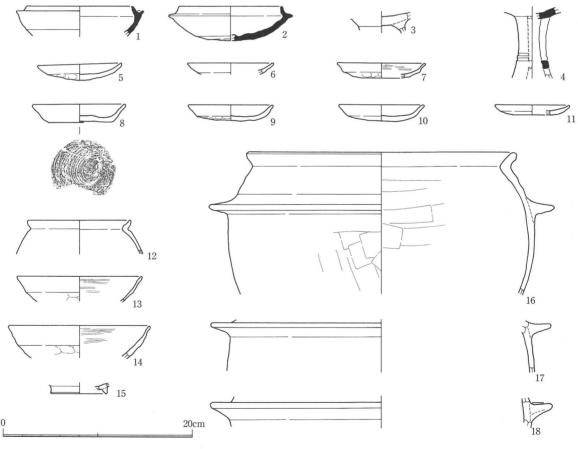
6、7は上層から出土した。9、10は土師質の羽釜口縁部で、 口縁端部を短く外反させて仕上げている。11は土師器皿の口 縁部である。12は土師器羽釜の鍔で、短く水平に延びる。

G区各遺構出土土器 3 (第202図) 1、2、4は須恵器。1、2は杯身、4は長脚の高杯で、6世紀後半頃のもの。3は土師器で、高杯脚部の小片である。5、6、8~11は土師器小皿で、5、9、10は底面に指頭痕が残る。8は胎土が明るい灰白色で、糸切り底である。紀伊地方のものか。7は瓦器皿で、口縁部内面に細い原体で密なヘラミガキを施す。12は土師器で甕の口縁部。13~15は瓦器埦で、13、14は体部外面を2段



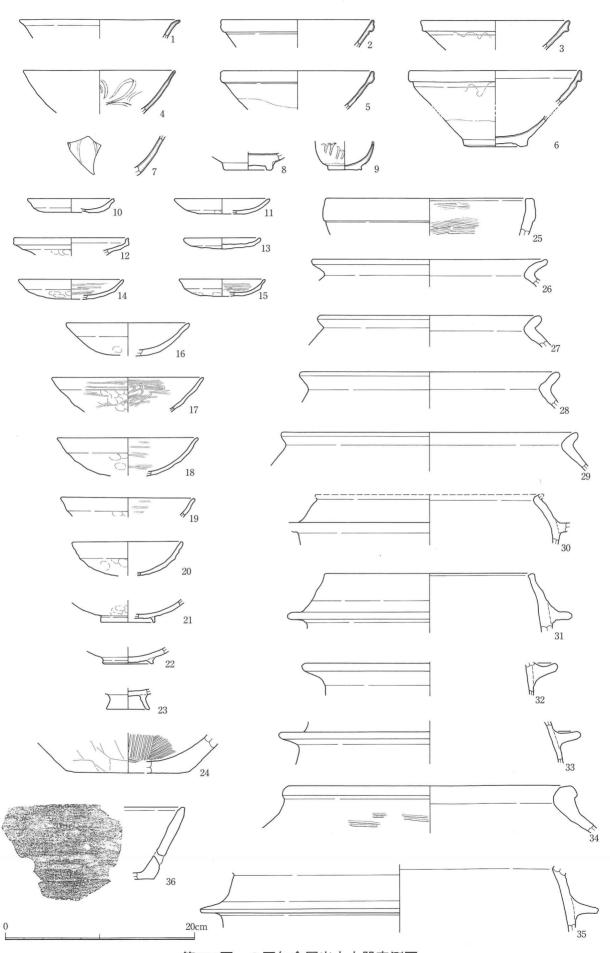
第201図 建物27内土器 溜出土状況実測図

のヨコナデで調整する。外面はミガキが省略されるが、内面は密なヘラミガキである。15は高台の小片。出土状況実測図16~18は土師質の羽釜で、16は球形の体部から口縁端部を「く」字形に外反させる。内面は板ナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリの後に、鍔付近を横方向のヘラケズリで仕上げる。17、18は土釜の鍔で、小片である。



1 (358) 2 (306) 3 (230) 4 (294) 5 \sim 10、16、17 (建物内土器溜)11 (354) 12 (001) 13 (351) 14、18 (231) 15 (229)

第202図 G区各遺構出土土器実測図3



第203図 G区包含層出土土器実測図

包含層出土遺物(第203図) 1~4、6~9は青磁碗で、体部外面は無紋のものが多いが、7は蓮弁文を刻む。4は内面に草花文を刻むもの。6、8、9は底部外面が露胎である。10、11、13は土師器小皿、12は古墳時代の甕口縁部か。14、15は瓦器小皿。16は土師器塊で復元口径13cm前後である。17~22は瓦器塊で、17は体部外面を指オサエで整えた後、粗いヘラミガキで成形する。23は土師器で碗か皿の脚部。24は土師器の擂り鉢である。25は土師器で鉢か。口縁部内面を横方向のハケで成形する。26~33、35は土師質の羽釜である。26~29は口縁端部を「く」字形に短く外反させるもの。30は口縁端部を肥厚気味に丸める。31の口縁は内傾して立ち上がり、外面にあまい段を作る。34は瓦質の甕で、体部外面はタタキ目で、内面はヨコナデで成形する。36は体部に穿孔を持つ瓦質の火鉢である。

第4章 まとめ

鋳造遺構について

A区屋敷地1で2ヶ所の溶解炉を検出した。溶解炉周辺では灰やスラグを捨てた土坑 (05-900SK、05-777SK) や作業場と思われる床に礫を敷き詰めた土坑 (05-550SK)、熱を受けた痕は認められないが、鋳型を置いたと思われる土坑 (05-1115SK) なども検出した。05-777SK は砕けた鋳型の廃棄場所で、熱変した土塊が纏まって出土した。また、05-550SKの周辺には建物を復元できなかったが多数の柱穴を検出しており、覆屋があったと考えられる。

さらに、05-550SK溶解炉1の周辺で土師器皿を埋納したピットを10ヶ所近く検出しており、鋳造作業時に行われたであろう神事の一端を覗わせるてくれる。

鋳造遺構溶解炉の時期は、図化できなかったが、から内外面に丁寧なミガキが観察される瓦器 境片が出土しており、12世紀後半に遡ると考えられる。真継文書も最も古いものも12世紀末に 近い仁安年間のものである。平安時代後期の遺物も12世紀後半より遡るものはほとんど無いことから、燈爐供御人として日置荘に拠点を置いて本格的に活動するのは12世紀後葉からと考えて大過ない。そして、この溶解炉1は日置荘の鋳造遺構としては初期のものと位置づけてもよいであろう。

中世の屋敷地について

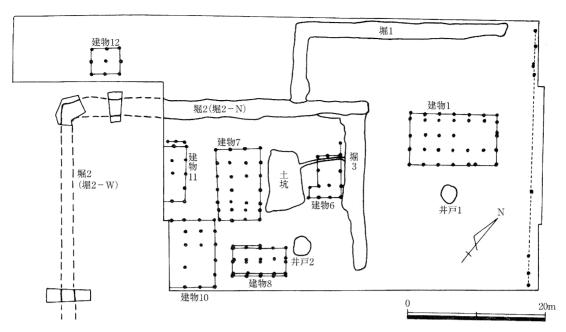
集落の様相については、1970年代以降の大規模な調査によって次第に明らかとなってきた。 奈良時代まで豪族の屋敷とその周辺に大小の家屋が纏まった集村であったが、平安時代前期始に 集落が崩壊し、数軒程度までの家屋で構成される小村や、屋敷間に農地を介在させる疎塊村に なったと考えられている。再び集村化が進のは平安時代後期以降であるとされる。

ここで、中世の村や屋敷地の景観について少し紹介する。

代表的なものとして、原口正三氏が高槻市宮田遺跡で平安時代後期頃の屋敷地を分析している (「古代・中世の集落」考古学研究92)。氏は条里地割りに従った約20m四方で溝や塀で区画された東西に連なる3区の住居群を導き出した。各屋敷地は1~3棟の建物と井戸で構成されているが、原口氏はそれぞれが、一定の規律の下に類似した屋敷や施設を有する自立した営農単位で、しかも密接な連帯の上に立っていると推測した。

宮田遺跡の屋敷地について、佐久間貴士氏は小農民の典型的な屋敷地が集合した小村とする (「西国の集落」『図解・日本の中世遺跡』東大出版2001)が、小農民がどのような階層の農民を 指すのか詳しくは記さない。

石神怡氏も中世の屋敷や集落を考察している(「小結 寺門地区におけるまとめー」『和気遺跡発掘調査報告書』和気遺跡調査会1979)。これによると古代末から中世の集落は5つのタイプに大別される。



第204図 和泉市和気遺跡Ⅳ一2期期遺構図

Aタイプは長原遺跡で検出された主屋と副屋を基本とし、家屋を溝や柵で囲うもの。Bタイプは一辺40~数10mの溝や柵で囲われた数棟の建物で構成されるもの。Cタイプは数10mの柵や溝で区画された内部をさらに区画し、建物を配するもの。小区画内にもそれぞれ井戸を有し、独立性が伺われる。Dタイプは幅数mの大溝によって囲繞される屋敷地の内部に幾つかの区画をもつもの。Eタイプは後の城郭に通じるもので、二重の堀で囲まれ内郭にも外郭にも建物が存在するものである。石神氏が最後に触れているように調査の制約から屋敷や建物群が纏まる集落を分析できていないが、ひとつの目安にはなる。

ところで、鎌倉時代後期社会の様子を伝える『一遍上人絵伝』巻4に筑前の武家館が描かれている。武家館は2方向に溝があり、溝に沿ってはめ板塀と竹垣で囲まれている。屋敷地内には母屋と離れ屋、厩等が建てられ、数頭の馬と、猿や鷹が飼育されている。

この武家屋敷の規模は判らないが、今回調査の屋敷地1はこの館に近い配置を想定できる。屋敷地は南、西、北を溝で囲まれ、南北38m、東西は30m以上を測る。南溝は2重で、04-490SDが幅1.0~1.3m、深さ0.3m、04-500SDが幅0.7m、深さ0.25m前後を測る。南溝と西溝のコーナーは、東西5m、南北4m、0.6mの池を配し、水溜めとしている。北溝は里道下で検出した05-1113溝である。この溝は条里地割に対応し、現在も農業用水路として存続している。屋敷地内は、南溝に沿って6間、長さ16.2mの柱列があり、板塀が造られていたと考えられる。建物は屋敷地の南部に配され、同時に存在したのは1、2棟であったと思われる。中央の南北溝の東側に副屋を持つ建物があり、離れ屋か厩であろう。

屋敷地 2 は屋敷地 1 と溝04 - 500SDで区画される。南と西は幅0.3m~0.5m、深さ0.1m~0.2m の溝で区画されている。区画内部は南部に平行する 2 条の浅い溝があり、溝の間に建物が配置される。屋敷地 3 も南に建物を配し、南部の南溝に重なるような位置で 2 カ所の井戸が穿鑿されている。井戸の前後関係は不明である。区画溝の内側に柵や塀は認められない。

また屋敷地2は屋敷地1より一段低くなっており、排水性が格段に悪い。井戸を持つが、溝や柱穴は貧弱であり、石神氏が分類したCタイプに近いがやや性格は異なる。屋敷地1が鋳物師の棟梁か名主の屋敷地とすると、屋敷地2はそれに従属する家人や諸従で家を持たない身分の人が宛がわれた住居と考えられないであろうか。

余部・日置荘遺跡では阪和道に伴う調査で西除川から南海高野線までの間で約30カ所の溝で区画された屋敷地が確認されている。東の西除川~府道大阪狭山線間では幅2m~3mの溝で南北を画された幅約15mの区画地が検出されている。東西は南溝(溝A-2)が北に曲がることから幅は45m前後と推定される。区画内で建物跡は確認されていない。また、大阪狭山線~堺富田林線間では、東部で「コ」字形の溝で区画された、南北約35m、東西約20mの屋敷地(屋敷地1)屋敷地1内からは多数のピットが検出されている。時期は14世紀を中心に13~15世紀頃の遺物が出土している。

今回の調査地に西接する北余部住宅の調査では、幅2.1m~2.8mの溝で囲まれた南北58m、東西71m以上の屋敷地が検出されている。この屋敷地の内部は小溝によって区画分けされると分析されている。時期は12世紀後半から13世紀である。

これらのことから北余部住宅から西除川までの地域では、石神氏が分類したCタイプの屋敷地が散在し、その周辺に区画を持たない建物が混在した集落景観を復元できる。

一方、府道堺富田林線~南海高野線間では16箇所の区画が復元されている。規模は12m×18 mのものから42m×95mのものまで、区々であるが、1/3町前後のものが多い。区画 2 は南北42 m、東西95mとほぼ1/2町の規模で、溝に沿って土塁が築かれていたと推定されている。区画溝の屋敷地が形成される時期は13世紀から14世紀頃で、16世紀には廃絶し、近世村落へ変わっていく推定されている。

余部遺跡ではこれまでに10万㎡を超える面積の調査が行われてきたが、まだ、集落景観を復元するまでには至っていない。そこで、仮説的に東西2ヶ所の屋敷地の変遷を辿ってみたい。

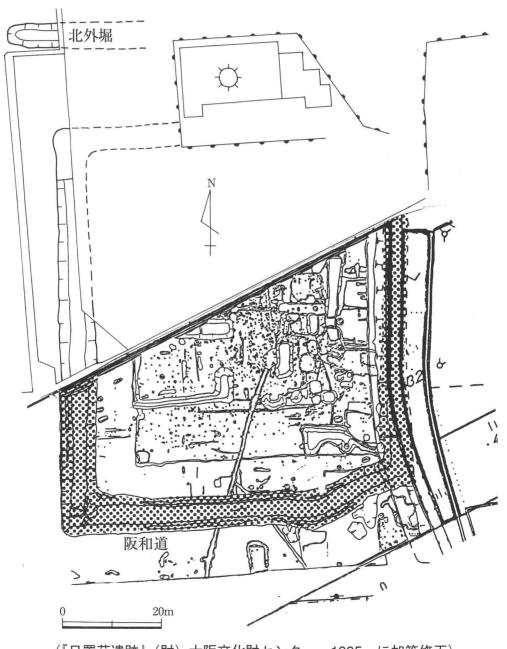
余部に中世集落が成立するのは平安時代末から鎌倉時代にかけてで、名主や鋳物師の棟梁クラスの有力者が条里区画に則って半町規模程度の屋敷地や鋳造工房を散在的に築造した。名主や棟梁層に従属する人も屋敷地の一画を宛がわれた。また、自立性を持った小百姓、鋳造職人は屋敷地の周辺に独立した1、2棟の家屋を建てて営農や鋳物工人として活動していたと推定される。

その後、室町時代以降、灌漑技術が進んで可耕地が広がり、これまでの住居域も耕作が可能となって、集落は南海高野線の東側に纏まった。これが16区画の屋敷地に反映されているのではないだろうか。

余部城について

阪和道の調査で存在が明らかとなった余部城は、幅7mの堀で区画された城郭で、調査で南堀と東堀の南端、西堀の一部が検出された。城郭の規模は東西約60m、南北は小字名「城の山」とレーダー探査の結果から約100mと推定されていた。今回の調査では西堀の残りが調査範囲内に入り、南北約50m分を確認した。阪和道の調査と併せると全長は約80mであり、城の規模は推定より小さくなる。堀の内側は府道とのラッパ口部分しか調査範囲に含まれないが、調査範囲内で遺構は確認されない。指摘のように土塁が築かれていたのであろう。

一方、北堀の北側は16.5mの空地を介して幅4.5m深さ1mの外堀が検出された。西堀と南堀には橋や陸橋は無いので、北面に城門を造り、2重の堀を設けて防御性を高めたのであろう。そこに近世以降も城の名が小字名に残った理由の一端があった。



(『日置荘遺跡』(財) 大阪文化財センター 1995 に加筆修正) 第205図 余部城跡範囲復元図

表 1 遺構位置一覧表

年度	遺構	座標	位 置
	番号	Χ軸	Υ軸
05 -	105	- 161750	-41850
05 -	- 110	-161750	- 41845
05 -	- 110	- 161750	-41845
	- 161	- 161755	- 41842
	- 169	- 161758.5	-41843
05 -	- 172	- 161759	- 41841
	- 173	- 161759	-41840
	176	- 161758	-41841
	199	- 161750	-41837
	- 205	- 161749 - 161749	- 41835
	- 205	- 161749 - 161752	-41835 -41833
	- 209 - 210	- 161748	-41833 -41834
	-219	- 161749.5	-41836
	- 220	-161755	-41837
	- 229	- 161757	-41839
	236	-161759	-41836
	- 243	- 161758.5	-41837
	- 245	- 161757.5	-41838
	- 246	- 161757.5	-41837
	- 254	- 161756	-41836
	- 260	-161754	-41833
	- 261	-161754	-41833
	-270	- 161757	-41834
	- 275	- 161760	-41833
	- 292	-161748	-41826
05 -	- 300	-161757	-41827
05 -	- 300	-161757.5	- 41829
	- 304	- 161758	-41828
05 -	- 305	- 161758	-41827
05 -	- 306	- 161758	- 41827
05 -	- 308	- <i>161758</i>	-41826
05 -	- 309	- 161758	- 41826
05 -	- 320	-161759	-41826
	- 323	-161760.5	41827
	- 323	- 161760.5	-41827
	- 324	-161762	-41827
	- 325	- 161762	- 41827
	- 328	-161765	-41825
	- 330	-161766.5	-41827
	- 330	-161765	- 41825
	- 335 - 335	- 161766.5 - 161766.5	- 41827 - 41827
	- 335 - 338		- 41827 - 41829
	- 338 - 347	- 161763 - 161765	- 41829 - 41830
	- 348	4.44-44-	
	- 354	- 161763.5 - 161762	- 41830 - 41832
	- 357	- 161765	-41832
	- 379	- 161762	-41837
	- 386	- 161767.5	-41838
	422	-161767	-41827
	- 423	- 161767	-41828.5
	- 434	- 161769	- 41827.5
	436	- 161770	- 41825
	- 444	- 161769	- 41830.5
05-	- 445	- 161770	-41830
05-	445	- 161770	- 41830
05-	448	- 161768	- 41829.5
05 -	449	- 161767	- 41829.5
05 -	450	- 161768	- 41830
05 -	- 452	- 161768	- 41830.5
05-	453	- 161766	- 41833
05-	453	- 161766	- 41833
05-	- 469	- 161770	- 41833.5
05 -	-471	- 161770	-41838

年度 遺構	座標	位 置
年段 番号	X 軸	Υ·軸
05 - 480	- 161769.5	-41835
05 - 485	- 161768	- 41837.5
05 - 495	- 161769.5	41841
05 - 495	- 161768	-41840
05 - 506	161770.5	- 41848
05-510	- 161776	- 41847
05 - 515	- 161775	-41838
05-518	- 161775.5	-41830.5
05-520	-161776	-41846
05 - 520	-161776	-41846
05 - 530	- 161768	- 41846
05 - 538	-162770	-41847
05 - 539	- 161755.5	-41828
05 - 540 05 - 545	- 161770 - 161777	-41847 -41840
05 - 545	-161775.5	-41845
05 - 545	-161775	-41844
05 - 553	- 161775	-41842
05 - 555	- 161775	-41830
05 - 555	- 161775	-41830
05 - 569	-161772	-41844
05 - 576	-161772	-41840
05 - 584	- 161777	- 41847
05 - 591	- 161777	- 41840
05 - 600	- 161765	-41827
05 - 608	- 161777.5	- 41847
05 - 624	-161762	- 41833.5
05 - 649	- 161770	- 41827.5
05 - 650	-161770	-41828
05 - 652	-161770	-41828
05 - 657	- 161772	-41825
05 - 683	- 161771.5	-41838.5
05 - 687 05 - 693	- 161774	- 41837
	- 16175 - 161776	- 41827 - 41837
05 - 697 05 - 698	- 161776 - 161776	-41836
05 - 700	- 161775.5	- 41835
05 - 703	-161777	-41835
05 - 719	- 161774	- 41833
05 - 755	- 161776	- 41829.5
05 - 764	- 161777	-41829
05 - 765	- 161778	-41829
05 - 765	- 161778	- 41829
05 - 765	- 161778	-41829
05 - 772	- 161774	-41827
05 - 777	- 161778	-41832
05 - 779	- 161775.5	-41826
05 - 779	- 161775.5	-41826
05 - 788	- 161783	-41848
05 - 835	- 161775.5	- 41837
05 - 843	- 161778	- 41834
05 - 855	- 161780.5	-41830 -41840
05 - 858 05 - 858	- 161780 - 161780	-41840 -41840
05 - 865	- 161780	-41840
05 - 867	- 161781	- 41837
05 - 870	- 161785	-41830
05 - 893	- 161778	- 41827.5
05 - 895	- 161779	-41827
05 - 896	- 161779.5	- 41827
05 - 900	- 161780	-41825
05 - 902	- 161790	-41821
05 - 905	- 161787	-41828
05 - 910	- 161790	-41833
05 - 920	- 161729.5	- 41825
·		

年度 遺構 番号	座標	位 置
	X軸	Y軸
05 - 921	- 161792	-41826
05 – 937	- 161775	-41827
05 – 940	161794	-41820
05 – 944	-166794	-41820
05 – 944	- 161805	- <i>41845</i>
05 – 944	- 161805.5	-41845
05 – 945	-161805.5	-41845
05 – 947	- 161805.5	- 41845
05 – 950	-161780	-41835
05 – 950	<i>161805.5</i>	- 41845
05 – 980	- 161825	-41945
05 - 982	- 161820	-41847
05 – 983	- 161831	-41846
05 – 996	- 161798	-41824
05 – 1000	- 161805	-41820
05 – 1017	- 161801	- 41823.5
05 - 1029	- 161803	-41826.5
05 - 1029	- 161803	- 41826.5
05 - 1031	- 161800.5	-41827
05 - 1032	- 161800	-41826.5
05 - 1045	- 161805	- 41818
05 - 1046	- 161810	-41820
05 - 1050	- 161817	-41821
05 - 1051	- 161817	-41823
05 - 1055	- 161773	-41827.5
05 - 1056	- 161773	- 41827.5
05 - 1058	- 161772	-41827
05 - 1059	- 161772	- 41828
05 - 1069	- 161772	-41829.5
05 - 1070	-161772	-41829
05 - 1070	- 161773	-41828
05 - 1074	- 161774	-41829
05 - 1000	- 161763	- 41825
05 - 1090 $05 - 1092$	- 161759 - 161756 5	- 41825
05 1092	- 161756.5 - 161755.5	- 41825 - 41827
05 - 1100	- 161756	-41830
05 - 1101	- 161751	- 41828
05 - 1102	- 161751	- 41827.5
05 - 1103	-161751	-41827
05 - 1104	- 161755	-41827.5
05 - 1115	- 161760	-41827
05 – 1119	- 161760	- 41837.5
05 - 1125	-161761	-41837
05 – 1128	- 161803	- 41824
05 - 1131	- 161765.5	-41836
05 - 1143	- 161765	- 41832.5
05 - 1153	- 161835	-41831
05 - 1157	- 161835	-41831
05 - 1195	- 161852.5	-41833
05 - 1200	- 161835	- 41846.5
05 - 1203	- 161857.5	-41840
05 - 1204	- 161857	-41839
05 - 1205	- 161860	- 41838.5
05 - 1206	- 161860	- 41838
05 - 1231	- 161859	-41832
05 - 1241	- 161863	- 41843.5
05 - 1245	- 161864.5	-41840
05 - 1246	- 161863	-41840
05 - 1281	-161860.5	- 41834.5
05 - 1287	- 161861	-41834
05 - 1289	- 161861	- 41834
05 - 1309	-161860	-41831.5
05 - 1314	- 161861.5	- 41832.5
05 - 1322	- 161862.5	- 41830.5

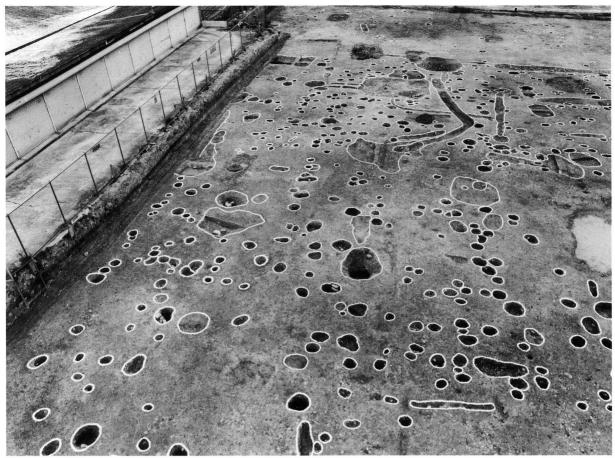
年度 遺構	座標	位 置
番号	Χ軸	Υmi
05 - 1328	- <i>161860.5</i>	-41830
05 - 1332	- 161853	-41820
05-1336	- 161859	- 41917
05-1347	- 161863.5	-41830
05 - 1351	- <i>161851</i>	-41828
05-1412	- 161857	- 41825
05 - 1423	- 161825	- 41820
05-1431	-161758	-41826
05 - 1439	-161772	- 41827.5
05 - 1440	-161772	- 41827.5
05 - 1449	-161771	-41843

年度	遺構	座標	位 置
	番号	X軸	Y軸
04 -	- 138	- 161928	-41840.5
04 -	145	- 161930	-41833
04 -	149	- 161926	- 41837
04 -	150	- 161930	- 41836
04 -	271	- 161918.5	- 41844
04 -	274	- 161917.5	-41842.5
04 -	- 275	- 161917	- 41843
04 -	350	- 161890	-41820
04 -	376	- 161900.5	-41827
04 -	- 389	- 161896.5	-41837.5
04 -	427	- 161886	- 41839
04 -	- 430	- 161887	- 41834
04-	437	- 161866.5	- 41837
04 -	- 442	- 161885	-41834
	- 450	- 161876	- 41829
04 -	- 454	- 161885	-41832
04-	460	- 161887	- 41827.5
	470	- 161871	-41842
	- 475	- 161972.5	- 41839
	- 479	- 1618725	- 41837.5
	480	- 161872	-41837.5
	- 545	- 161862.5	- 41838
	- 550	- 161886	-41828
	- 571	- 161861.5	- 41833
	- 589	- 161862.5	-41830.5
	-600	- 161862	- 41828
	- 608	- 161892	-41838
	-612	- 161891	-41836.5
	-613	- 161889	- 41843
	-616	- 161892	- 41843.5
04-	- 620	-161886	- 41844
04-	-622	- 161867	-41829
04 -	- 635	- 161940.5	-41820.5
	- 656	- 161819	- 41821
	- 656	- 161926	-41818
04 -	- 673	- 161892	- 41824
	- 685	- 161891	-41815
04 -	- 689	- 161886	-41818
	- 700	- 161877	-41816.5
04 -	- 725	- 161861	-41819
04 -	- 727	- 161892	- 41829
	-733	- 161866	-41816
	- 734	-161866	-41816
	736	- 161864	-41824
	- 030	- 161946.5	- 41842
	- 068	- 161941	-41828
	- 086	- 161930.5	-41840.5
V-1	- 堀	- 161910	- 41815

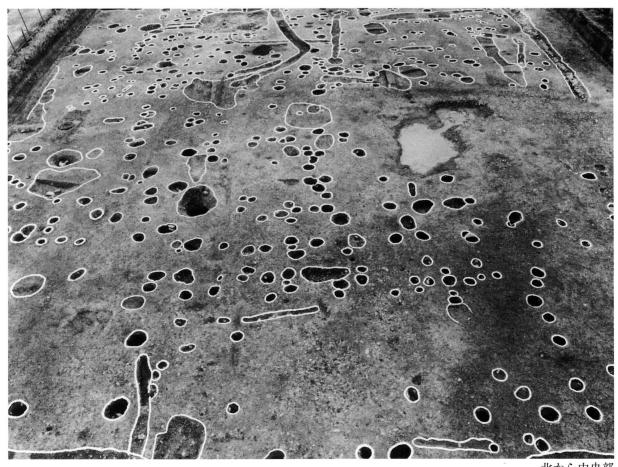
年度 遺標		位 置
番号	X mi	Υ in
03 - 114	- 162327	- 41825.5
03 - 107	- 162310	-41823
03 - 124	- 162326	-41829
03 - 130	- 16230	-41827
03 - 151	- 162330	-41818
03 160	- 162327	-41808
03 - 164	- 162331	-41814
03 - 175	- 162327.5	-41812
03 - 177	- 162325	-41813
03 - 178	- 162323.5	-41811.5
03 - 179	-162320	-41814
03 - 180	- 162327	-41813
03 - 229	- 162326	- 41797
03 - 230	- 162331	-41798
03 - 231	- 162326	- 41797
03 - 306	- 162277	- 41828.5
03 - 323	- 162326	-41811
03 - 351	- 162296	-41799
03-001	- 162140	-41797

遺構番号は遺構面積精査時に遺構と思われるものすべてに付けたので、遺物が出土しても、実測時に遺構ではなかったものもある。 それらは遺物出土位置を斜字で示した。

図版

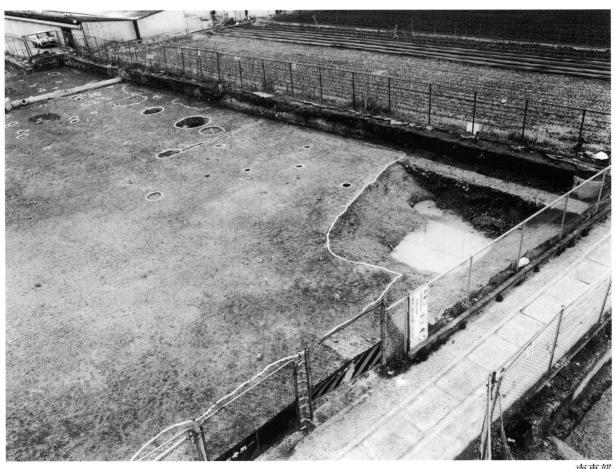


北から北東部





南から



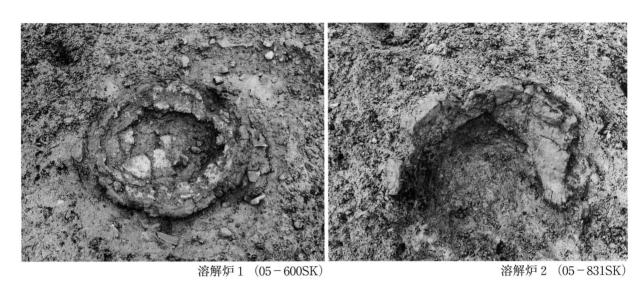
南東部

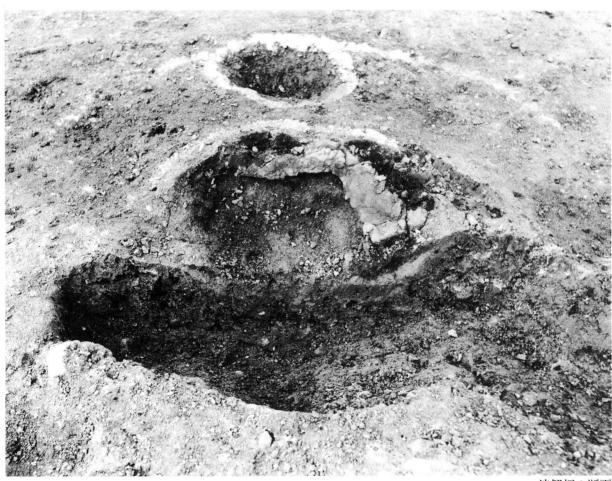


05-105SD (南西から)

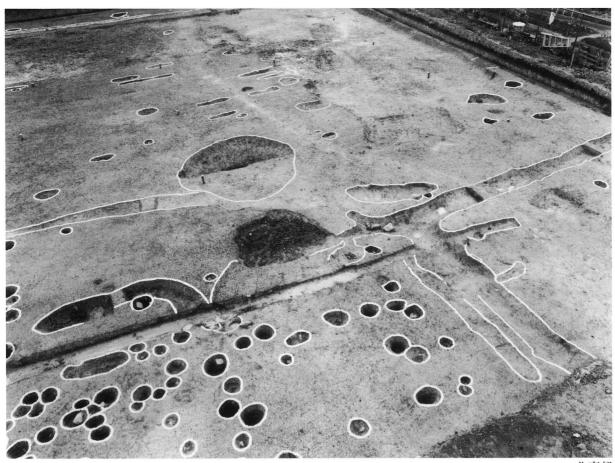


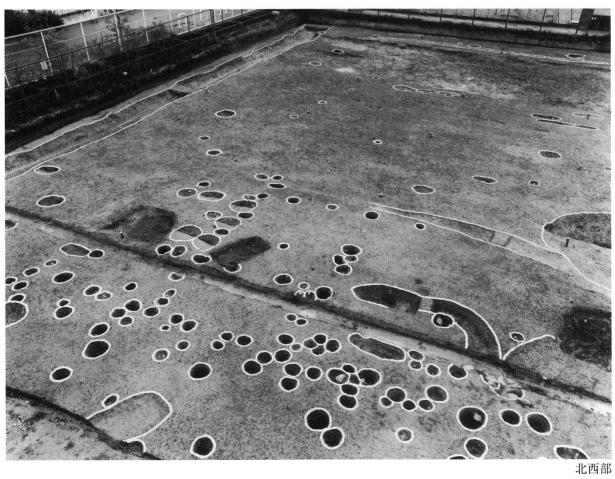
05-105SD〈西から〉

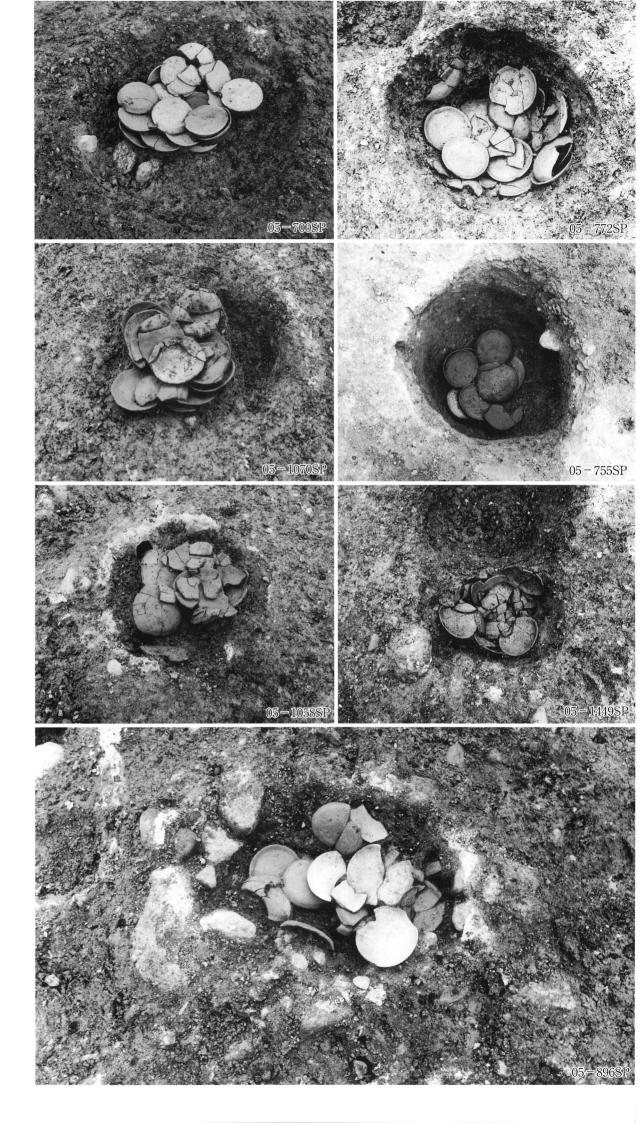




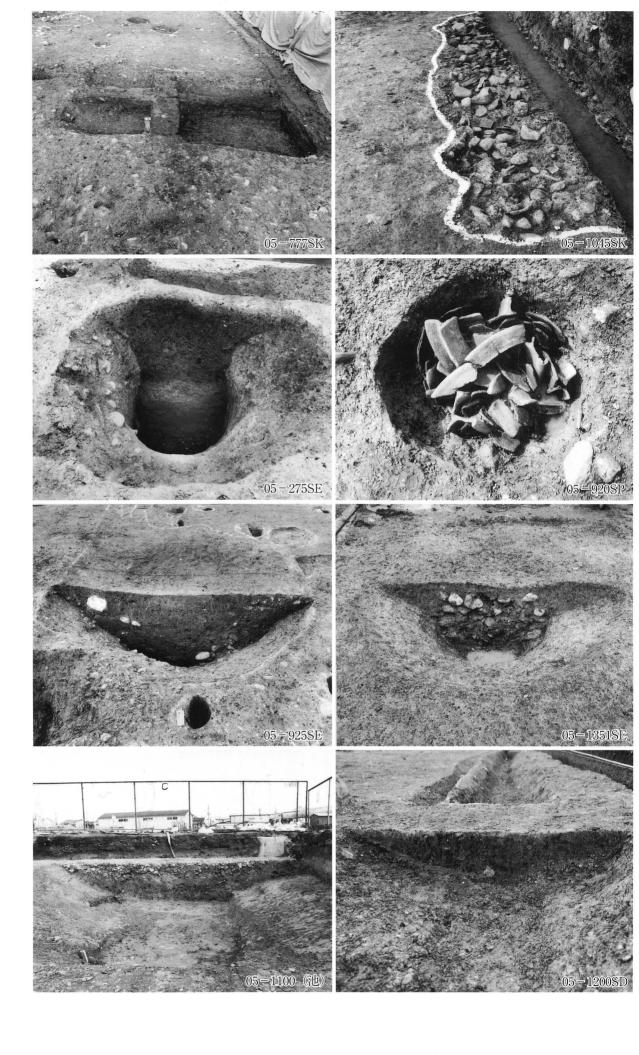
溶解炉2断面



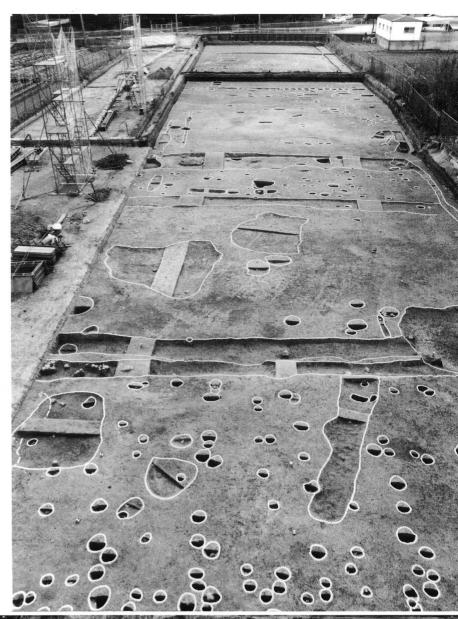




図版 7 A区各ピット

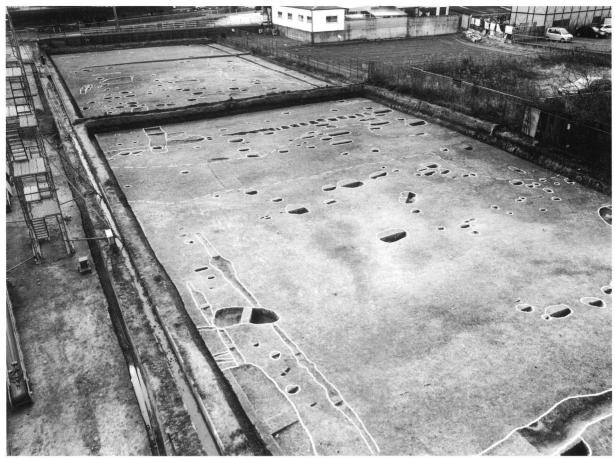


全景 〈北から〉

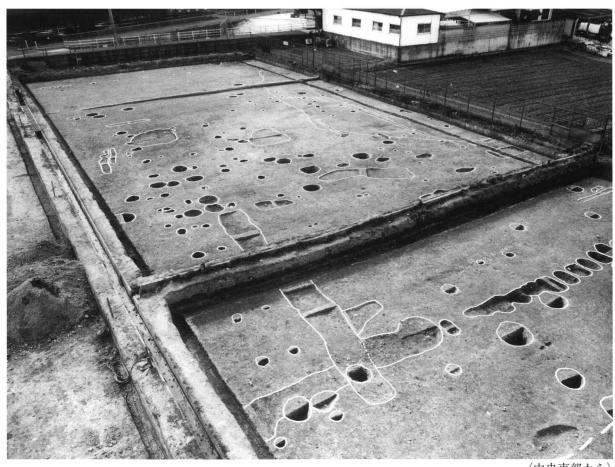


04 - 350SD, 04 - 400SD

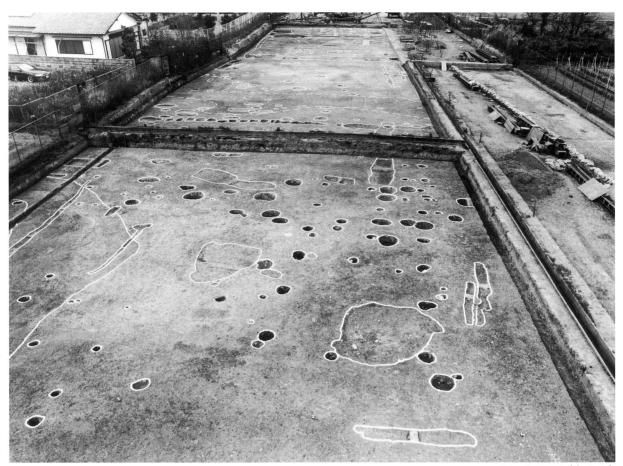




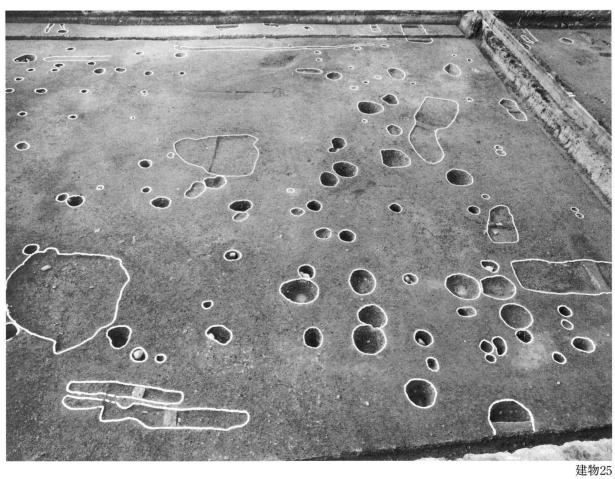
〈北東から〉



〈中央東部から〉



04-068SK 〈南から〉





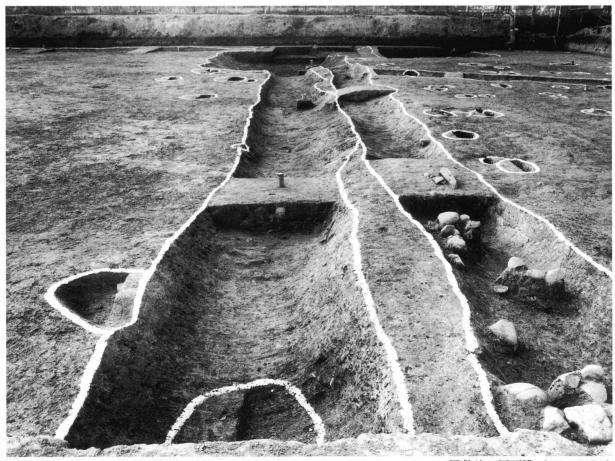
河道跡と04-030SK



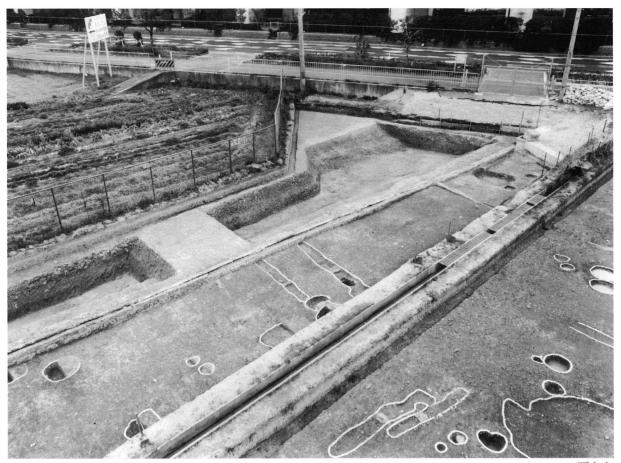
採土坑群



全景

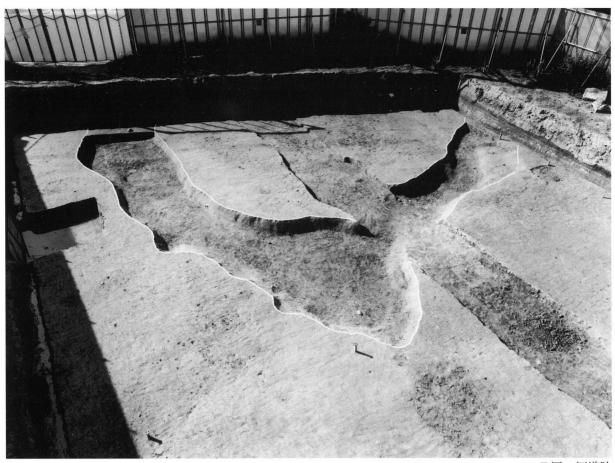


屋敷地1区画溝 (04-500SD)



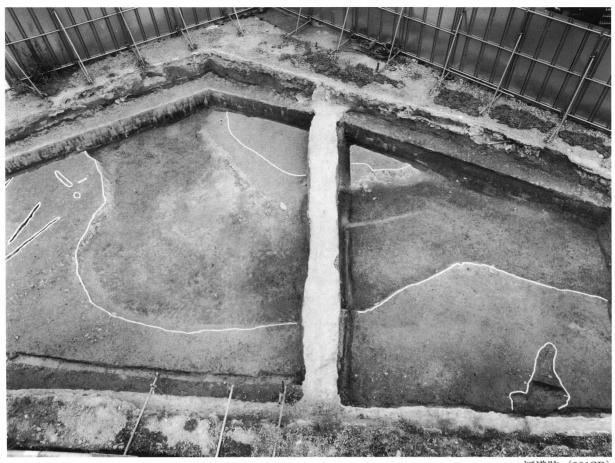
西から





E区 河道跡

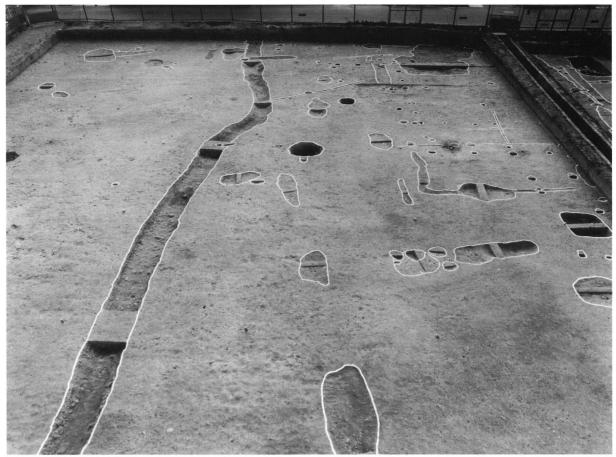




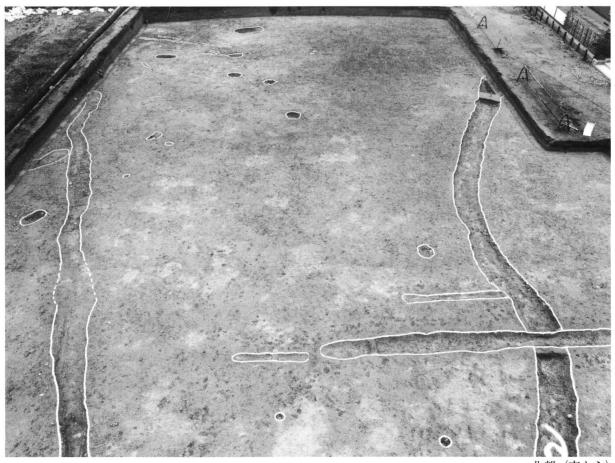
河道跡(001SR)



南部遺構



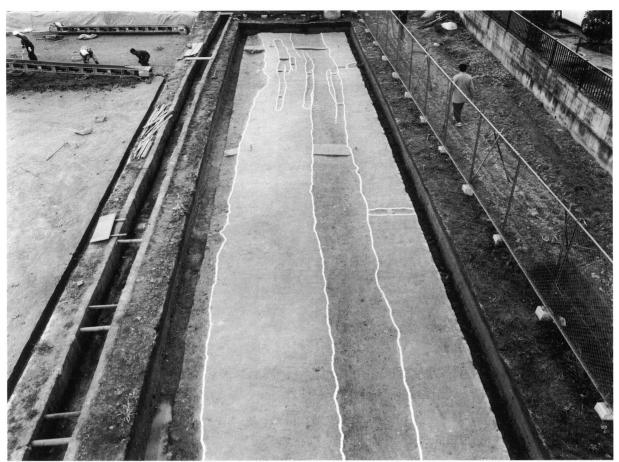
南部〈北から〉



北部〈南から〉



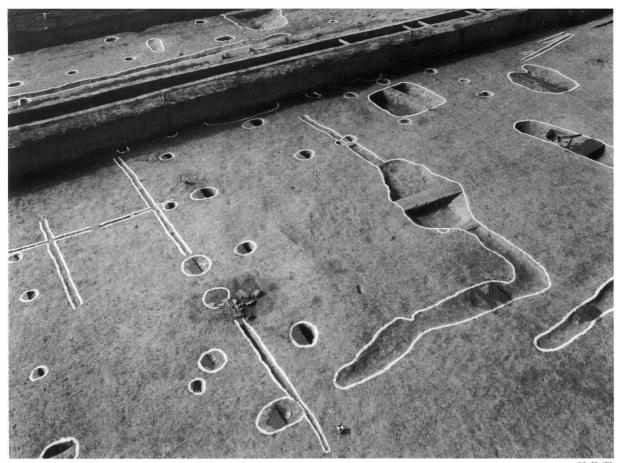




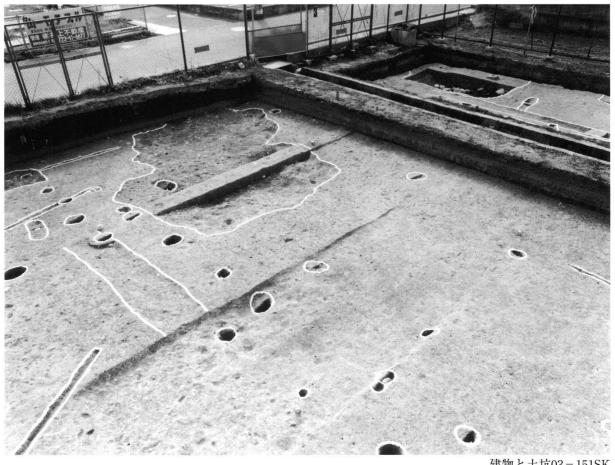
上層近世遺構



下層中世遺構



建物群

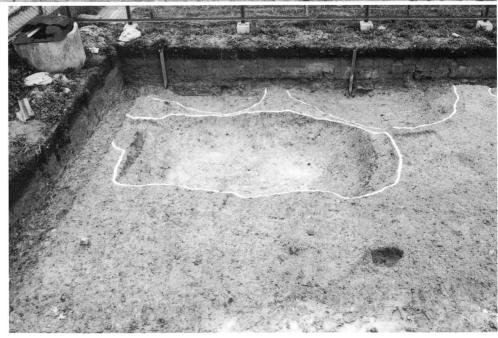


建物と土坑03-151SK

図版20 G西区 03-130SK









03-130SK出土土器



余部城堀出土土器



04-030SK出土土釜



04-030SK出土土器



04-301SK、04-607SK出土土器





04-550SK出土土器



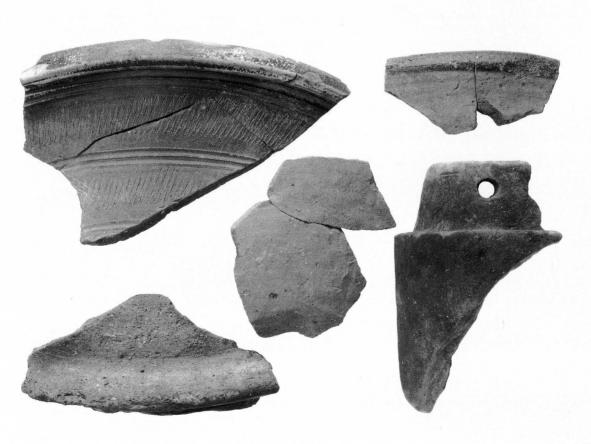


04-620SK出土土器





04-650SK出土土器



04-673SK出土土器



04-680SK出土土器



04-700SE出土土器



余部城西堀出土土器・陶器



04-475SK、05-920SK出土土器



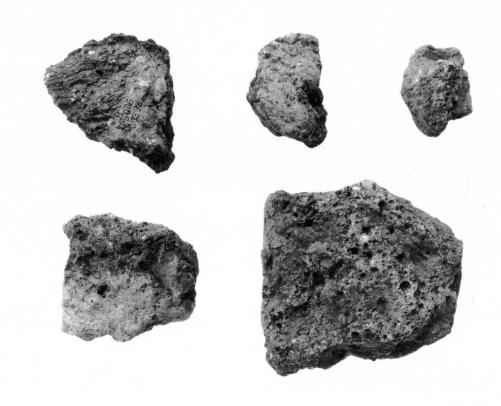
05-105SD出土土器



05-105SD出土土器



05-105SD出土土器



05-105SD出土溶解炉片



05-270SK出土土器



05-445SK出土土器



05-555SK出土土器



05-700SK出土土器



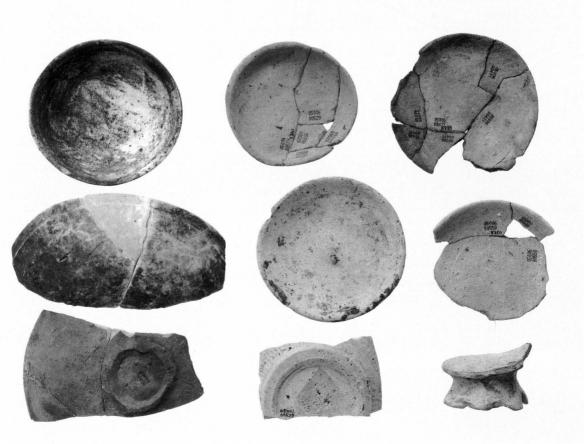
05-755SP出土土器



05-772SP出土土器



05-896SP出土土器



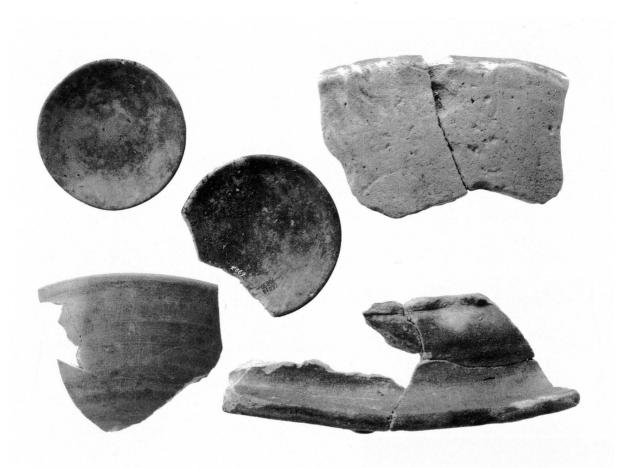
05-900SP出土土器



05-920SK出土土器



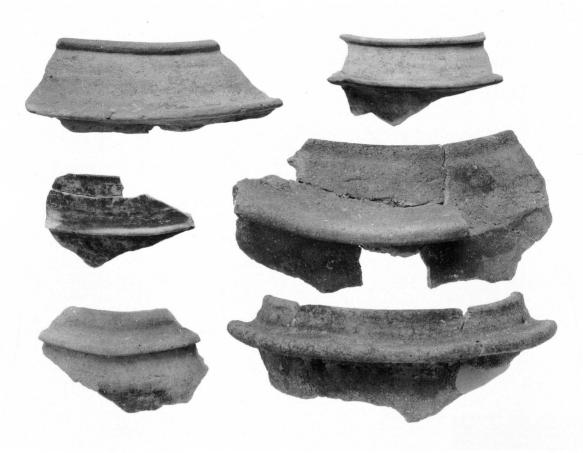
05-937SP出土土器



05-1039SP、1336SP、1347SP出土土器



05-1045SK出土土器



05-1045SK出土土器



05-1045SK出土土器



05-1055SP出土土器



05-1056SP出土土器



05-1059SP出土土器



05-1200SD出土土器



05-1439SP 05-1440SP出土土器



05-1449SP出土土器



05-1092SK出土土器



報告書抄録

ふりがな	あまべひきしょういせき								
書 名	余 部 日	置推進							
副 書 名									
巻 次 数									
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	2007 - 6								
編著者名									
編集機関	大阪府教育委員会								
所 在 地	〒540-0008 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)								
発行年月日	2008年 3 月31日								
ふりがな	ふりがな		コード		東経	調查期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	米 性	阿里 次们间		则且 凉囚	
************************************	おおさかふざかいし 大阪府堺市 みはらくきたあまべ 美原区北余部		184	34° 31′ 55″ ~ 32′ 15″	35° 32′ 50″	2004年1月~2009年3月	10,500	主要地方道 大阪狭山線 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	構	主な遺物		特記事項		
あまべひきしょう 余部日置荘 いせき 遺跡	集落	鎌倉時代	屋敷地・鋳 土採穴 土坑	造工房	瓦器・土師器		中世河内鋳物師の本拠地の ひとつである。 戦国時代まで使用された 余部城の堀を検出した。		
	鎌倉時代の溝で区画された屋敷地、工房区画を検出した。								
要約	工房では2基の溶解炉が出土した。								
	余部城の西城	3城の西堀と北堀を検出した。							

大阪府埋蔵文化財調査報告2007-6

余部日置荘遺跡

発 行 大阪府教育委員会

〒540-0008

大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06 - 6941 - 0351

発行日 2008年3月31日

印 刷 石川特殊特急製本株式会社



付図1 A区遺構図

10m



